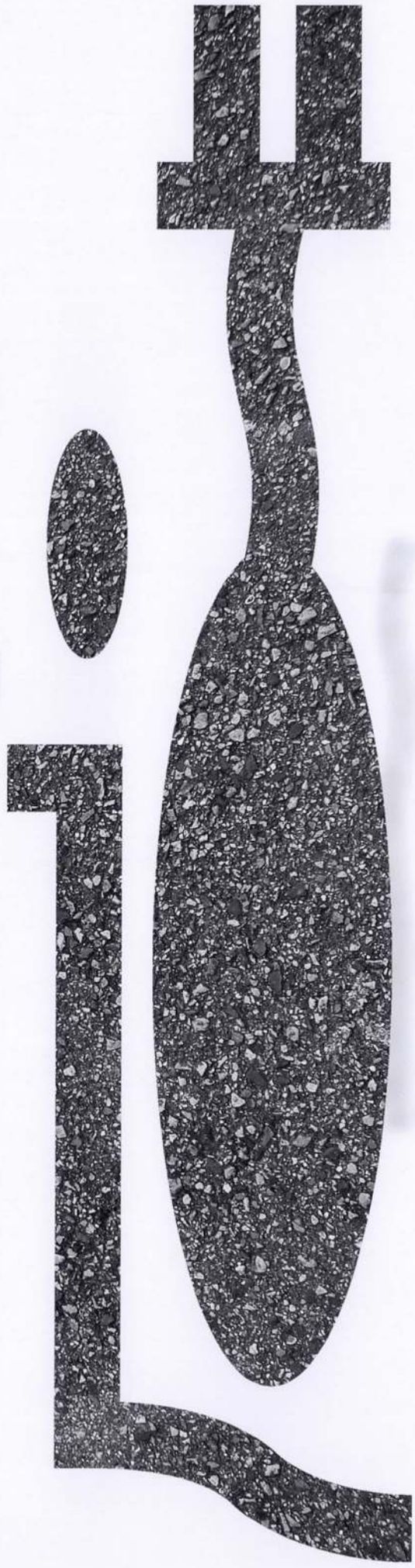
建築と社会

Architecture and Society

2007
No.1020
日本建築協会
03

東海支部会員作品2007
＋東海支部特集3部作





「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年7月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正6年3月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階B室
TEL 06-6946-6981　FAX 06-6946-6984

頒　　価　1部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」…

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壮一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

社団法人 日本建築協会

創立90周年記念式典・シンポジウム・祝賀会のご案内

本会は、本年３月30日に創立90周年を迎えます。この意義ある年を記念して、記念式典・シンポジウム・祝賀会を開催いたしますのでご案内申し上げます。
参加ご希望の方は、下記申込書によりFAXでお申し込み下さるようお願い申し上げます。

記念式典・シンポジウム・祝賀会
平成19年**3月30日**（金）15：30より
場所／**東天紅**　大阪市中央区大手前1-7-31　OMMビル20階
TEL06-6944-1015

1 記念式典（15：30～16：15）
- 式辞・来賓祝辞
- 感謝すべき方々への謝意
- 第７回日本建築協会賞*表彰
- 定員　150名

*日本建築協会賞とは
建築に関するあらゆる分野において、社会に貢献した団体または個人に対しその業績を称える賞。
今回で７回目。

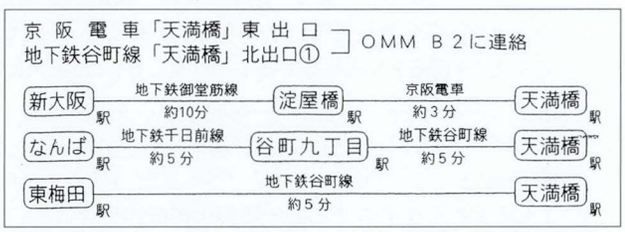
2 シンポジウム（16：25～18：25）
- テーマ“近代建築力”再発見！
- 講　師　坂本勝比古（神戸芸術工科大学名誉教授）
  松隈　章（竹中工務店大阪本店設計部）
  栗本智代（大阪ガスエネルギー・文化研究所）
- 定　員　150名

（その他、シンポジウムの詳細は次頁参照）

3 祝賀会（18：35～19：35）
- 立食スタイル
- 会　費　5000円
- 定　員　150名

●申込方法
下記のFAX申込書にてお申し込み下さい。（先着順）
（参加証は発行しませんので、この案内に沿ってご参集下さい）
●申込先
（社）日本建築協会総務課
TEL：06-6946-6981、FAX：06-6946-6984
Email：soumu@aaj.or.jp
●申込締切
2007年３月23日（金）
●祝賀会会費納入方法
事前に下記口座へお振り込みいただくか、当日受付にてお支払い下さい。（口座名義　社団法人日本建築協会）
- 郵便振替口座　00910-9-39975
- 三菱東京UFJ銀行瓦町支店（普通 NO.210054）
- りそな銀行北浜支店（普通 NO.272234）
- 三井住友銀行大阪中央支店（普通 NO.860034）

●交通案内



創立90周年記念式典・シンポジウム・祝賀会
参加申込書

FAX：06-6946-6984

1．申込区分（ご参加いただけるものすべてに○印をして下さい）
　記念式典出席 ・ シンポジウム出席 ・ 祝賀会出席
2．申込者氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　3．所属＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
4．連絡先
　住所 〒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　TEL＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
5．祝賀会会費の支払い方法（○印をして下さい）
　三井住友 ・ 三菱東京UFJ ・ りそな ・ 郵便振替 ・ 当日現金持参

日本建築協会

会告

日本建築協会90周年記念事業　記念シンポジウム

「“近代建築力”再発見！」

独自の建築文化を形成してきた関西の近代建築の歩みを振り返るとともに、近年盛んになってきた近代建築を活かした企画事例を紹介し、様々な可能性を秘めた「近代建築力」による都市づくりの可能性について探っていきたい。

＊

■日時　平成19年（2007年）3月30日（金）16：25～18：25
■会場　地下鉄「天満橋」 OMMビル20階「東天紅」
■定員　150名

＊

〈基調講演〉「関西の近代建築を支えた人々」
——坂本勝比古（神戸芸術工科大学名誉教授）
関西の近代建築は関東に対する対立軸として華々しい発展を遂げてきた。それはこの地が我が国資本主義興隆期に、商工業の中心地として位置付けられてきたからに他ならない。その中核としての日本建築協会の誕生があり、これを支えた人々の活動は、まさにこの国の近代建築のドラマチックな展開を可能とした大きな要員の一つとなっている。これからの日本建築協会のさらなる飛躍への一助とすべく、関西における建築史家の重鎮として、その90年の歩みを振り返り、その足跡に光を当てて語っていただく。


坂本勝比古 氏

1949年－神戸工業専門学校建築科卒業
1949年－神戸市復興局建築課勤務
●イタリア政府給費生としてローマへ留学後、千葉大学、神戸芸術工科大学教授を歴任。

〈パネルディスカッション〉

●発信-1
「建築を社会に開いていく—近代建築から学ぶ活動を通じて」
——松隈 章〈竹中工務店大阪本店設計部〉
阪神大震災以降に松隈氏がかかわった「武田五一・芝川邸実測調査」「関西のモダニズム建築20選展企画・実施」「共同企画：近代建築は関西がおもしろい！見学・講演会企画・実施」「ドコモモ100選展in大阪の企画・実施」などの紹介を通じて、「近代建築から学ぶこと」「建築を文化として残していくこと」「建築を社会に開いていくこと」などについて「設計者」そして「キュレーター」「企画者」といった視点から語っていただく。


栗本智代 氏

1988年－奈良女子大学家政学部卒業
1988年－大阪ガス㈱入社
1991年－大阪ガスエネルギー・文化研究所
●現在、大阪の個性や魅力を探求し、まち歩きコースや観光ルート開発に取り組む。

●発言-2
「大阪まち文化を支える近代建築の可能性」
——栗本智代〈大阪ガスエネルギー・文化研究所〉
近代建築物の維持保存の一環として、特に大阪では、各々の建築様式や雰囲気を大切にしながら、現代的な視点で、カフェやレストラン、ショップなど、開かれた「場」が数々創られ、大阪の活性化に大きく貢献している。こうした事例を紹介しながら、今日の都市文化の一翼を担う「近代建築力」を語っていただく。


松隈　章 氏

1980年－北海道大学工学部建築工学科卒業
1980年－竹中工務店入社
●現在、大阪本店設計部勤務。「関西のモダニズム建築20選展」企画の一人として活躍。

●ディスカッション
テーマ　　**「都市づくりに活かす“近代建築力”」**
パネリスト　坂本勝比古・栗本智代・松隈章
司　会　　佐野吉彦（日本建築協会会長）


司会／佐野吉彦

1981年－東京理科大学大学院工学研究科（建築学専攻）修了
1981年－竹中工務店入社
●現在、安井建築設計事務所代表取締役社長。日本建築協会会長。

お申し込みは前頁の申し込み書にてお願いいたします

今月の表紙
企画・デザイン　高橋 善丸

建築と社会

Architecture and Society　JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN
1917年創刊　第88集　通巻1020

2007 03

■特集予告
4月号／90周年記念号「この10年、これからの10年」
5月号／「あそび」考

編集委員会（平成18年度）
■副会長
井上　豊
中井　進
■編集担当理事
上原　正行
岡田　聿之
木戸　徹
佐藤　栄一
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
吉村　英祐
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
田中　直人
髙橋　和也
辻　武之
紅谷　昇平
松田奈緒子
△三宅　次郎
森　康郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
安部　新二
△荒木　宏之
江副　敏史
奥村　朋孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
小林　優子
所　千夏
野田　隆史
枇杷　健一
松森　織江
★インテリア・住宅系
阿部　泰浩
加藤　力
神谷　浩司
黒栁　亮
高野　直樹
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
本山　仁
□構造分科会
秋田　智
岸本　光平
木下　隆嗣
澁野　敦夫
鶴田　潤
△中塚　光一
難波　尚
肥嶋　好浩
房安　智也
向井　洋一
安野　郷
□設備分科会
△赤澤　正治
石井　勝秋
梶井　宏修
河井　康人
近藤　国夫
谷野　太志
夏井　重行
福谷　周
桝井　貴廣
村上幸三郎
山下　修
□施工材料分科会
石原　卓也
平田　茂良
平野　剛
△藤丸　啓一
山岡　篤人
吉田　正友
□法令分科会
△赤井　英穂
片岡　正和
七堂　元敏
中迫　悟志
根岸　芳之
文山　達昭
山口　一郎
■作品作風小委員会
赤城　隆
石塚なぎさ
居内　章夫
○井上　雅祐
稲垣　和江
池上　明
川上比奈子
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
楠野　淳司
豊田　充広
中村　文紀
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
荒木　俊明
今井　成年
大竹　賢次
○虎谷　伸幸
古畑　健一
○前田　衛
森川　幸信
◎委員長　○副委員長　△幹事

印刷　2007年2月25日
発行　2007年3月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定価　1200円〔税込〕

特集●　東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作

■東海支部会員作品2007
金城大学医療健康学部 — 16
名古屋経済大学高蔵高等学校・中学校 — 18
嬉野保育園 — 22
特別養護老人ホーム　志摩シルバーケア豊壽園 — 23
新東工業株式会社豊川製作所3号館（技術・開発センター） — 24
株式会社水甚第三ビル — 26
RICCO栄 — 28
コンフォートホテル中部国際空港 — 30
■街道・宿場町シリーズ
街並みの形成と保存、修復活動の現状を訪ねて
伝統的建造物群保存地区の成立と課題―妻籠宿・奈良井宿を中心として●沢田多喜二 — 33
馬籠宿―町並み景観形成の歩み●大脇修二 — 37
妻籠宿―その保存の事例について―●遠山高志 — 40
宿場町奈良井の形成と町並み整備の実際●石井健郎 — 42
木曽路を行く●今津芳清/加藤亜紀子/小宮三辰/林　金之 — 44
■東海の建築事例紹介：ガラス
ガラスを主題に構成したファサード―RICCO栄●池村忠久 — 50
「ガラス」への試み―愛知大学研究館/同朋大学Doプラザ閲蔵●益田正博 — 51
健康館フェニックス●町田伊左雄 — 52
モード学園スパイラルタワーズ●若林　亮 — 53
■東海支部会員が語る
支部機関誌「東海の建築」の発行と支部活動の役割りを考える
●東海支部「東海の建築」編集委員会 — 54

会告
社団法人日本建築協会創立90周年記念式典・シンポジウム・祝賀会のご案内. 1
日本建築協会90周年記念事業記念シンポジウム「"近代建築力"再発見!」

作品作風
大阪城南女子短期大学第一学舎 食実習棟 4
かね善本社ビル 6
シティタワー西梅田 8
宗教法人 天聖真美会宣教本部（再掲載） 10

研究の風景
建築・都市計画論領域
（大阪大学大学院工学研究科　地球総合工学専攻 建築・都市デザイン学講座） 12

gallery
街と共鳴する（志柿敦啓）●澤田純一 14

法令コーナー
バリアフリー新法―施策、取り組みを中心に―●竹田　茂 57

構造の頁
天満天神繁昌亭の構造設計●廣田右喬 58

追悼
横尾義貫氏を偲んで●中村恒善 59

information
環境省主催のセミナーふたつ. N値とその利用技術講習会. UIA2011の早期割引登録制度. 小規模多機能サービス拠点の計画に関するシンポジウムII. 第20回大阪市ハウジングデザイン賞受賞作品. ATC関西学生卒業作品展. 世界あやとり紀行展. 具像彫刻UNIT STRUCTURES.「近世 都の工芸～京の美意識と匠の世界～」展. 西宮市大谷記念美術館「新収蔵品展」. 公募展・第13回松伯美術館花鳥画展.「狭山池のかたち」展. ダリ展―創造する多面体. 大エルミタージュ美術館展―京都市美術館でー. 徳岡昌克の建築世界 作品展. 千代紙いろいろ 小間紙の世界 60

月間の動き
平成18年12月・19年1月分 63

会員の横顔
山田修氏 64

特別企画
防水・人と地球にやさしい建物を目指して…②新しい防水仕上げ材
日新工業株式会社 68



作品
作風

設計・監理■
安井建築設計事務所

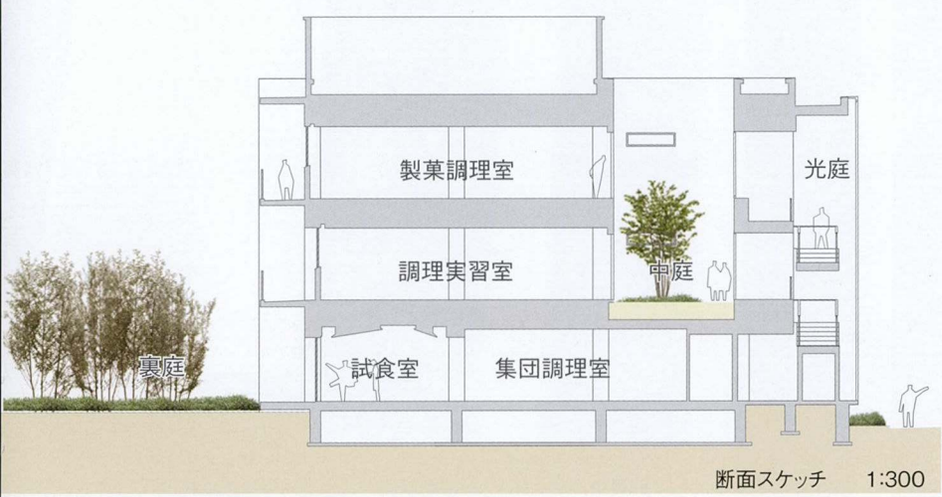
施工■
大林組

大阪城南女子短期大学 第一学舎 食実習棟

交流を育む３つの庭づくり

学園は幼稚園から４年生大学までの総合教育を展開しており、ゆとりのある教育環境や街に開かれた環境整備を第一としている。今回建物は、城南女子短期大学の第一学舎に増築される調理実習棟の計画であり、学園の基本方針に沿って様々な交流環境を提案している。
限られた面積の中、必要諸室を機能的にまとめると共に、中庭を中心とした３つの庭により建物を構成することで「ゆとり」のある環境を実現しようと考えた。
１つ目の庭は建物のセンターに配置した中庭である。中庭によって調理室と外部とをゆるやかにつなげている。また、中庭を介して視線の抜けと奥行きをつくり出すことで、学生の実習風景を発信できる環境としている。
２つ目の庭は既設校舎の裏庭の緑を借景として利用したものである。試食室の大開口から緑をとり込み、調理室と一体的な食空間を構成している。
３つ目の庭は階段室をガラスで覆った光庭である。昇り降りする人々は縁取られた空を垣間見ることができる。また、街への情報発信として、光庭は生徒の活動を地域にアピールする場所にもなっている。
３つの庭と屋内を立体的につなげることで、実習環境を向上させ、学生同士の交流や街との関係性を深めたゆとりづくりを行っている。

（寺岡宏治・清原健史/安井建築設計事務所）



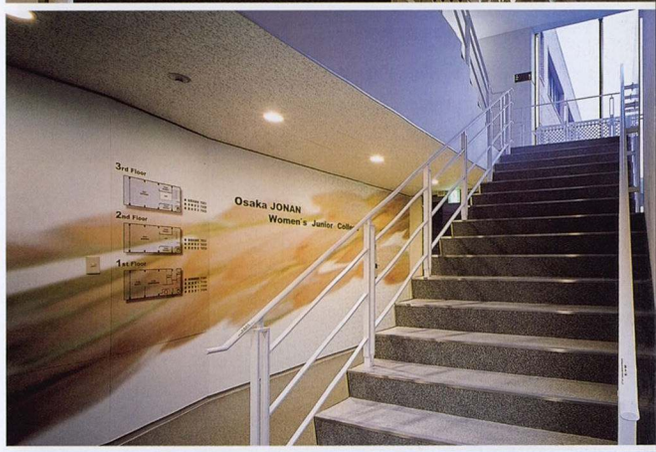
断面スケッチ　1:300

所 在 地 ――大阪市東住吉区湯里
敷地面積 ――2,524.68㎡
建築面積 ――244.92㎡（増築部）
延床面積 ――574.46㎡（増築部）
構造規模 ――RC造/３階建（増築部）
工　　期 ――2006年３月～2006年９月
最 寄 駅 ――大阪市営地下鉄喜連瓜破駅
撮　　影 ――SS大阪（津田裕之）

左　　：建物の中心に位置する中庭
右上　：裏庭に面した開放的な試食室
右中上：空を縁取る光庭（階段室）
右中下：稲穂（食の根源）をモチーフとした掲示板（エントランス）
右下　：生徒の活動を地域にアピールする正面外観











作品
作風

設計・監理■
安井建築設計事務所

施工■
竹中工務店

かね善本社ビル

元気のでるオフィスをつくる

昭和５年に創業した㈱かね善は、食品原材料販売を中心とし、オリジナル商品「丹波の黒太郎」の企画・開発・販売を行うなど、発展を続ける総合食品商社である。敷地は交通量の多い今里筋を西面に擁し、地下鉄出入口に隣接した利便性の高い場所に位置する。

計画には、「社員が自慢」「本気で取り組む」「若さ・元気」という「かね善らしさ」を追及し、今里交差点の景観をリードするインパクトある外観、社員の居住性と使いやすさが求められた。

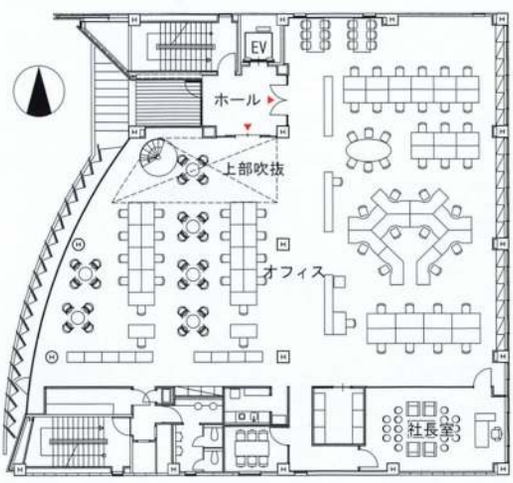
やわらかな光をつくる有孔ルーバー

デザインの核となる西面ファサードは、人々を建物へ誘導する円形の壁面形状に沿わせ、丹波地方の黒豆畑をモチーフにした有孔ルーバーを設置した。今里筋の騒音緩和に寄与するとともに、昼間は西日の大部分を遮蔽しながら内部にやわらかな光を導き、夜間は外部に向けてやさしい光を放つ。

社員の一体感をつくるワンルームオフィス

社長室も含めて全ての部署をワンフロアに集め、社員が互いを見渡すことができ、刺激を受けあうオープンな環境づくりを行っている。またオフィス出入口部分に吹抜を設置し、３階ラウンジと連続させ空間の広がりとともに活気を建物内に広げ全体の士気の高揚につなげることを意識した。

この本社屋完成により、かね善の歴史に新たな変革点が訪れ、今里交差点のランドマークとしてやさしい光を行灯のように発信し続けることを期待している。　（寺岡宏治・奥貴人/安井建築設計事務所）



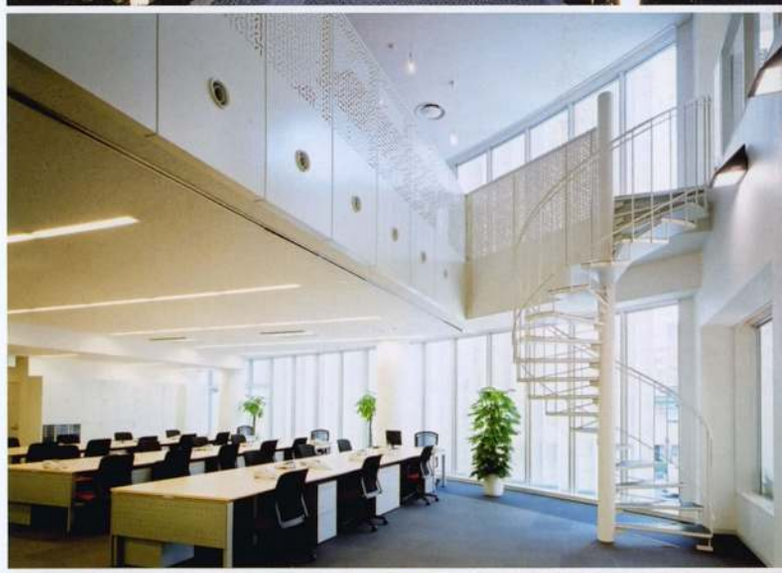
２階平面図　1：400

所 在 地 ――大阪市東成区大今里
敷地面積 ―― 916㎡
建築面積 ―― 590㎡
延床面積 ――2,180㎡
構造規模 ――S・SRC造/４階建
工　　期 ――2005年10月～2006年10月
最 寄 駅 ――大阪市営地下鉄今里駅
撮　　影 ――SS大阪（鳴田）

写真左：時間の経過と共に様々な表情を映し出す有孔ルーバー
右上　：今里筋からのぞむ全景
右中上：エントランス夜景
右中下：オフィスに活気をもたらすワンルームオフィス
右下　：オフィスと吹抜でつながる社員のためのラウンジ　奥に豆の木オブジェをのぞむ











作品
作風

設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

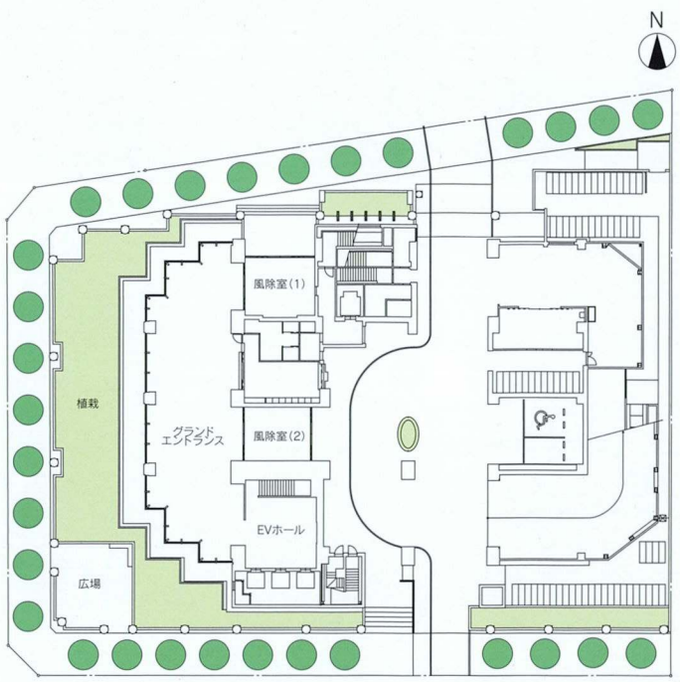
シティタワー西梅田

シティタワー西梅田は、都市のランドマークとなり、これからの都市型超高層集合住宅の指標となる建物を目指した。眺望にこだわり、バルコニーのあり方を再構築し、外装をガラスのカーテンウォールで構成することにより、斬新かつ先進的なファサードをもつ近未来都市型超高層住宅がここに完成した。

本計画のために独自開発したバックボーンチューブ構造の採用により、コーナー部において梁の無い架構型式が可能となり、足元から天井までを開口部とした、パノラマウインドウによる比類ない眺望をもつ居住空間が実現した。

また、1階と9階にエントランスを設けたダブルエントランス方式や、居住ゾーンを10階以上に設けた計画により、都市生活における居住性やセキュリティが飛躍的に向上。さらに、世界最高層となる超高層免震構造や、オール電化の採用は、周辺地域を含め、そこに暮らす人々に安心と安全をあたえ、環境にやさしい建物としている。

(菅　孝美・吉田幸正・大野友則/竹中工務店)

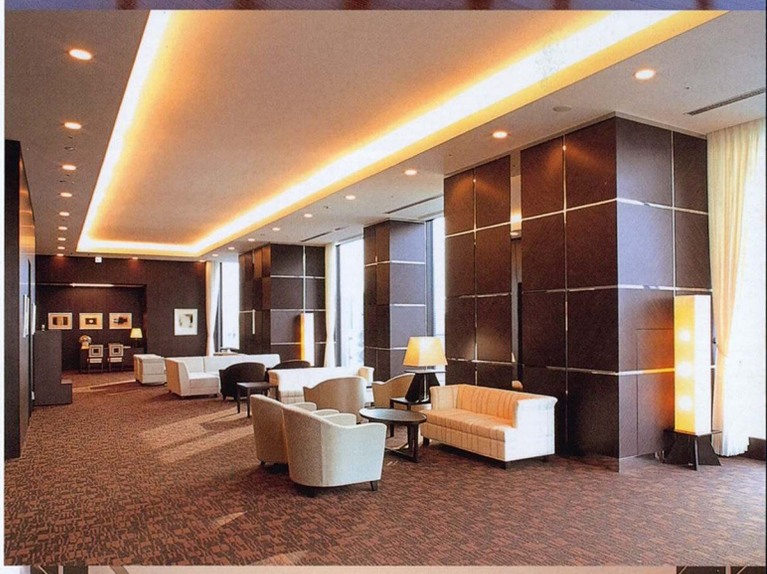


配置図　1階平面図　1:700

所 在 地 ――大阪市福島区福島7-20-2
敷地面積 ―― 3,137.71㎡
建築面積 ―― 1,680.70㎡
延床面積 ――52,772.80㎡
構造規模 ――RC造、一部SRC造　B1F　50F　P2F
工　　期 ――2004年8月～2006年12月
最 寄 駅 ――JR大阪環状線福島駅
撮　　影 ――野口兼史（株式会社　伸和）













作品風作 再掲

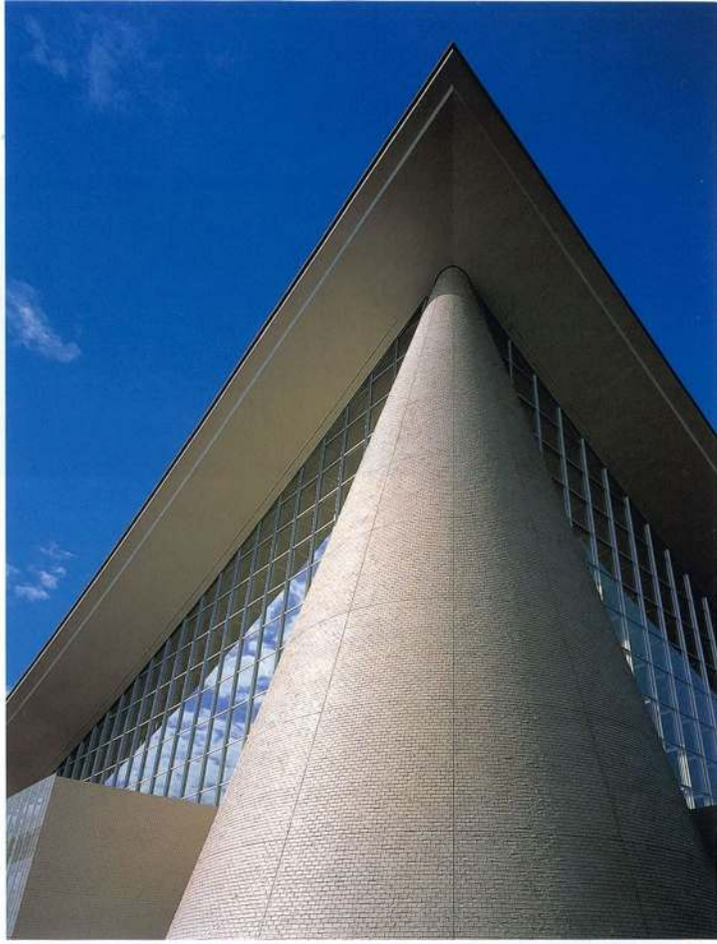
設計・監理■
大林組本店一級建築士事務所

施工■
大林組

宗教法人　天聖真美会宣教本部

建築のコンセプトは、教団の教義の象徴である「御神体を中心に波紋状に広がる光」を具現化し、御神体が鎮座される巨大な円錐柱を頂点とした扇型の大屋根の下に、同心円状に3690人の信者を収容するガラス張りの御神前と諸室を配置した、求心的な空間構成としている。
外観デザインにおいては、「ステンレスの大屋根」、「割り肌の白煉瓦タイル貼の円錐柱と２つの礎」、「隙間を埋める大ガラス面」の３つの要素に限定することで、建築コンセプトを純粋に表現し、宗教的中心と建築的中心が重なり合う建築計画－心の柱を力の柱へ－を象徴的に表現した。
「神館“かむやかた”」実現のため、構造部材はもとより、天井やカーテンウォールなどの非構造部材にも高い耐震性能を追求し、意匠・構造・設備が一体となり、エンジニアリングとデザインの統合を目指した。
特に御神前の天井では、意匠的には「御神体を中心とした波紋状の広がり」を具現化したデザインとし、構造的には「大地震でも仕上げ材を含め損傷の無い」耐震性能を持ち、設備的には「大空間の空調システムと建築デザインとの整合」を実現している。　（井上雅祐/大林組）

所 在 地 ――滋賀県草津市南山田
敷地面積 ――53,561㎡
建築面積 ――　7,764㎡
延床面積 ――11,301㎡
構造規模 ――S造、SRC造、2F
工　　期 ――2003年11月～2005年10月（本殿）・2006年５月（外構、他）
最寄り駅 ――JR琵琶湖線・草津駅
撮　　影 ――河合止揚（アトリエリベラ）







研究の風景

大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻
建築・都市デザイン学講座

建築・都市計画論領域

■メンバー
奥俊信教授、鈴木毅助教授、木多道宏助教授、松原茂樹助手
研究員：3名、 博士課程：7名、 修士課程：16名、
4年生：5名、 研究生：1名

■ホームページ
http://www.arch.eng.osaka-u.ac.jp/%7elabo3/

■所在地
吹田市山田丘 2-1　工学研究科 S-1 棟 8 階

■研究室の歴史

建築・都市計画論領域は、50年近くの歴史を有し、これまで足立孝教授、紙野桂人教授、舟橋國男教授が担当され、また組織改編に伴う名称変更があった後、2005年4月より奥俊信教授が引き継ぎ、現在の体制となった。これまで500名以上の方が研究室を巣立ち、社会のさまざまな分野で活躍されている。

卒業生がまとめられた論文は、唯一無二の財産として研究室に大切に保管され、現在の研究においても活用されている。これら論文を振り返ると、身体・生理、空間論、作家論、形態論、景観、居住環境、施設計画、経路探索、都市計画、人間 - 環境系など、現在の研究にも引き継がれている研究テーマで、文献などを参考にした理論的研究、シュミレーションなどの実験研究、特定の建物や都市に出て行うフィールド研究など多岐にわたる研究を行ってきた。また4年生は卒業論文だけでなく、卒業設計の提出も求められ、これも大切に保管されている。

研究室では、創設時より変わることなく人間と建築・都市空間との関わりを明らかにし計画・設計に関する研究を行う方針のもと、理論的研究や人々の行動や空間・都市のあり方を現象として捉える実験や調査研究に取り組んでいる。また学生の自主性を重んじ、当時研究室で取り組んでいるテーマ以外にも学生が自分で見つけた研究テーマにも積極的に取り組んでいる。

■研究室の日常

現在、研究室には総勢36名が在籍し、普段は研究・コンペ・設計など自主活動を行っている。また留学生も多数在籍し、中国、韓国、ハンガリーから来ている。お互いの文化的相違を超えた人間と空間の関係を理解するために、昔からアジア、アフリカ、南米など海外からの留学生を積極的に受け入れてきた。大所帯だと小回りがきかず、ゼミ旅行の日程を決めるだけでも一苦労するのだが、コンペなどでチームを組むとき、ヨコのつながりだけでなく、タテのつながりもあり、伸縮自在な関係をその時々で築けるのが大所帯ならではの特徴であろう。

ゼミは指導教員別に週1回程度ゼミを行い、それ以外に月に一度研究室メンバー全員が参加するゼミがある。前者のゼミでは、学生の研究に関する議論だけでなく、その時々の話題や他の研究のことなど幅広く議論している。後者のゼミでは、研究の進行状況の報告を行っている。

■現在の研究テーマ

意味や価値の読み取りと新たな計画・デザイン論の構築と適用・実践をはかることを目標とし、下記の研究テーマでさまざまな建築・都市スケールを対象にフィールド調査や研究室でコンピューターを使った実験研究などを行っている。

① 建築・都市の数理形態研究 (奥教授)
② 都市の場所と人の居方に関する研究 (鈴木助教授)
③ 生態幾何学による環境デザイン研究 (鈴木助教授)
④ コミュニティ・デザイン (居住環境の計画と形成)(木多助教授)
⑤ ファシリティマネジメント / 環境マネジメント (木多助教授)
⑥ 高齢者のための生活環境デザイン (松原助手)
⑦ 街角の居場所に関する研究 (鈴木助教授・松原助手)

紙幅の関係ですべてを記せないが、簡単に研究テーマを紹介する。

① 建築・都市の数理形態研究

複雑系理論を適用し、最適もしくは一定の条件を満たす配置形態を求めるため、セルオートマトンによる建築空間配置シュミレーションや都市土地利用形態のシュミレーションをコンピューターで行っている。

③ 生態幾何学による環境デザイン研究

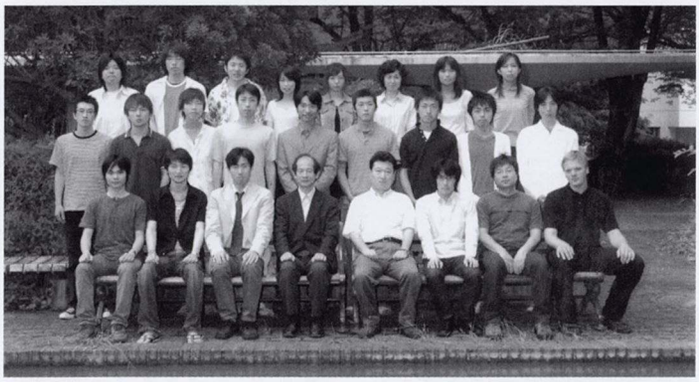
アメリカの知覚心理学者 J.J. ギブソンの生態学的視覚論を元に、身体と環境の関係性に注目し、移動に伴う光学的流動と手応えの分析を行う。この分析を通じて視覚的変化の多様な都市の特徴や開口部の視覚的関係性・分節・連続のデザインの特徴が明らかになりつつある。

⑤ ファシリティマネジメント / 環境マネジメント

吹田・豊中の両地区を抱える広大な阪大キャンパスを対象に建物やオープンスペースのライフサイクルコスト (LCC) や残存不具合率 (FCI) の算定、生活環境改善指向の FM 理論の開発を行っている。

⑥ 高齢者のための生活環境デザイン

高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるための生活環境をつくることを目標に、高齢者 - 施設 - 地域のつながりに注目し、デイサービスや小規模多機能施設ならびにそれらが位置する地域にてフィールド調査を行っている。



研究室メンバー





研究室の様子 (左：これまでの論文、右：活動スペース)

■ 研究方針

人間－環境系としての都市ならびに建築計画・設計について、社会文化的・生態学的・場所論・環境認知などの視点から、現代社会をフィールドとして総合的理論研究とそのフィードバックを行い、新たな計画・デザイン論の構築を試みる。

■ 研究テーマ

人　建築　まち・都市

1 m

高齢者のための生活環境デザイン研究

- 住み慣れた地域で暮らし続けるための生活環境
- 高齢者・地域コミュニティにとっての施設の役割



10 m

都市の場所と人の居方に関する研究

- 都市のパブリックオープンスペースのデザインと視覚の関係性
- 豊かな場所の価値と形成の仕組み

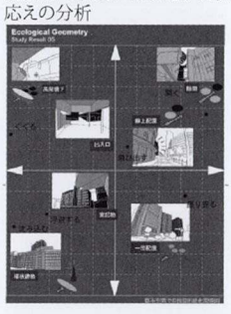


街角の居場所に関する研究

10^2m

生態幾何学による環境デザイン研究

- 建築・都市空間の生態幾何学的分析とデザイン
- 視覚的変化の多様な都市、街と出会う場所、など
- 観察者の移動に伴う光学的流動と手応えの分析



- 新たな公共空間の構築
- 住民が自主運営するコミュニティスペースの役割・価値



ファシリティマネジメント/環境マネジメント

10^3m

- 新しいFM理論：
- 既存の概念の融合・改善
- 参加型環境マネジメント
- 先進事例の調査分析
- フィールド：阪大キャンパス
- 事例調査：海外



コミュニティ・デザイン(居住環境の計画と形成)

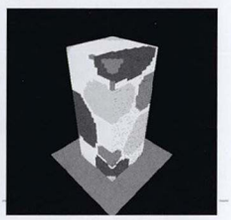
- フィールド：都市、郊外、ニュータウン、伝統的市街地、近隣、高齢者、子供、外国人
- デザイン論：アイデンティティ、ミクスト・コミュニティ
- 形成論：社会空間構造、パブリックヒストリー、など
- 再構築の方法論：アーバンリストラクチャリング、
- 解体、再編、再生、継承



建築・都市の数理形態研究

- セルオートマトンによる建築空間配置のシミュレーション
- セルオートマトンによる都市土地利用形態のシミュレーション



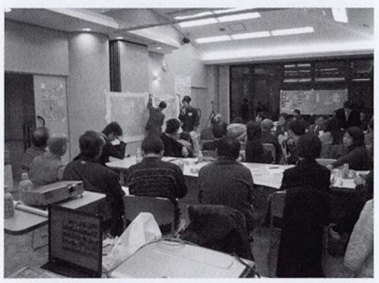


10^4m

研究テーマ概観



卒業設計作業風景 (先に卒論をしあげて卒計に取り組む)



テーマ⑤：地域住民を交えたキャンパス周辺環境に関するワークショップ



テーマ⑥：高齢者と生活を共にしながら長期間行うフィールド調査



テーマ⑦：ひがしまち街角広場で千里中央再開発に関する住民との会合

gallery

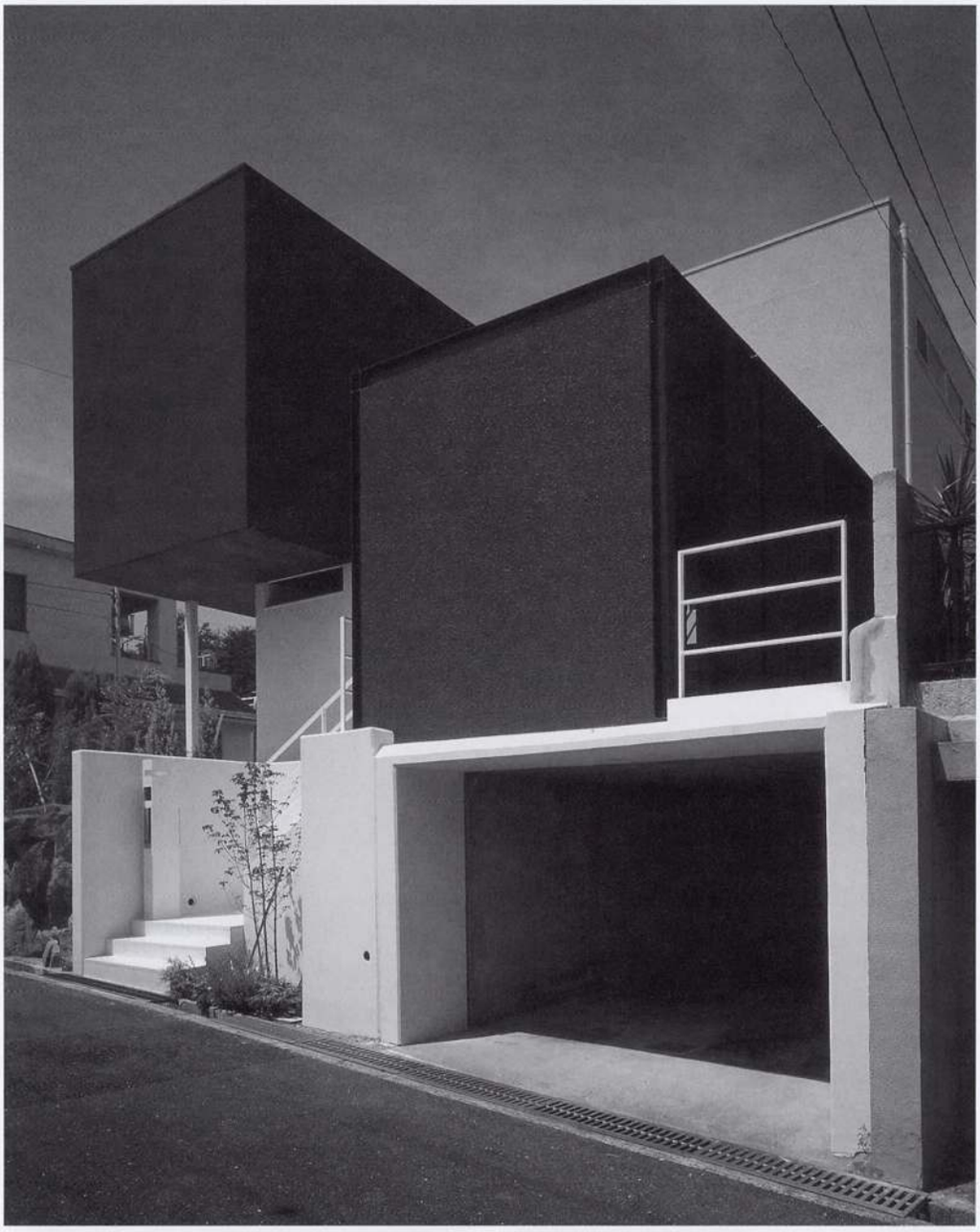
街と共鳴する

設計

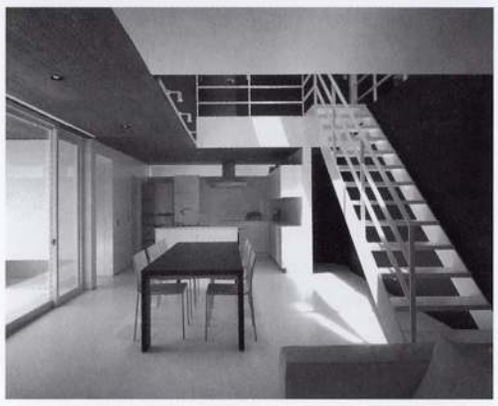
志柿　敦啓

大阪南部の住宅団地にこの住宅は建つ。開発が行われてから時がたち、周囲の家もそれぞれが二世代目に入ろうとしている。当初は無機的な感もあったであろう街並みは、時間をかけてやわらかさを生み出しており、それは近隣との良好な人間関係にも感じとることができる。

敷地は東側を道路に面し、南に歩行者用通路、西に緑豊かな緑道があり、三方に開かれた開放的な場所である。生活の中心であるリビング・ダイニングに、三方からの光や風のみならず、南の庭越しに道行く人の気配や、キッチン上のスリット窓からは緑道をジョギングする人の気配を引き込み、日々の生活を活性化するようにプランを構成した。その構成がそのまま外観に表れている。ボックスをずらしたような構成は、街と呼応し街並みに奥行きとリズムを与えている。この住宅が、家族関係や街とお互いに刺激を与え合い、さまざまな形で共鳴することを願っている。







志柿敦啓（しがきあつひろ）
1968　東京都生まれ
1993　早稲田大学大学院修士課程終了
1993　竹中工務店設計部
2002　志柿敦啓建築設計事務所設立

撮影：平井美行
企画編集　澤田純一（作品作風小委員会）

東海支部会員作品2007

金城大学医療健康学部

名古屋経済大学高蔵高等学校・中学校

嬉野保育園

特別養護老人ホーム　志摩シルバーケア豊壽園

新東工業株式会社豊川製作所３号館（技術・開発センター）

株式会社水甚第三ビル

RICCO栄

コンフォートホテル中部国際空港

東海支部「建築と社会」特別編集委員会
委員長：松本壮一郎
特集記事担当副委員長：林　金之　　同担当委員：今津芳清・中村嘉男
作品作風担当副委員長：土井敬三　　同担当委員：鈴木慶智・若林　亮
デザイン広告担当副委員長：佐伯　博　　同担当委員：小宮三辰・伊藤武夫
委員：寺本英一・石動勝信・植田　明・尾崎武寛・川村秀則・北川貴啓・黒田清宏・後藤利秋・杉澤和男・鈴木道雄・篠原佳則・仙田　篤・富田昌志・中村哲士・福田泰造・別所裕之・松本親司・氷川善雄・森　鉦一・森田富士男・山本敦子・芳山明久


医療健康学部

金城大学医療健康学部

設計・監理　安井建築設計事務所
施　　工　戸田建設

南東に霊峰・白山を望み、北西に日本海を控える田園地帯に位置する金城大学キャンパスの中央に、医療健康学部の新設に伴う新校舎として本施設が計画された。1，2階を講義室、3階を実習室、4階を研究室で構成された本施設には、キャンパス内の既設校舎と調和しつつも新しい大学の顔となる外観や、厳しい北陸の気候条件に対する配慮が求められた。
まず、キャンパスの伝統との調和に配慮して、既設校舎に用いられているコンクリート打放しとレンガタイルを外装材として採用した。その一方で、これまでのキャンパスにない空間としてメタルポイント工法によるガラスカーテンウォールの外壁と2層分の吹抜空間をもつ学生ラウンジをエントランスホールに隣接して設けた。透明感と開放感のある学生ラウンジは、ここに集う学生同士の交流だけでなく、キャンパスを行き交う学生たちとの見る・見られる関係をも生み出すキャンパスの中心的な空間となることを意図した。
冬の日照時間が短く、寒冷多雪な北陸の気候に対しては、光庭やトップライトを設けて自然光を積極的に室内に取り入れ、また庇などの水平突出部を極力少なくすることで雪庇やつららの付きにくい建物とした。内部空間においても、床や腰壁に木質系材料を多用して、少しでもあたたかみを感じられる空間となるよう計画した。
また、南側の彫りの深い窓面や、西日除けの垂直リブなどにより夏場の日射負荷低減を図っている。

（奥村幸生/安井建築設計事務所）







所 在 地 ――石川県白山市笠間町1200
敷地面積 ――105,283.73㎡
建築面積 ――1,886.53㎡
延床面積 ――6,490.51㎡
構造規模 ――RC造、4F
工　　期 ――2005年12月～2007年3月
最 寄 駅 ――JR北陸本線　加賀笠間駅
撮　　影 ――エスエス北陸



正門より校舎を望む

名古屋経済大学高蔵高等学校・中学校

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　小島建設（本館他）
　　大成建設（記念体育館）
　　中京スポーツ施設（グラウンド・テニスコート／設計施工）



グラウンドより校舎を望む

市邨学園は1907年（明治40）日本初の女子商業学校を起源に、2006年学園創立100周年を迎え、その記念事業として長年の懸案だったふたつの校舎をひとつの敷地に統合し、中・高一貫教育を推進する新校舎を建設した。

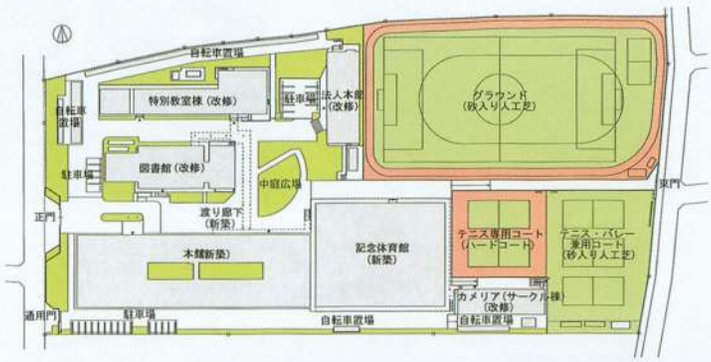
敷地は元愛知県立大学の跡地で、周辺には博物館、大学、その他多くの学校が集まる市内でも屈指の文教地区にある。

学校施設は、県大キャンパスとして昭和30～61年に建築された10棟余りの既存建物の内、４棟について耐震補強と内外装・設備改修工事を施して利用し、本館（普通教室、職員室ほか）、体育館、及び付属棟を新築、整備した。

配置は西側を教育施設、東側を体育施設ゾーンとし、新設の本館と体育館は北側住宅地への日影や騒音に配慮して南に寄せて配置した。特別教室は旧研究室棟を改修してひとつの建物に集約し、図書室は既存の図書館を改修して利用するなど、より充実した教育活動ができるよう教室の機能によって校舎を分け、各校舎間の移動がしやすいよう２階のレベルにおいて渡り廊下で繋いだ。新設の建物の外観は壁部分にタイルを張り、連続した小庇を設けるなど既存建物との調和を図るとともに、維持管理しやすいデザインとした。

（澤村喜久夫／伊藤建築設計事務所）

所 在 地 ――名古屋市瑞穂区高田町3-28-1
敷地面積 ――28,063.19㎡
建築面積 ――　7,550.61㎡
延床面積 ――23,546.36㎡
構造規模 ――RC造、5F
工　　期 ――2005年５月～2006年７月
最 寄 駅 ――市営地下鉄桜通線・瑞穂区役所駅
撮　　影 ――加藤敏明



配置図　1:3000

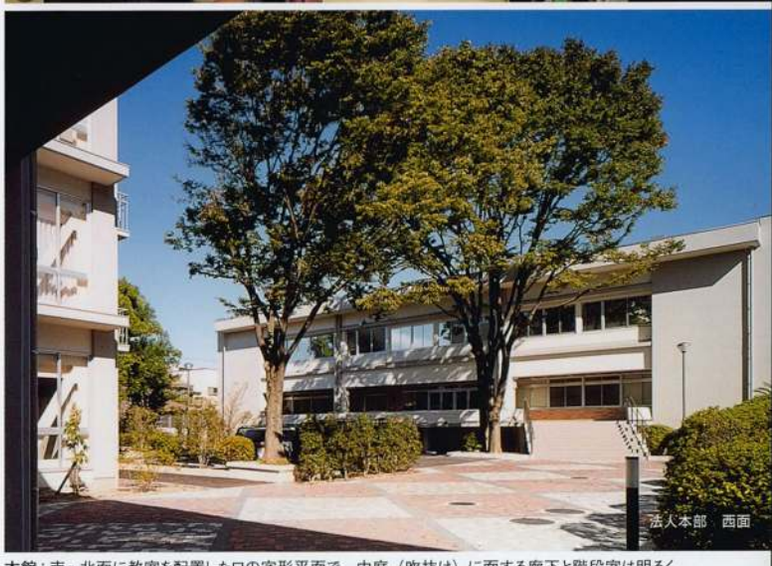

本館　中庭


本館　教室


渡り廊下　東面

渡り廊下・中庭広場：構内の中央には広場と庭園を配置して生徒のコミュニケーションスペースとし、本館、特別教室棟、図書館を繋ぐ渡り廊下（２階）をこの広場の上部に設け、快適な移動空間とした。

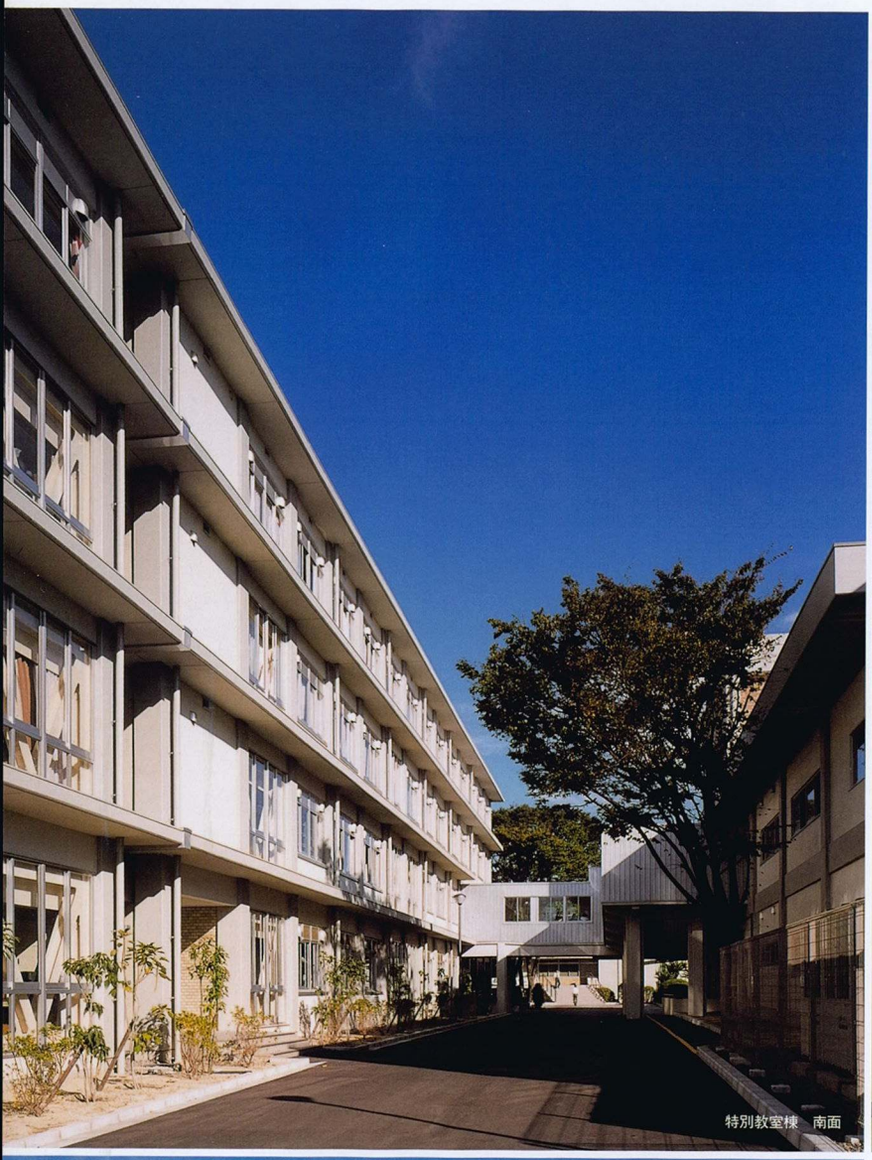
グラウンド・テニスコート：市内初の全天候型人工芝のテニスコートと200mトラックを配置したグラウンドで、近隣への砂塵の飛散防止にも役立っている。


法人本部　西面

本館：南・北面に教室を配置したロの字形平面で、中庭（吹抜け）に面する廊下と階段室は明るく、見通しが利く。教室は桁行９mスパンで窓面に柱型がなく採光も充分確保され、開放感がある。西妻面では壁面緑化により環境負荷低減を図っている。

法人本部：旧学生会館の３・４階を撤去し、法人本部棟として改修、整備した。上階を撤去することで建物重量が軽減され、耐震補強工事は不要となった。

名古屋経済大学高蔵高等学校・中学校


特別教室棟　南面


特別教室棟1階　調理室


特別教室棟　廊下


特別教室棟2階　音楽室


図書館　南面

特別教室棟：旧研究室棟を特別教室に改修した。全館空調設備を装備するため、天井の形状を工夫して必要天井高さと窓高さを確保した。耐震補強方法は教室では外壁面からの採光が確保できるよう、鉄骨によるV形ブレースを設置した。

図書館：当初からの図書館で、閲覧室部分には耐震補強を行い、全面改修して再利用した。書庫の西妻面は既存のタイル面を壁面緑化によって覆い、修景した。


図書館1階　閲覧室

記念体育館　北西面

記念体育館：大小ふたつのアリーナを２階に設け、１階は職員用駐車場とした。メインアリーナの平面は40m×32mで、立体トラス架構の伸びやかな内部空間とした。大屋根に降った雨水を地下貯留槽に溜め、中水として利用している。

カメリア（サークル棟）：旧校舎の西側２スパン、東側６スパンを撤去し、RC造の耐震壁の増設による補強を施し、部室など課外活動を支援する施設に改修した。





カメリア１階　カフェテリア



カメリア　北面











嬉野保育園

建 築 主　社会福祉法人　洗心福祉会
設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　竹中工務店

生命を育み人間の成長を見守り、地域、子ども、お年寄りが集う「嬉野の杜」構想の実現を視野に入れて計画した。保育園としては、子ども達が木立に包まれ、「ドキドキ・わくわく」と冒険心が持てる空間を目指した。クラス名は発育段階にあわせて年齢ごとに、おたまじゃくし、めだか、てんとうむし、かぶとむし、とんぼ、ちょうとした。これらの身近な小動物が木立に隠れて子ども達を見守るように、サイン、ステンドグラス、陶版、壁画、風見鶏などに表現した。

保育室は多様な保育活動が可能となるように、園庭側には深い庇のあるウッドデッキ、廊下側には大きく開放可能な4枚引分扉を設けた。廊下のところどころに子どもたちが少人数で集まれる絵本コーナーや2つのデンを設け、子ども同士のコミュニケーションの訓練ができることを意図した。0-1歳児には保育室から直接フラットで出られる専用の屋外空間を設け、安心して外遊びができるようにした。

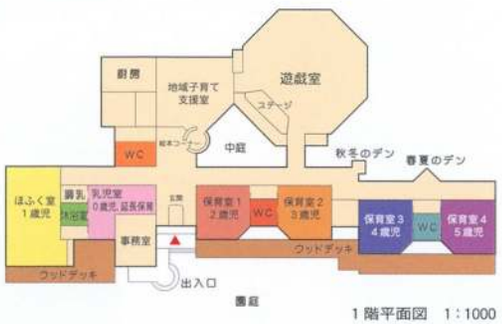
保育室や遊戯室は各所に天窓や高窓を設け、構造材を見せることにより、立体的で豊かな空間を実現しながら、床暖房、天井ファン、高窓からのコールドドラフト対策を行うことで、四季を通じて居心地のよい環境を実現できた。

（篠原佳則・奥村幸生/安井建築設計事務所）

1：園庭より見る
2：中庭
3：春夏のデン
4：絵本コーナー
5：保育室
6：北側より見る



所 在 地 ――三重県松坂市嬉野町1304-9
敷地面積 ――3,500,000㎡
建築面積 ――1,349.04㎡
延床面積 ――1,130.00㎡
建築規模 ――W、1F
工　　期 ――2004年8月～2005年5月
最 寄 駅 ――近鉄伊勢中川駅
撮　　影 ――アーキフォトKATO



1階平面図　1：1000



特別養護老人ホーム

志摩シルバーケア豊壽園

建 築 主　社会福祉法人　洗心福祉会
設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　北村・石吉特定建設工事共同企業体

志摩国立公園内に新築した定員50名の特別養護老人ホームである。以前は企業の保養所でにぎわったこの界隈も社会状況の変化により、多くの保養所が処分されてきている。この土地も２つの保養所を取り壊して建設され、隣接する元竹友荘とともに「志摩の杜」構想の中核を担うことが期待されている。

自然との調和、隣接する元竹友荘との調和を考え、２階建て切妻屋根、割り肌風ボーダータイルの外観とした。２層吹き抜けのロトンダを中心に10名単位の５つの居室ユニットとサービス管理部門を３棟に分けて配置した。セミプライベートの共同生活室は建物端部に設け、窓からの眺望に配慮した。特に西側の横山方面に向かって中庭が広がる棟配置とした。居室にはデンと呼ぶアルコーブを設け、入所者の思い出の品などを並べられるように造り付けの机を設けた。居室入口まわりには飾り棚や小窓を設け入所者ごとの特徴を出せるようにした。

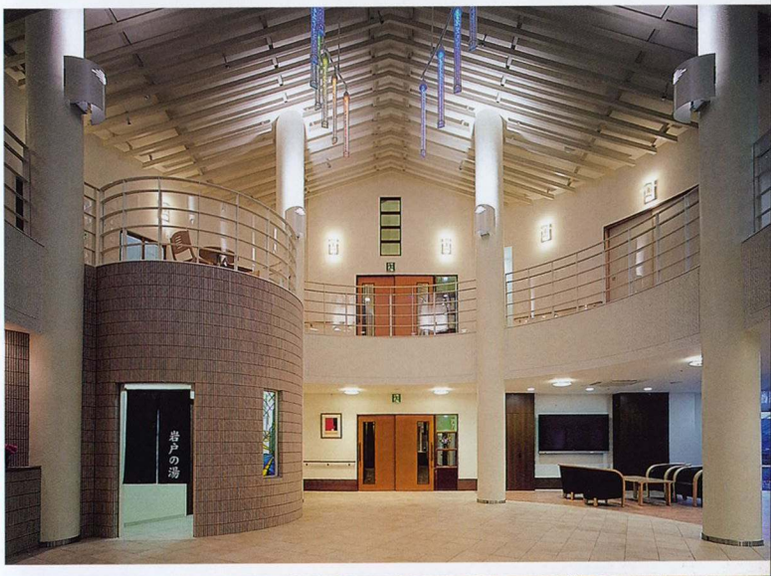
各ユニットは志摩５町の名前とし、共同生活室には地名にちなんだオリジナル仕掛け時計、入口にはユニットの雰囲気を表現する飾り棚を設けた。６つの灯台を模した円柱のあるロトンダまわりには喫茶コーナー、足湯、大浴場などを配置した。

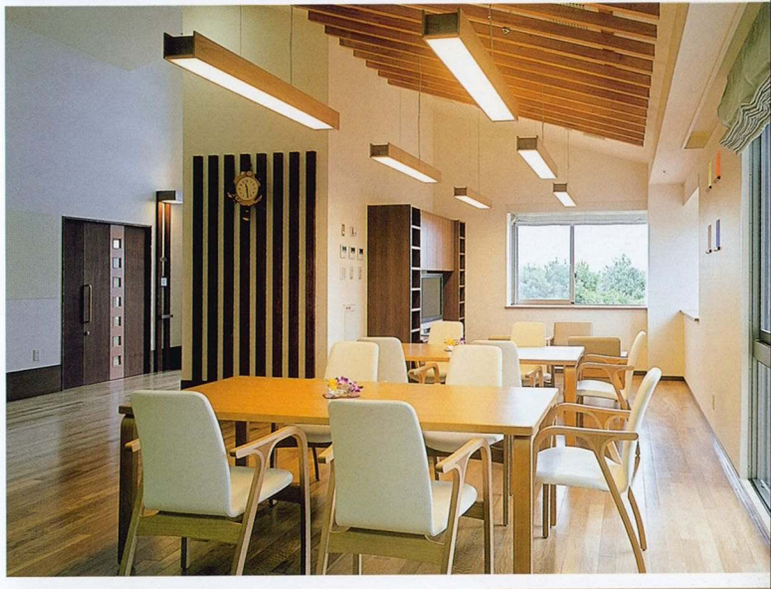
（篠原佳則・中井孝幸※/安井建築設計事務所）※は元所員

所 在 地 ――三重県志摩市阿児長神明字中田878-39
敷地面積 ――8,269.07㎡
建築面積 ――1,380.82㎡
延床面積 ――2,543.65㎡
建築規模 ――RC、2F
工　　期 ――2005年９月～2006年３月
最 寄 駅 ――近鉄鵜方駅
撮　　影 ――SS名古屋

1：西側外観
2：ロトンダ
3：共同生活室
4：デンのある居室
5：中庭を眺む









1階平面図　1：900

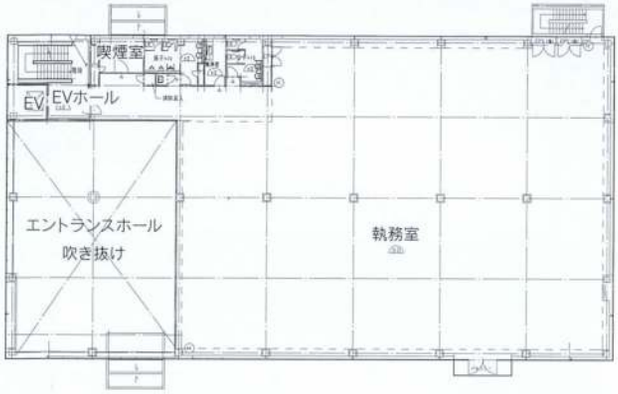












2階平面図　1：500

新東工業株式会社
豊川製作所３号館
（技術・開発センター）

設計・監理　生活工房　仙　一級建築士事務所
施　　工　錢高組名古屋支店

計画地は周辺一帯が戦前の豊川海軍工廠跡地の一画にあり、桜の老木の街路樹や周囲を巡る環濠など、今なお当時の面影を残す地域となっている。
この建物のコンセプトは技術・開発の集約と素形材技術の世界への発信を目指すもので、当企業のシンボルマークである『東から昇る太陽』で象徴されるダイナミックに燃える炎のような行動力と、お客様と共に発展する姿とをイメージするものである。
外観・内観の黒をポイントカラーとしたデザインは、最新の技術と高い知性を世界へ発信するに相応しい格調高さと建物としての堅牢さを表し、吹抜けのエントランスホールは企業の上下、内外間の強力な連携と、高度な技術のコラボレーションを活性化する場として設計した。
事務室や廊下はここで働く技術者の自律神経を活性化し決断と行動を促す赤（朱色）をポイントカラーとし、その他の喫煙室、更衣室などにはコミュニケーションを円滑にするイエローベースのアクセントカラーを配色した。
この色彩計画にはご関係の方のご理解を深めていただけるように、CGパース、CGビデオを活用したプレゼンを実施し、わかりやすい設計に努めた。
また、環境面ではソーラー発電、憩いの屋上緑化、南洋材を使わない基礎・地中梁のメタルラス工法、並びに出入り口廻りのスロープなど地球と人に優しい建物とすることが出来た。なかでも、当初は伐採予定の北口正面の老桜を発注者意向により保存する事となり、アプローチの方向を変更するだけでなく、ポーチ階段のステップ高さを調整し太い桜根を切らない、枯らさないための工夫など現場の方と夜遅くまで協議したことなど、思い出深い作品となった。

（仙田　篤/生活工房　仙）

所 在 地 ――愛知県豊川市穂ノ原3-1
敷地面積 ――121,327.80㎡
建築面積 ――　1,397.87㎡
延床面積 ――　5,207.06㎡
構造・規模 ――S造、5F、P1
工　　期 ――2005年８月～2006年３月
最 寄 駅 ――名鉄豊川線諏訪駅
撮　　影 ――エスエス名古屋











北西面外観

株式会社水甚第三ビル

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　大林組名古屋支店
施工協力　三晃空調名古屋支店（空調・衛生工事）
　　タナカ通信電機工業（電気工事）
　　常磐建工（アルミ製建具工事）

所 在 地 ――岐阜市柳津町流通センター1-18-5
敷地面積 ――2,432.02㎡
建築面積 ――1,618.85㎡
延床面積 ――3,071.45㎡
構造規模 ――S造、2F
工　　期 ――2006年３月～2006年８月
最 寄 駅 ――岐阜バス〈岐阜聖徳学園大線〉岐阜流通センター
撮　　影 ――SS名古屋



西側よりポーチを望む

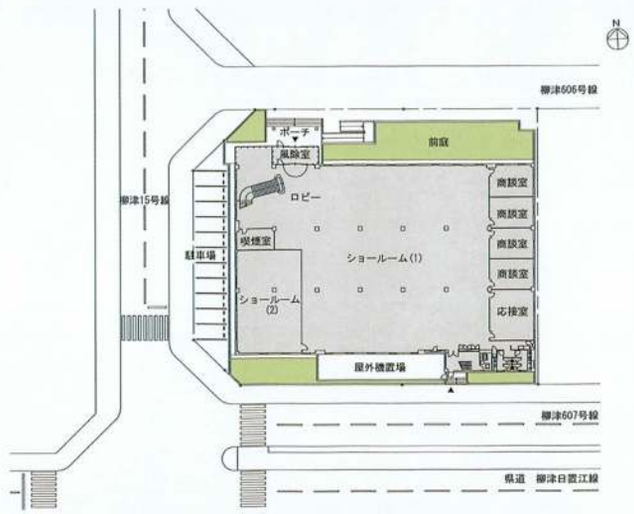


北面前庭

株式会社水甚は、服飾の企画、販売を行う日本有数のアパレルメーカーとして、昭和24年の創業以来、確実な成長を続ける、堅実かつ先駆的な企業である。
建設場所は、有力企業の流通拠点である岐阜市柳津町の流通団地内に位置し、今回新築したこの第三ビルのほか、第一ビル、第二ビルが隣接する。
第三ビルの１階には、本社機能を持つ第二ビルの服飾展示スペースと商談スペースを移設、２階は社内行事などで全社員160人を収容できる講堂など、多目的に使用するスペースとし、建物の配置、各部屋のレイアウトは、風水を考慮しながら計画した。
エントランスとロビーは、来客に分かりやすく、開放的な吹き抜け空間とし、ガラスのカーテンウォール越しには第一ビル、第二ビルを見渡すことができる。
展示スペースや多目的スペースでは、レイアウト変更に対応しやすいよう、階避難安全検証法により排煙たれ壁をなくし、フレキシビリティーのある大空間とした。
常に新しいものを生み出していく社風から、周辺の建物とは異なる外観を意識し、外壁の材質・色使いは気品と格調を持たせながら、独自性を極立たせるデザインとした。
前庭は、地被植物と白玉砂利で長良川の流れを表現し、絶え間なく繁栄を続ける企業をイメージしている。

（澤村喜久夫・藤岡陽子/伊藤建築設計事務所）


北面ポーチ外観


N
柳津606号線
ポーチ
風除室
前庭
ロビー
商談室
商談室
商談室
商談室
応接室
喫煙室
駐車場
ショールーム(1)
ショールーム(2)
屋外機置場
柳津607号線
県道 柳津日置江線

配置図 1/1200


1階ショールーム


2階大会議室


北西面外観夜景


2階ホワイエより1階ロビーを望む


1階ロビー


GUCCI
GUCCI

RICCO栄

外装基本デザイン　光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所
設計・監理　大林組名古屋支店一級建築士事務所
施工　大林組名古屋支店

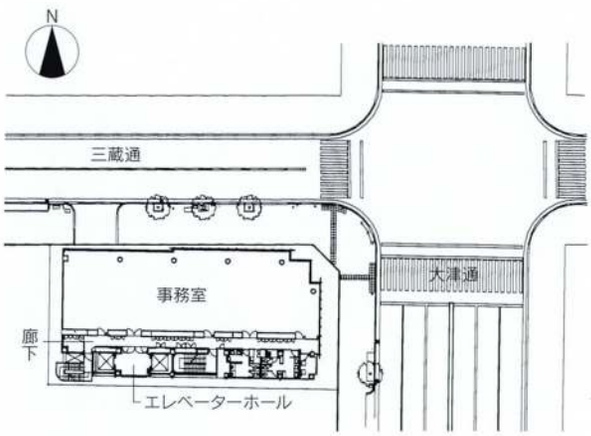
RICCO栄の建つ名古屋・栄の大津通りは、近年大規模商業施設や高級ブランド店等の集積が進み、栄のメインストリートとしてより洗練された魅力的な街へ変化しつつある。本計画では高級ブランド店の誘致を前提としてファサードデザイン、インテリアデザインに付加価値を与えることでビルの集客効果向上を目指した。断面構成としてはB1階～2階を高級ブランド店、3階～10階は貸オフィスとして計画し、10階には屋上庭園とそれに面した入居者専用の共用ラウンジが設けられた。

賃室エリアはLowE複層ガラスによるフルハイトのカーテンウォールを採用し快適な執務空間と大津通りからの視認性に配慮している。また、分煙化に配慮した喫煙室の設置や、パウダーカウンター、フィッティングボード、歯磨きボウルを設けた化粧室などアメニティの高い共用部を提供し、シックな色調のインテリアを採用してラグジュアリーな雰囲気を醸しだしている。

ファサードデザインは機能面や街並みへの配慮、ブランド店と全体との調和を考慮し、ガラスを主題に垂直基調の意匠でコーナーを強調し、大津通りのアクセントとなるべく計画した。

大津通りにふさわしい建築としてその発展に寄与し、末永く人々から愛される存在であって欲しいと望む。

（池村忠久・小西由彦／大林組設計部）



基準階平面図　1：1000

所在地 ――名古屋市中区栄三丁目14-7
敷地面積 ―― 723.30㎡
建築面積 ―― 587.10㎡
延床面積 ――6,316.93㎡
構造規模 ――S造、B2、10F
工　期 ――2005年8月～2006年10月
最寄駅 ――名古屋市営地下鉄東山線・栄駅
撮　影 ――セゾン

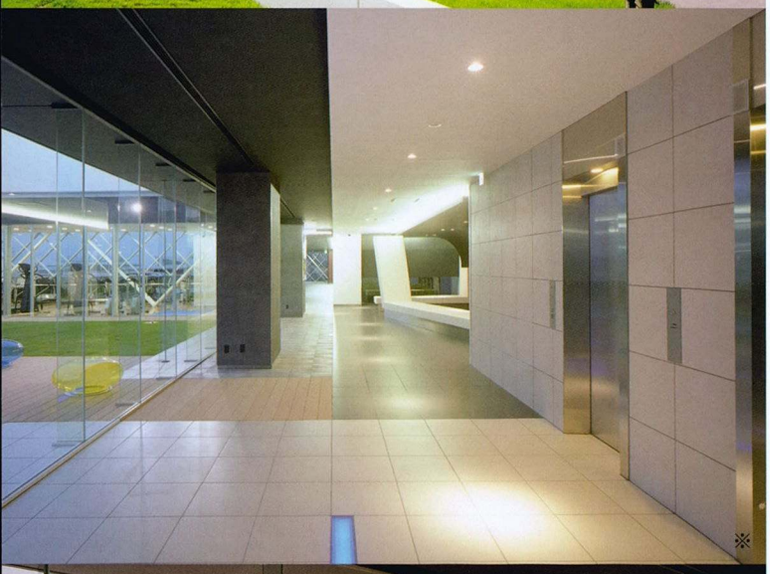

屋上庭園


ラウンジ


エントランスホール


外観





※



※





コンフォートホテル 中部国際空港

設計施工　竹中工務店

コンフォートホテルは、世界中でお客様をアテンドしているチョイスホテルズインターナショナルの宿泊特化型ホテルブランドである。中部国際空港開港と同時2005年２月に、空港島内旅客ターミナルビルから徒歩３分の場所に194室でオープンした。

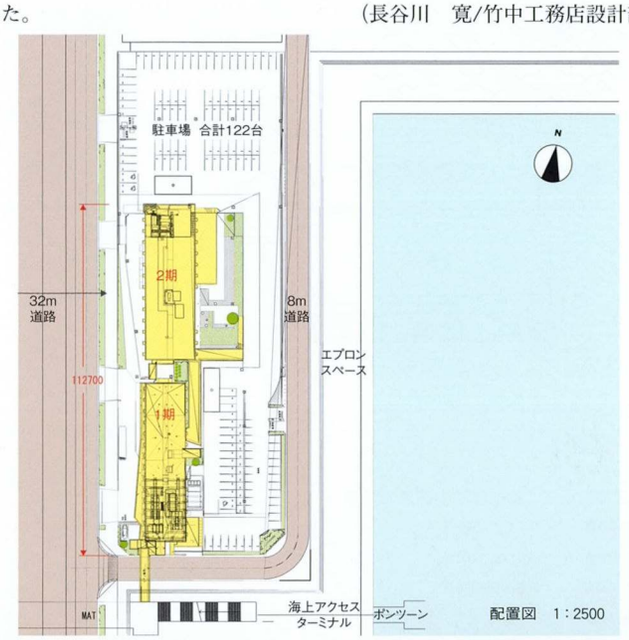
MATと呼ばれる空中歩廊にデッキをかけ、ターミナルビルに直接接続しているため、雨天時でも濡れることなく飛行機に乗ることが可能である。立地や海外からのチョイスホテルズ利用者の予約、航空会社クルーの利用などにより国際色豊かに利用され、2006年８月にレストランを含む２期160室を増築した。

暗くなってから到着し夜を過ごすホテルにおいてサインの持つ意味を再考、建物全体をサインと捉え、ロゴと一体化した設備ヤード頂部の光の筋、屋外階段の行灯への見立て、庇など長さをもつ面を浮遊させた。視線を抜いた部分は逆に内部を浮かび上がらせて雰囲気ともてなしをショーウインドウとして提示。黄色のクラッシュガラスを発光させたフロントカウンターがお客様の到着を待ち受けている。

２期では更に朝の旅立ちに演出を加えた。１期との接続通路、EVロビー前の中庭など、海に面する東ファサード側においても素材感の強い材料を使用し、自然の光と影による「時間という価値」を表すことで、期待感をもりあげるよう計画した。

夜は建物全体がお客様を迎え入れるサインとして魅力を放ち、朝は太陽をたっぷり取り込む。コンフォートブランドの持つ快適な客室に、ビジネスホテルが持つべき新しい魅力としての「気持ちの良い空間」を付加した。

（長谷川　寛/竹中工務店設計部）



配置図　1：2500

所 在 地 ――愛知県常滑市セントレア4-2-3、4
敷地面積 ――8,708.22㎡
建築面積 ――2,023.27㎡
延床面積 ――12,066.45㎡
構造規模 ――RC、S、8F
工　　期 ――１期　2003年12月～2004年11月
　　――２期　2005年９月～2006年７月
最 寄 駅 ――名鉄空港線　中部国際空港駅
撮　　影　吉村行雄（※）、SS名古屋







東海支部特集3部作

1部―街道・宿場町シリーズ　2部―東海の建築事例紹介　3部―東海支部会員が語る

街道や宿場町には、繁栄した時代の人々の営みをみることができます。近年、多くの人々がその繁栄の時代を求め訪れています。その街の人々も生活のために、地域の活性化のために、街の復元、保存、再生に動き出しています。景観法が施行され、経済効率第一主義だった我が国にも景観の持つ重要性が認識され、古くからの街道や宿場町への価値観が大きく変化していると言われています。
そこで、街道、宿場シリーズ第２弾として「中山道」を取り上げました。中山道は五街道の一つで、江戸日本橋から板橋へ出て、上野、信濃、美濃などを得て、草津で東海道に合流、京都に至る69宿からなる街道です（広辞苑より）。その中から、今回は「木曽路」とも呼ばれる十一宿について、この地方の文化を建築史、建築・都市、街造り活動からの立場から探ってみました。

（東海支部特別編集委員会）

〔街道・宿場町シリーズ〕

街並みの形成と保存、修復活動の現状を訪ねて

伝統的建造物群保存地区の成立と課題―妻籠宿・奈良井宿を中心として―／沢田多喜二
馬籠宿―町並み景観形成の歩み／大脇修二
妻籠宿―その保存の事例について―／遠山高志
宿場町奈良井の形成と町並み整備の実際／石井健郎
木曽路を行く／今津芳清・加藤亜紀子・小宮三辰・林　金之

〔東海の建築事例紹介：ガラス〕

ガラスを主題に構成したファサード―RICCO栄／池村忠久
「ガラス」への試み―愛知大学研究館/同朋大学Doプラザ閲蔵／益田正博
健康館フェニックス／町田伊佐雄
モード学園スパイラルタワーズ／若林　亮

〔東海支部会員が語る〕

支部機関誌「東海の建築」の発行と支部活動の役割を考える／東海支部「東海の建築」編集委員会

伝統的建造物群保存地区の成立と課題
—妻籠宿・奈良井宿を中心として—

沢田多喜二

はじめに

江戸幕府は、国家の安定を確保するために五街道を制定し、東海道を海沿いの街道としたのに対し、中山道は山岳を抜ける山の街道とされ、日本の東西を結び、参勤交代・皇女の降嫁などに加え、商人や物資の移動をはじめ、庶民の伊勢参り、善光寺詣などに利用され、宿場の繁栄は幕末までの270年余りつづいた。中山道は江戸の日本橋から始まり京都三条大橋までの69次がおかれ、熊谷、高崎から碓氷峠を越して佐久に至り、和田峠を越えて下諏訪から木曽路に入って美濃の落合宿で旧東山道に入り、草津で東海道に合流した。木曽路は難所の一つで、木曽谷を縫うように南北に縦貫する高低差の大きい山路であり、そのため宿駅間は狭く、贄川宿から馬籠宿までの間に11もの宿場がおかれた。各宿場では、大名や上級武士などが滞留する本陣や脇本陣を定め、問屋を設けて伝馬制度をしいた。各宿場は共通点が多く、本陣・脇本陣を中核として寺院や神社が点在し、旅籠屋や茶屋・土産物屋が街道沿いの両側に並ぶことで、全体として調和の取れた帯状の町並みが形成されることになった。

伝統的建造物群保存地区の成立

妻籠宿では、住民が長く親しんできた宿場町を守るために保存運動を組織化して「妻籠資料保存会」(のち「妻籠を愛する会」に改組)を結成し、自治体に保存を働きかけ、昭和43年（1968）わが国最初の町並み保存事業がここ妻籠宿で始まり、昭和48年(1973)に「妻籠宿保存条例」を制定した。1970年代に入ると高山市、倉敷市、萩市などで独自に保存条例制定や町並み保存事業が行われるようになり、住民・行政・専門家による保存運動から保存事業や町並みづくりへと発展して行った。このような活動が基盤となって、昭和50年（1975）に文化財保護法が改正され、伝統的建造物群保存地区の制度が誕生したのである。初年度1976年には秋田の角舘、長野の妻籠宿、岐阜の白川村、京都の産寧坂と祇園、萩市の堀内地区と平安古地区の７地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成18年（2006）１月現在で全国に73地区に拡大している。

伝建地区制度の特徴

１）伝建地区の定義

伝建地区は、伝統的建造物を群として周囲の環境とともに保存しようとする制度で、建築物単体から群およびこれと一体となった環境にまで広げたという点で画期的なものである。改正された文化財保護法では「周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの」を「伝統的建造物群」と定義



写真１　妻籠宿の遠望



図1　全国の重要伝統的建造物群の分布
（大河直躬・三船康道編『歴史的遺産の保存・活用と町づくり』学芸出版、1997）

し、新たに文化財の種類に加え、文化財価値が高いと位置づけたのである。それを含めた地域一体、すなわち「伝統的建造物群およびこれと一体をなしてその価値を形成している環境」を保存するために「伝統的建造物群保存地区」（以後、伝建地区）が定められたのである。したがって、伝統的建造物群だけではなく、それをとりま

く周囲の山々、樹木、屋敷林、庭、石垣など景観上密接に関わっているものも含めて保存対象になっているのである。たとえば、妻籠宿保存地区の場合には、旧宿場町だけでなく、在郷の建物や旧中山道より眺望できる周辺の山々の自然環境も一体のものとして指定したため、実に1200ヘクタール余りの広範囲なものとなっている。

なお、伝統的建造物群とは、高山市の三町（商家町）、三重の関宿（宿場町）、鹿児島の知覧（武家町）、奈良の今井町（寺内町）、沖縄の竹富島（農村集落）、神戸市の北野町山本通（洋館群）などのように、建築後相当年数の経た建造物で構成され、群として位置・規模・形態・意匠・色彩において特色のあるものをさしている。

2）伝建地区制度

伝建地区制度では、市町村が主体的な役割を担い、自らの保存条例を定めて、保存地区の指定や現状変更の許可及び保存修景事業などを行う。伝建地区の保存地区の決定は、都市計画区域内では都市計画によって市町村が指定し、都市計画区域以外の区域では市町村の保存条例によって定められる。国は市町村の申出により、特に価値の高い地区を「重要伝統的建造物群保存地区」（以後、重伝建地区）に選定し、市町村の保存事業に対して財政援助や技術的指導を行う。集落町並みの保存地区では住民が日常生活や生業をしながらの保存になるので、単に文化財としてではなく、自然環境や居住環境を含めた都市計画的な考え方が必要になってくる。

伝建地区の建築物は、建築基準法が適用されるが、市町村条例で必要最小限度の条項の適用除外や緩和措置を行うことが可能で、広告物の規制は都道府県条例で行われる。また、税制上の優遇措置としては、伝建地区もしくは重伝建地区の区域内にある土地の地価税が非課税、重伝建地区の伝統的建造物にかかる国定資産税が非課税とされるほか、その敷地について市町村が二分の一以内を適宜軽減、伝統的建造物以外の建築物等の敷地について適宜軽減できるなどの優遇措置を受けることができる。

伝建地区の保存整備計画

市町村は伝建地区指定に先立って、文化庁の国庫補助による「伝統的建造物群保存対策調査」を行っている。この調査は保存対策を立てるために必要な基礎資料を集めるために実施され、集落町並みと伝統的建造物の沿革や現状を調べて、その文化財的価値や景観的価値を評価する。そのうえで市町村は保存事業の基本方針と伝統的建造物や景観の保存基準を定めて保存計画を立案する。このほかにも市町村は、独自に町並みや集落全体の歴史的景観などの調査を行い、将来の町づくりに役立てることが必要である。

妻籠宿の保存整備計画は、基本調査、基本計画、実施計画の3段階で進められ、基本調査では、民家調査、町並み調査、景観調査、文化財分布調査、施設現況調査、文献及び聞き取り調査、アンケート調査などを実施し、歴史的価値、景観的価値、施設需要と配置、広域的な位置づけを検討する。基本計画は、2段階のプロセスで進められ、第一段階では調査の結果をもとに①観光をも目的にするが、あくまで歴史的景観の保存を第一義とする。②地元住民の生活環境の整備維持を十分考慮する。③木曽路計画の一部として構想するという3点の基本方針を定め、それをもとに総合的な構想計画をまとめる。第二段階では実施計画に向けて構想計画を「保存整備計画」「施設配置計画」「動線計画」の3種の計画に整理し、各々に事業計画と規制計画を立案する段階である。「保存整備計画」では、完全な歴史的復原でなく、復原を考慮した伝統的な空間としての再構成であり、町全域を対象とするよりも、ファサードを中心としたものである。もちろん、歴史的な遺構や遺物は極力保存し、歴史的景観としての雰囲気を創り出すようデザインしていくことも許可し、街道の面していない裏側については、特に景観を害するものでなければ自由に建設を許可してもよいとされ、「施設配置計画及び動線計画」では、観光開発に必要なものとともに生活環境整備として必要なものを十分考慮するという考え方が出された。実施計画では、規制計画の規制手法について具体的に検討し、事業計画では基本計画の条件を細かくして検討を行い、その事業プログラムが組まれた。



写真2　妻籠宿の町並み

伝建地区の保存・修景事業と実例

1）伝建地区の保存・修理事業と管理事業

伝建地区での保存・修景事業の特徴は、保存修理等の現状変更の規制を主として建造物の外観に限定され、保存事業の対象を伝統的建造物以外の建築物や周囲の環境までを含めたことであろう。建物内部は日常生活や生業に合わせて自由に改造することができるが、地域の中核となるような重要な伝統的建造物に関しては、所有者の合意を得て指定文化財（国・都道府県・市町村）として内部まで含めて保存整備することが多い。また、伝統的建造物以外の建築物の新築や増改築などの現状変更を修景といい、周囲の伝統的建造物と調和させるよう形態・意匠・材料・色彩などに配慮する必要がある。

伝建地区の管理事業では、防災施設の整備や標識・説明板・案内

板・境界線の設置が行われている。特に防災施設では木造建築が対象となるため、火災の初期消火、延焼防止、消火活動などが重要視され、そのほかにも避難路の確保、構造耐力補強など火災・地震などの災害に備えた対策を立案する必要がある。また、駐車場・代替道路の整備、電柱・アンテナの撤去などの将来的な都市施設整備計画も大きな課題となっている。

妻籠宿や奈良井宿のような宿場町では街道に面するファサードの屋根や外壁の形状・仕上げなどの意匠を調和させること、外壁位置や軒の高さを揃えることが最も重要視される。奈良井宿では、保存委員会及び教育委員会が口頭で建築様式等の指導助言をし、必要に応じて図面を作成して指導を行っているが、平成３年（1991）以降は教育委員会が修理修景事業の設計施工監理を直営で行うようになって、きめ細かく質の高い事業が実施されるようになった。
また、建物を新築・増築する場合、街道に面する前方では規制を受けるので、敷地の後方に別棟として増築されることが多い、そのため居住環境や景観に悪影響を及ぼす恐れもあり、都市計画事業や住宅関連事業などの手法を加えた総合的な保存整備事業が必要となる。

２）妻籠宿・奈良井宿の実例

妻籠宿では、昭和43年（1968）から３か年計画で長野県明治百年記念事業が始まり寺下・上町地区26棟の保存工事が行われた。昭和46年（1971）の住民大会では「妻籠宿を守る住民憲章」が制定され、『売らない』、『貸さない』、『こわさない』の３原則が宣言され、それをうけて町は昭和48年（1973）に「妻籠宿保存条例」を制定した。昭和51年（1976）に重伝建地区に選定され、同年から２年かけて消化栓63基や放水銃４基等の防災施設が設置され、並行して毎年の事業費約２千万円前後かけて、昭和62年（1987）までの12年間に約80棟の保存工事が行われた。平成７年（1995）には本陣が復原され、歴史資料館、昭和42年（1967）に開館した脇本陣奥谷邸の３館による博物館が発足した。また、将来予想される土地や家屋の売買及び空き家に対応できるように財政支援の目的で、昭和58年（1983）に妻籠宿保存財団が設立されたが、財政基盤は十分ではなく不安が残る。妻籠宿の町並みは保存事業により有名になって、観光収入で潤っているけれども過疎化の問題が解消していない。また、伝建地区の保存事業は永久的に続くため、行政や民間の専門家・技術者の後継者問題等が今後の課題になっている。

奈良井宿では、昭和40年（1965）代中頃に櫛問屋中村邸の移築問題を契機に保存運動の機運が高まり、昭和53年（1978）２月に保存条例を制定し、同５月に重伝建地区の選定を受けた。同年からは防災事業が始まり消火施設等の設置が行われ、並行して保存修景

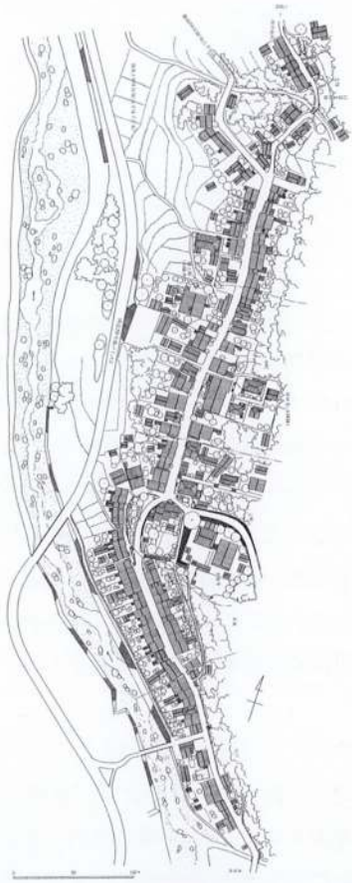


図２　妻籠宿の地図
（太田博太郎・小寺武久『妻籠宿』彰国社、1984）

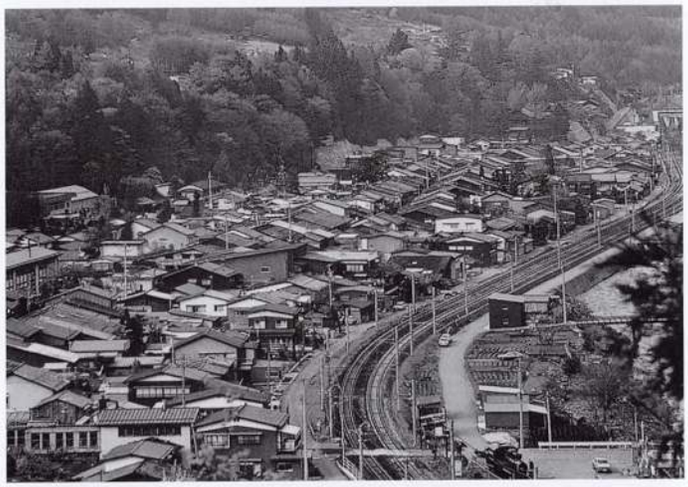


写真３　奈良井宿の遠望



写真４　奈良井宿の町並み

事業が実施され、平成９年（1997）までに修理210件、修景138件にのぼる、それ以降も年間10件程度の割合で事業が行われている。当初は修理工事が多かったが、平成３年以降は修景工事の物件が多くなっている。その他の事業としては昭和57年（1982）共同TVアンテナの整備、昭和60年(1985)保存資料庫の建設、昭和62年(1987)から平成元年（1989）にかけて電柱の移設が行われた。これまでの奈良井宿の保存事業は行政指導型で行われてきた、そのため住民の自主的活動の欠如や保存に関する認識不足、村内の他地区との行政上の不公平の問題等が今後の課題である。

世界遺産条約

昭和47年（1972）17回ユネスコ総会で「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）が採択された。わが国は平成４年（1992）に世界遺産条約を批准した。世界遺産は、文化遺産、自然遺産、複合遺産に分類され、世界的な遺産を保護し、貴重な文化遺産や自然遺産を人類共通の財産として将来の世代に伝え保存するために、国際的な協力や援助の体制を確立することを目的にしたものである。日本の世界遺産登録は、自然遺産には白神山地（秋田・青森県）、屋久島（鹿児島県）、知床（北海道）の３件、文化遺産には、法隆寺地域の仏教建造物(奈良県)、姫路城(兵庫県)、古都京都の文化財（京都府、滋賀県）、白川郷・五箇山の合掌造りの集落(岐阜・富山県)、原爆ドーム(広島県)、厳島神社(広島県)、古都奈良の文化財（奈良県）、日光の社寺（栃木県）、琉球王国のグスク及び関連遺産群(沖縄県)、紀伊山地の霊場と参詣道（和歌山・奈良・三重県）の10件が登録されている。この中で「白川郷・五箇山の合掌造りの集落」は重要伝統的建造物群保存地区にも選定され、合掌造りの民家が周囲の自然環境と一体として保存されており、わが国を代表する景観として1995年12月に世界遺産に登録された。世界遺産は国内法の規制により守られており、世界遺産登録によって新たに保護措置を追加されるということはないが、知名度も上がり、周辺環境を含めてより大切に保護されることが期待されている。

登録有形文化財制度と景観法の活用

平成８年（1996）に文化財保護法が改正され、新しく文化財登録制度（登録制度）が導入された。登録制度は近代建築（洋風建築）が評価を受ける間もなく消滅の危機が高まるのに対応し、従来の指定制度を補完するもので、所有者の意思を尊重し、届出制と指導、助言、勧告を基本とする緩やかな保護措置制度として制定された。登録の基準は指定物件を除く、原則として建設後50年を経過した建築物、土木構造物及びその他の工作物で①国土の歴史的景観に寄与

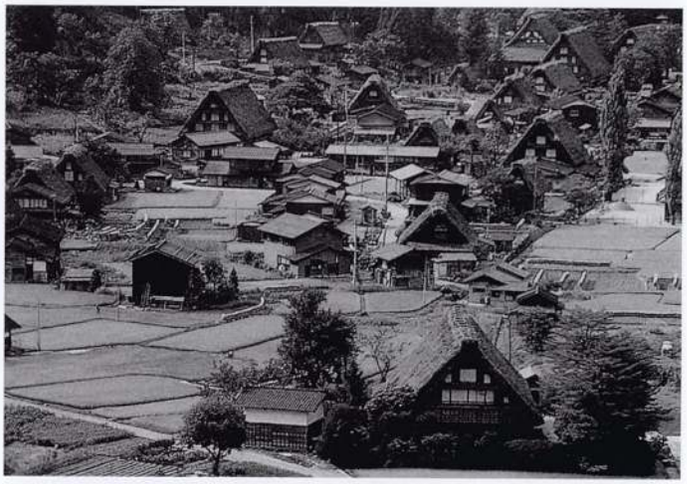


写真５　白川郷の遠望

しているもの、②造形の規範になっているもの、③再現することが容易でないもののどれか一つに該当するものとなっている。これは文化財の保護対象を大幅に広げ、集落町並みの指定物件以外の建築物に対応することができ、その地域の歴史的景観の保存や町づくりに有力な手段の一つになると考えられる。

登録制度の現状変更は、外観の変更が道路から望見できる部分の四分の一を越える場合に限り必要となるが、指定制度のように許可制ではなく届出制である。伝建地区制度では同じ外観を規制対象とするが許可制で、それに比べても緩やかな規制である。税制上の優遇措置としては、敷地の地価税を二分の一に軽減、市町村が家屋の固定資産税を二分の一以内に適宜軽減できる。また保存活用に必要な修理等の設計監理経費の二分の一を国が所有者に補助する制度等がある。登録制度は、所有者が日常生活や生業を営みながら自分の意思で保存活用できる自由度の高い保護制度であるといえよう。

わが国初めての景観法が平成16年（2004）に制定された。景観法は都市や農山漁村等の良好な景観形成と保存を図ろうとする景観に関する総合的な法律で、直接的な歴史的遺産の保存が目的ではないが、集落町並みの景観保全や歴史的建造物の保存活用に効果が期待される。伝建地区制度に加え登録制度や景観法を併用して活用することで、今後の集落町並みの歴史的建造物や景観の保存・修景や町づくりに可能性が広がったといえよう。さらに、現在地球規模で論じられている環境問題についても、歴史的環境の保全は人間生活や社会構造に対して多くの示唆を与えてくれるであろう。

参考文献

太田博太郎・小寺武久『妻籠宿』（彰国社、1984）
奈良国立文化財研究所編『木曽奈良井町並調査報告』（楢川村、1976）
文化庁編『特集文化財登録制度』（第一法規、1997）
文化庁編『特集歴史的集落・町並みの保存とまちづくり』（第一法規、2000）
新建築学大系編集委員会編『新建築学大系50歴史的建造物の保存』（彰国社、1999）
苅谷勇雅「歴史的遺産の保存制度の新展開」（大河直躬・三舩康道編『歴史的遺産の保存・活用と町づくり』学芸出版、1997）
苅谷勇雅「伝建地区制度の可能性」（全国町並み保存連盟編『新・町並み時代』学芸出版、1999）
村上訒一「伝統的建造物群の保存制度と運用」（観光資源保護財団編『歴史的町並み事典』柏書房、1981）
宮沢智士編『町並み保存のネットワーク』（第一法規、1987）

（さわだ　たきじ　愛知みずほ大学 非常勤講師）

馬籠宿―町並み景観形成の歩み

大脇修二

「木曽路はすべて山のなかである」の書き出しに始まる小説『夜明け前』の舞台はいうまでもなく馬籠である。

「馬籠は木曽十一宿の一つで、この長い谿谷の尽きたところにある。西よりする木曽路の最初の入り口にあたる。そこは美濃境にも近い。美濃方面から十曲峠に添うて、曲がりくねった山坂をよじ登って来る者は、高い峠の上の位置にこの宿を見つける。街道の両側には一段ずつ石垣を築いてその上に民家を建てたようなところで、風雪をしのぐための石を載せた板屋根がその左右に並んでいる（中略）山の中とは言いながら、広い空は恵那山のふもとの方にひらけて、美濃の平野を望むことのできるような位置にある。なんとなく西の空気も通って来るようなところだ」

有名なこの文章の一節は、馬籠の様相を鮮やかにとらえている。さて今日、全長23里（約90キロ）の木曽谷をぬう街道添いに形成された十一の宿場の中に重要伝統的建造物保存地区、いわば町並みがそっくり国の文化財に指定されている宿場が三カ所ある。このように近世の宿場としての集落遺構を中心として木曽路には現在も濃密な歴史的景観が維持されている。このような背景をもとにこの度、妻籠宿が世界遺産候補の暫定リストに立候補。今回は継続審査の対象となったが、この問題については後にふれることにする。

さて、このような木曽路の濃密な歴史的景観形成のなかで、馬籠宿は例外的な経緯を経て現在に至ったといわなければならない。

高度経済成長後の昭和40年代の半ば、いわゆるディスカバージャパンによる爆発的な木曽路ブームのなかで馬籠宿ほど町並みの景観を急激に変貌させた例は他にないといえよう。「なんとなく西の空気も通って来るようなところ」（「夜明け前」）の言葉が象徴するようにこの度の岐阜県中津川市への合併。そして国の景観法の施行に伴って馬籠宿への景観条例の策定（19年度）が進むなかで、藤村のふるさととしての木曽馬籠。希薄化した町並み景観理念の再構築が今求められていると思われる。

馬籠宿の歴史

明治維新とともに宿駅制度が廃止されると多くの宿場はその後の日本の近代化の中で衰退、過疎化の道を辿ってゆく。見方を変えれば近代化による開発の波から取り残されたが故に近世の集落遺構が遺ったということで、これは歴史の皮肉と言えようか。ともあれ、馬籠宿も全く同じ経緯をたどってゆく。とりわけ明治23年、馬籠峠を迂回する国道の完成。明治44年、ほぼそれに沿うように中央西線が全通。以降、馬籠宿は宿場機能を停止する。さらには度重なる大規模な宿場火災によってその度に宿場経済が疲弊したのが馬籠宿であった。

江戸時代の馬籠宿の家並みを天保14年の「中山道宿村大概帳」によって見ると―。町並みは東西へ３町32間で、宿内人口は717人。家数、69軒とある。宿駅の構成は、本陣、脇本陣。問屋、庄屋。旅籠屋18軒（その内大・６軒、中・７軒、小・５軒）等であった。馬の背状の傾斜地に集落が形成され、水利が悪い故、一度火災が発生すると大規模火災になる要因をはらんでいた。

たとえば万延元年（1860）の大火では、本陣以下宿場の中枢部16軒を焼失。翌年（文久元年）は皇女和宮が将軍家へ降嫁のため中山道を下向のおり馬籠宿御昼食宿と指定されていた。しかし本陣以下馬籠宿は再興の最中で宿駅業務も渋滞しがちで、本陣当主青山半蔵（「夜明け前」の主人公）は焼け残った土蔵で大通行の対応に追われたと記述されている。

そして明治28年の馬籠大火によって実に宿場の８割（76戸）を全焼。そして大正４年の上町の大火（37戸消失）によって江戸時代の宿場としての集落遺構を完全に消失させることとなった。したがって馬籠の現在に遺る唯一の江戸時代の建物は藤村記念館内の隠居所（岐阜県指定文化財・島崎藤村宅跡隠居所）ということになる。

さて、現在の馬籠宿を見ると大正の大火以降、その８割が増改築を重ねて現在に至っていることが分かる。まず、それ以前の馬籠の家屋の一般的様式とその構造をたどってみることにする。家屋構造は江戸時代にあっては木造真壁・平入り形式の二階建てで、正面は差し物と梁による出梁作りが一般的。その近世の建築遺構を今も顕著にとどめているのが峠の集落である（**図１**　峠・桔梗屋の実測図）。

宿駅制度の廃止後、顕著な地場産業のない馬籠にあっては、耕地面積狭量故の零細農家が平均的形態であった。家屋構造はその家の生業に従うという原則通り、明治と大正の二度にわたる大火はそれまでの様式を大きく変化させるきっかけともなった。広い土間スペースと、養蚕のための二階等のスペースを最大限に確保する、在郷の農家形構造へと変質してゆく。いわゆる、切り妻平入りが一般的構造となっていく（**図２**　上北野屋・実測図）。

保存と開発の狭間のなかで

文豪島崎藤村が、神奈川県大磯の地で没したのが昭和18年（享年72歳）。敗戦後の疲弊した時代のなかで、生まれ故郷の馬籠宿本陣跡に地元の青年達の勤労奉仕活動によって藤村堂（現在の藤村記念

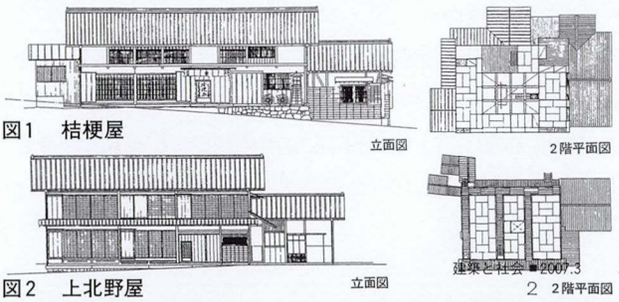


図１　桔梗屋

図２　上北野屋



昭和30年代の馬籠・峠



現在の馬籠宿

館の前身）が建設されたのが昭和22年。当時の馬籠は文豪のふるさととはいえ忘れ去られたような寒村。大正の火災後に再建された上北野屋のような、あるいは切り妻の平屋が軒を並べる寂れた通りを時々藤村詣での旅人がやって来るといった光景で、いわばこれが馬籠の原風景だったといえよう。

ここに一つのデータがある。昭和28年・３、460人。昭和47年・349、613人。これは、藤村記念館の入館者数であるが、わずか20年たらずの間に実に100倍という信じがたい入館者の急増がその後の馬籠の町並みの変貌を物語っているといえよう。急増する観光客の受け入れのため激しい増改築が続く。宿内の増改築年代図を見ると47年から55年がピークなことがわかる。

急激な建築ラッシュは町並み景観の乱れとなってゆく。その危機感が深まるなかで、住民主体による町並み保存に関する住民協定が成立する（「神坂を保存するための憲章」・昭和47年）。

憲章の前文はこのように謳っている。「島崎藤村の生地である馬籠は、藤村文学の心のふるさとであり、牧歌的な自然環境をほこる観光地でもある。我々は貴重な自然環境と、文豪の生地にふさわしい品格を永く保存すると共に、長い歴史の重みに耐えた宿場の面影を後の世の人に引き継ぐ責務を痛感する」

まず、保存の対象を、中山道の新茶屋から峠に至る区間及びその周辺の展望できる一帯を「風致保存区域」に、馬籠入り口周辺から陣馬周辺までの連たん区域を「特別風致保存地区」に指定。建物等の増改築に際しての指針等を策定。審議機関としての保存委員会を設け、委員会の高い見識による指導、助言が委ねられた。

申すまでもなく、美しい町並み景観は、突出した一つの建物によってその町並みが全否定されるほどの危険性を孕んでいる。それ故に、そこに住む人々の合意と理解とによってはじめて調和のある町並みが形成されるということでもある。町並み保存の先駆、妻籠宿にあっては保存の理念は揺るぎなく、いうならば、二つの理（保存）と利（観光）の均衡。ただし、如何なることがあっても理は利に優先するという不文律である。

馬籠の場合は、住民協定故に法的根拠が無い。唯一の支えは住民の「良識」に委ねざるを得ないということで、増改築に際しての法的拘束性のかわりに住民の「自己規制」に委ねられるということである。したがって馬籠の町並みはそこに住む人々の人格の反映とも言えるのであろうか。

勿論、それが全ての要因ではないが、住民協定が発足してその10年後にはこのような指摘を受けることになる。「…残念ながら観光業者が非協力的。上の人ほど自ら規制を破る」しかも「今後も（この問題）は繰り返しふれられるであろう」（昭和57年「山口村、神坂地区環境診断書」）

しかし一方において、保存委員会は街道の修景美化等の事業において積極的な活動を展開。たとえば、町並みの外観を著しく阻害していた電柱の撤去に着手（昭和53年）。当時街道筋には電柱（電話線共架）20本、有線放送コンクリート柱６本が立ち、ここから各戸の軒先に電線が蜘蛛の巣のように張り巡らされていた。同時に街道から見えるアンテナや自動販売機にも配慮がくわえられた。

しかし、その後も増改築が続くなかで町並み景観の乱れが続く。その原因の一つとして、馬籠宿はすでに「江戸の記憶」を失って久しいということがあげられる。既にふれたように度重なる大規模な宿場火災によって近世の建築遺構をことごとく消失したことによって、規範となるべき建物の不在はルールの希薄化、景観の乱れへと繋がってゆくのではないか。危機感を募らせた住民グループが専門家に町並み診断を仰ぐきっかけとなってゆく。

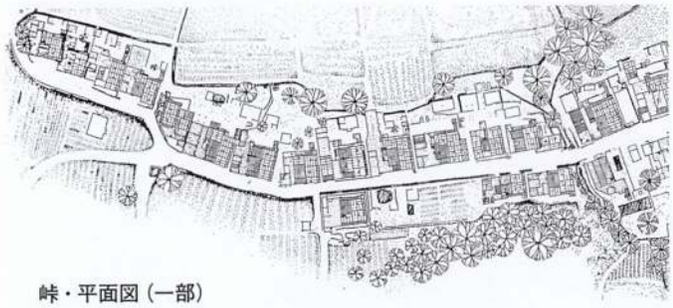
このような馬籠のたどった経緯から、いわゆる「伝統的建造物保存地区」における「保存修景色」の理念の適用は馬籠にあっては限界がある。むしろ「豊かな文化的、歴史的環境を重視した地域の潜在的な魅力を創出してゆくこと」として、伝統建築等にかかわる「建築史家」ではなく、建築家（プランナー）に基軸を定めてゆく。（財）環境文化研究所に依頼、茂木計一郎東京芸術大学教授（主査）以下景観等の専門家による調査が開始された（昭和58年）。

ちなみに、同報告書「藤村の血と心と言葉で・木曽馬籠のふるさとづくり」による、優れた町並み形成の概念は「美しい町並み景観は、粉飾、化粧ではない。単に修景の手法では限界があり、むしろその地域が生み出した豊かな物的表現の総体である。したがって美しい町並み景観の形成は過去より継続された農林業、地場産業等社会基盤の充実による、その反映である」として、ともすれば突出しがちな観光に対して自制を促している。

また、従来の馬籠の家屋の建築様式構造等の調査に基づいて、今後の増改築にさいして遵守すべき具体的指針を提案をしている。

「日本の木造建築は形式上共通の特徴がある（約束事）。建て替えられても伝承され、形式は守られる。それぞれの風土の中に溶け込んで独自の建築様式を確立してゆく。馬籠の場合もその特徴が顕著である。したがって、細部のデイテール等の継承は無理として、切妻、平入り。階高をおさえ、建物全体の高さを極力低く保つ。街道に面する建物の正面には必ず庇を設ける。庇の出を深くする。（コロビ勾配3.0～4.0寸）屋根勾配を揃える。（３寸５分）軒の出を深くする。妻側の庇も深く出す。等々」（要旨）

以上、継承されてきた最小限の建築様式を遵守するならば「個々の家々の連続性が保たれ優れた町並み景観を形成するであろう。し



峠・平面図（一部）



枡形（平面図）

かも馬籠は坂道で曲線の街道に構成されている故、上下左右に移動するごとに劇的に変化する町並み景観は周囲の自然と相まって見事なコンビネーションを展開する。しかし今、切妻屋根の美しい重なり合いによる連続性が壊れつつある。上部の屋根は下部の家の屋根に重なるという原則が壊れつつある」と指摘している。

馬籠の町並み診断とともに環境文化研究所が提案したのが「中山道フイールド博物館（野外博物館）構想」であった。提案のもと（昭和63年より）事業が実現。江戸時代にあった枡形の復元は馬籠の坂道に景観的なアクセントを付けることなり、江戸時代の図面を基に常夜灯も復元設置。共同作業小屋を「藤村童話・ふるさとの家」として改築。峠の水車塚には昔ながらの水車小屋を復元等。

保存理念の再構築を

さて、この度の中津川市が策定する景観条例の骨子は、中山道沿いの馬籠宿を景観重点地域と定め地域内の建物、工作物等。看板、自動販売機の設置等に関する条例である。

今までふれてきたように無名の寒村が木曽馬籠としてメジャーな地となってゆく課程は、保存と開発の狭間の中で揺れ続けた苦渋の40年であったともいえよう。馬籠の町並み景観を保存するための住民憲章の精神は今も輝いている。しかし、その審議機関は長らく形骸化したままのなかで、望まれていた景観条例の制定である。

このような動きと連動するように妻籠宿のこの度の世界遺産の暫定候補への立候補。継続審査の対象となったのをきっかけに、妻籠馬籠の「一体申請」に向けた検討が今始まろうとしている。

なお、今回の審査において文化庁が妻籠宿（提案名・妻籠宿と中山道）に高い評価を下し、継続審査とした事由は「歴史的な街道とその沿道の宿場町が、在郷や周辺の自然環境とともに独特の景観を形成し、全体を広く回廊状に延びる「文化の道」として評価することが可能であることから、価値は高い。日本の世界文化遺産及び世界遺産暫定一覧表に記載された文化資産には、未だ見られない分野の文化資産である」とし、今後の検討課題として「輩出した歴史的人物や創作の背景となった文学作品なども視野に入れ、木曽地方全体が持つ歴史的・文化的な文脈に基づく検討が必要」（要旨）とある。これによれば、木曽の風土と歴史。宿場の人々の生活等を濃密に描ききった歴史小説「夜明け前」を始めとする藤村の一連の作品世界をも言外に謳っていることがわかる。ちなみに、関係者の話を総合すると世界遺産の対象とするところは想像以上に広くかつ深いということ。単に表層の物的な歴史資産では条件を充たさない。その資産を形成した歴史的背景と、それを育んだ精神世界の領域をも包含するという。

さて、この度中津川市が馬籠地域を対象とした景観計画において「景観重点地域」として条例の適用範囲としている所は、馬籠の町並み、、新茶屋の一角、峠の集落で、これは住民憲章の定めた「特別風致保存地区」に相当する非常に限定されたエリアである。この範囲指定については後にあらためてふれられるべきであろう。

その前にまず「歴史的な街道と沿道の宿場が在郷の自然環境とともに独特の景観を形成するいわば文化の道」（文化庁）と評されるように、宿場が「点」とするならば、宿場と宿場を結ぶ「線」としての中山道全体の歴史的文化的景観がきわめて重要な要素となってくる。そのためにもまず、中山道と沿道の自然景観の全体を俯瞰できる視線が必要であろう。

長野県は中山道と妻籠宿馬籠宿周辺一帯の歴史的自然環境を守るため、昭和58年８月これらの地域を「郷土環境保全地区」に指定している。妻籠馬籠の全指定面積は1512.98ヘクタールで中山道の沿道がその対象になっている。この県条例がいわば世界遺産が求めるバッファゾーン（緩衝地帯）に相当するエリアであろう。

指定地域の西のはずれを見てみよう。いうまでもなく美濃と信濃の国境（くにざかい）の新茶屋で、ここには有名な「是より、北木曽路」と記された藤村揮毫の道標がある。その近くにある「送られつ送りつはては木曽の秋」の芭蕉の句碑の建立については「夜明け前」にふれられている。その西側には一里塚とそれに連らなる中山道の石畳（昭和39年岐阜県の史跡指定）等の史跡が集中している。このように新茶屋周辺は往時の面影とその香りが今も充溢する貴重な歴史的景観保全地域。ところが最近、山林を切り開き全く新しい石畳（120メートル）が敷設され、入り口には「中津川市観光奉行」の立て札。合併の記念事業の一つであるが、岐阜県史跡として史跡保存されている石畳との整合性についてはどうであろうか。

あるいは、牛方衆の部落として小説「夜明け前」にも登場する峠の集落は、今も近世の集落遺構を留め、貴重な歴史的町並み景観を形成している。宝暦12年（1762）の大火災によって峠集落の大半を消失（21軒）以来災害を免れているが、嘉永２年（1849）の「峠町並絵図」に見られる町並み構成と、現在のそれとがほぼ一致していることも分かる。このように重要な近世の建築遺構が数多く遺された峠の町並みはかねてより建築史家による本格的調査が待たれていた。それ故に、この度の景観計画とあいまって「保存・再生」の理念に基づいた手法を導入すべきだと思われる。

時代は劇的な変化を続けている。しかし、郷土に蓄積された文化的歴史的資産の重要さを改めて認識し、誇りに思うことによって、視界の先に文化遺産を捕らえることができると思われる。

（おおわき　しゅうじ　藤村記念館理事長）

妻籠宿―その保存の実例について―

遠山高志

妻籠宿の保存工事は、全国に先駆けて昭和43年11月から行われた。長野県明治百年記念事業の一環として実施されたもので、寺下地区を中心に26戸に施された。以来町単独事業として、さらには昭和51年９月４日の国の重要的建造物群保存地区選定以後は国・県の補助事業として、毎年５～８戸に保存工事が実施されてきた。現在保存地区内には建物が400棟ほどあるが（うち200棟ほどが伝統的建造物）、そのほとんどに保存工事が施されている。最近では40年前に実施した家屋の補修が必要になってきている。

妻籠宿の保存工事はその当初から、建物を保存することによって日常の生活がより快適になることを心掛けてきた。その一つの例として上町のM氏宅を見てみよう。この建物は江戸末期安政年間の建築で、間口７間と宿内でも大きく、しかも卯達を備えている。南からの火災をここで食い止め、宿中心部に拡大させない役割を持たされた建物と推察される。

このM氏宅の台所は、壁際のほとんど陽の当たらない条件の悪いところに設けられていた。お風呂も狭い土間を通って一度外へ出なければ行けないところにあった。保存工事に当たっては、台所を裏に移し、お風呂とともに新築した。台所跡に土間を復原するとともに、囲炉裏の間を含めた上部の吹き抜けを復活した。いつの頃か梁を利用して、簡易な二階部屋が出来ていたのである。

それ以外の間取りは当初とほとんど変わっていなかったので、水回りを整備しただけで、かつての形状が復原でき、しかも日常生活がより快適になったのである。ファサードもよく保存されていたため、玄関引き戸を大戸に替え、ガラス戸を格子戸にする程度の軽微な改修で十分であった。



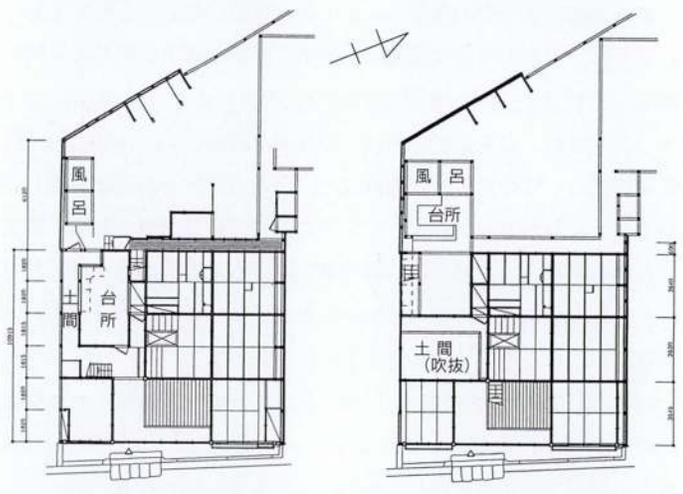
上町の町並み（中央がM氏宅）

もう一例、A氏宅の場合を見てみよう。図面には間口３間分しか載っていないが、この右側には廊下を挟んで昭和47年建築の間口５間の増築部分が続いている。A氏の構想では、この江戸後期の当初部分を撤去して、跡地に二階建てを建てるというものであった。妻籠宿保存審議会としては伝統的建造物に指定されている物件を滅失させることには許可が出せないとして、数度にわたる折衝の結果、必要な箇所には補強材を入れるなどして、柱・土台・梁などの軸部を全面的に生かした改修をすることになった。日常生活に必要な増築部分は、右側の建物に二階を乗せることで解決することが出来た。

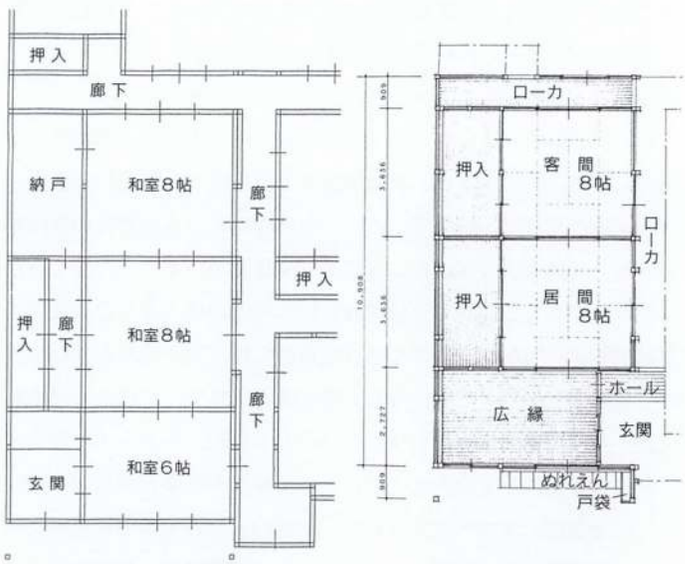
妻籠宿ではこのように、毎年のように建物の保存工事に関する話し合いや打ち合わせが行われているが、その根底にあるのは妻籠の保存が始まって以来の『保存優先の原理』であることはいうまでもない。



M氏宅　現状立面図　　M氏宅　改修立面図



M氏宅　現状平面図　　M氏宅　改修平面図



A氏宅　現状平面図　　A氏宅　改修平面図

妻籠宿では伝統的建造物の保存を進めるとともに、必要な箇所には建物などを新築するなどして、ファサードの統一性を図るとともに、景観の整備に務めてきた。モルタル造りの警察の駐在所の跡地に出梁造りの郵便局舎を建てたり、やはりモルタル造りの旧営林署



妻籠宿概観図　1：6000

車庫の跡地に資料館の前棟を木造で建てたりしたのがよい例である。

その中でも平成７年に建てられた妻籠宿本陣は、その最たるものであろう。妻籠宿の本陣は代々島崎氏が務めてきた。馬籠の島崎氏とは、戦国末期に兄が馬籠、弟が妻籠に分かれた同族で、幕末にも妻籠本陣の娘「ぬい」が馬籠本陣の嫡男正樹に嫁ぐなど、関係は深かった。さらに二人の次男の広助が、母の実家の養子になり、妻籠本陣最後の当主になっている。ちなみに二人の末子が春樹、後の藤村である。

妻籠宿本陣は木曽の他の本陣と同じく、明治維新後衰微し、明治20年代には建物を切り売りして家族は民家に間借り生活をする有様だった。本陣跡地は最終的には当時の御料局（現在の林野庁）が購入し、明治32年に妻籠出張所の庁舎を建築した。ちなみにその建物は民間に払い下げられた後、町が寄付を受け、平成２年に「山の歴史館」として復原し、長野県宝に指定されている。

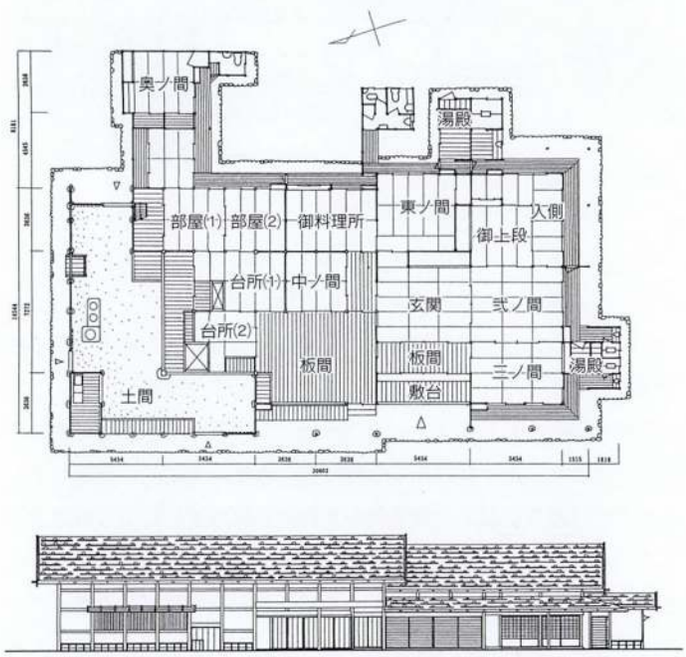
しかし妻籠営林署も昭和54年に廃止され、建物を撤去した跡地は南木曽町に払い下げられた。町では跡地を公園として整備するとともに、本陣復原の機を窺っていた。妻籠宿の保存事業は昭和43年から開始されたが、脇本陣として奥谷（平成13年に重要文化財指定）を擁する妻籠にあって、本陣の復原が保存の一つの集大成として熱望されていたのである。

まちづくり総合事業という起債事業を採用することによって、妻籠宿本陣は平成４年度から６年度の３ヵ年事業として実施され、総事業費３億６千万円でもって、江戸後期の間取図に忠実に復原することができた。

この工事によって、本陣前の中山道の幅が江戸時代の姿に戻り、宿場中心部のファサードを空き地でとぎれさせることなく、連続させることが出来た。

妻籠宿の保存が始まって40年、その蓄積は今となっては大きく、ほぼ完成の域に達した感がある。これからは腐りやすく壊れやすい保存地区内の建造物を、いかに忠実に後世に伝えていくかが重要な責務となってこよう。妻籠は今後とも、住民・行政・学者が三位一体となって保存していかなくてはならないのである。

（とおやま　たかし　南木曽町教育委員会教育長）



妻籠宿本陣（主屋）
左上：平面図　左下：西側立面図　右：妻籠本陣（写真）



宿場町奈良井の形成と町並み整備の実際

石井健郎

奈良井概況

中山道は慶長７年（1602）に江戸幕府により定められたが、集落としての奈良井の成立は少なくとも武田氏の伝馬宿以前にまで遡るといわれる。

宿場町奈良井は中山道最大の難所である鳥居峠を南に控え、木曾十一宿の中で最北の贄川に続く北から二番目の宿場であり、「奈良井千軒」といわれるほどの繁栄を見せた。また、奈良井には周囲の豊富な山林資源を活用した木工業による産業都市としての側面もあり、江戸時代を通じて白木御免木の割当てによる曲物、漆器、蒔絵を施した塗櫛などの製造が盛んに行われた。

奈良井の町並みは奈良井川に沿い約１キロに及び、両端には鎮、八幡両神社が、中山道西側の町並み背後には５カ寺が位置する。また、奈良井川上流方向から、上、中、下の三町に分かれる町並みとそれぞれの町境いのクランク状の街路形態、沢水を引き込んだ水場げなどに特徴がある。その屋敷構えは中山道に面して間口が狭く奥行きの深い短冊状の敷地割りに、表から主屋、その奥に土蔵などの附属建物が連なるもので、主屋は鉄板葺（当初は板葺）、切妻造、平入り、つし二階の町家で、２階前面を１階より通りに対して持ち出す出梁造（だしばりづくり）と呼ばれる造りを主要なものとする。また中山道に面して建物前面に取り付ける鎧庇は奈良井特有の建物意匠といわれる。これら軒高の抑えられた連坦する町家により形成される家並みは、間口の大小、建物前面細部意匠の多様性、道路幅の広狭、街路の屈曲などにより宿場町全体に微妙な差異を持ちつつも統合された歴史的景観を形成している。

昭和44年（1969）、出梁造の町家の一軒である中村家住宅（現在塩尻市資料館「中村邸」）が、その民家としての価値を評価され川崎市の日本民家園へ移築される構想を契機に、住民や関係者の間に地域に根ざした町並みの重要性や価値が共有されるようになった。昭和46年（1971）には奈良井宿保存会が発足し、中村家住宅は現地で保存されることになり、町並みについても国立奈良文化財研究所（現在独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）の調査によりその価値が定まった。そして昭和50年（1975）の国の文化財保護法の改正により、昭和53年（1978）５月31日に国の重要伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建地区」）に宿場町として選定された。



写真１　重要伝統的建造物群保存地区　塩尻市奈良井
奈良井下町の町並み

町並み整備の現況

奈良井では昭和53年の重伝建地区の選定以降、文化庁所管の伝統的建造物群保存地区制度を主な手立てとして17.6ヘクタールの保存地区の整備を進めている。その主要なものは修理・修景事業である。修理事業とは、江戸時代から昭和戦前までの伝統的な建物として特定された156の建物について、修復工事を行うことである。修景事業とは、伝統的な建物として特定されない建物について行う工事である。歴史的な町並みとはいえ、すべてが伝統的な建物であるわけではない。中には昭和40年代に建てられた建物などもあり、白いモルタルの外壁や金属性建具など伝統的な景観に調和しないものも少なくない。それらを周囲の景観に、より調和させるために行う工事を修景事業という。



写真２　中村邸（塩尻市資料館）
鎧庇を備え出梁造の典型例でもある

これら修理と修景を合わせてこれまでに延べ400件以上の整備を実施してきた。近年では年に数件程度の事業を継続的に実施している。これにより伝統的な町並みが文化財修復の手法により常に「新しく」なっていく状態になっており、その結果頻繁に更新されるホームページのように常に手の入った町並みの姿を見ていただけるようになっている。

また、木造家屋が密集する地区の特性から、災害の中でも特に火災に対する備えが重要となる。事実現在の町並みが残っているのも、天保の大火以降は大きな火災がなかったことによる。このため、重伝建の選定直後の昭和53年度から昭和57年度にかけて、自然流下式の消火設備を整備した。

昭和63年（1988）には選定10年を機に中山道沿いの電柱を裏側へ移設し、これら一連の官民協働によるまちづくり活動が評価され平成６年（1994）には国土交通省による「手づくり郷土賞」の受賞となり、さらに平成17年に同省により「手づくり郷土大賞」をいただくこととなった。平成17年（2005）には塩尻市と楢川村との合併による新「塩尻市」が誕生し、町並み整備のたすきは楢川村から塩尻市へ引き継がれた。



写真３　某家修景事業（工事前）



写真４　某家修景事業（工事後）

平成18年（2006）からは、国土交通省の街なみ環境整備事業により保存地区内の中山道の脱色アスファルトによる美装化に着手した。また、地元まちづくり組織である奈良井宿保存委員会では、平成20年（2008）に迎える重伝建選定30年を契機に、さらなる奈良井の発展のために組織の再活性化をねらい関連行事など準備を進めている。

漆工町木曽平沢地区の町並み

平成18年７月５日に木曽平沢の町並みが漆工町として重伝建選定を受けた。漆工町としての選定はわが国で唯一のものである。

木曽平沢は会津、輪島と並び日本三大漆器の一つである木曽漆器の一大産地であり、奈良井宿から３キロほど北の中山道沿いの町並みである。木曽漆器の産地として近代以降もさらに発展したため、奈良井に比べて近世から近代に至る、より多様な時代層や意匠の建物が混在する複層的な構成になっている。また、街路からは直接見えない敷地奥には、現役の木曽漆器の生産施設でもある塗蔵（ぬりぐら）と呼ばれる木曽平沢独特の土蔵や作業場が控え、奥の深い町並みとなっている。12.5ヘクタールの保存地区内に201の伝統的建造物として特定された建物を持つこととなった木曽平沢は、重伝建選定により今後は奈良井宿と同じ枠組みの中で官民協働で修理・修景事業をはじめ各種整備が始まることになる。

なお、木曽平沢地区の重伝建選定により塩尻市には２箇所の重伝建地区が所在することとなった。平成18年７月５日現在、わが国には78地区の重要伝統的建造物が存在する。その中で長野県には５つの重伝建地区がある。これは東日本の都道県では最多となる。その中にあって塩尻市では塩尻市長として重伝建地区所在市町村等の協議会である全国伝統的建造物群保存地区協議会（http://www.denken.or.jp/）の副会長を務めている。今後も市内に散在する歴史資産の整備を良好に進めることを通して、わが国の歴史資産整備行政を支えるべく更にまい進していかなければならない。

（いしい　けんろう　塩尻市楢川支所振興課町並み保存係）



写真５　新たに選定された重要伝統的建造物群保存地区　塩尻市木曽平沢

木曽路を行く—木曽宿と周辺施設—

今津芳清／加藤亜紀子／小宮三辰／林　金之

特集記事「街道・宿場町シリーズ—中山道木曽路」の一環として、馬籠・妻籠・奈良井宿を中心に木曽十一宿の現状と周辺施設を、四人の会員が見学し、その印象を語る。
行程は恵那市の安藤広重美術館などの施設を見学の後、木曽路の南から北へ順次上る様に宿場などを巡った。
当日は、天候が前日から悪化し、木曽地方は深い雪に覆われ珍しいほどの一面の銀世界となった。冬季に加え大雪で観光客も少なく静かな街並みの見学であった。

今津：ここ恵那は大井の宿場で、中山道も恵那駅寄りの所を通っていたようですが、東の方へ行きますと枡形もあり、道路が直角に曲がっていて当時の名残です。
小宮：木曽路の手前になりますが、先ず恵那市にある安藤広重美術館を見学しましょう。
今津：この美術館は地元の篤志家の版画絵の寄贈をもとに計画されて、全国公募のコンペで岐阜の車戸設計事務所が最優秀に決まり、建設された施設です。
加藤：展示室に入ると、落合・馬篭・薮原・奈良井等の沢山の街道の絵が並び、どれもすばらしいですね。
今津：宿場の風情が感じられる役者絵のような浮世絵もあり、楽しいです。
小宮：歌川広重の「木曽海道 六拾九次之内」の図がありますね。日本橋から大津まで揃っており、素晴らしい作品群です。
加藤：ここに雪景色の版画があります。昔はこんなことが度々あったんでしょうか、今日も丁度こんな天気ですね。
小宮：何枚もの版木を隅々までおこして、一枚ずつ順番に色を重ね刷りしていき、これが全部あっているんですから、おそろしい技ですね。
今津：こういうものに手を込めるというのがローテクがハイテクに繋がる。



安藤広重美術館外観写真



木曽路と十一宿の位置図

加藤：アナログだけどハイテクにつながるような…。
小宮：美術館の外観は置屋根形式の高山あたりの屋台蔵のような感じですね
今津：置屋根形式の蔵を現代の材料で作ったようですが、モダンな感じが出したっかったのかな。
林：中山道は、日本の中央部を縦断し、内陸各地への中央幹線路として、また東海道の裏街道ということで宿賃も安く、舟止めもないのでかなりの賑わいだったようですね。
今津：尾張徳川家は御料地ということもあって中山道を使ったようですが、御岳信仰とか善光寺参りの人達の利用も多かったでしょう。伊勢参りほどではないでしょうが。
林：江戸へは諏訪から軽井沢を通って熊谷を経てということで峠も多く、山間をぬう難所が多い街道だったようです。



「すや本店」の外観

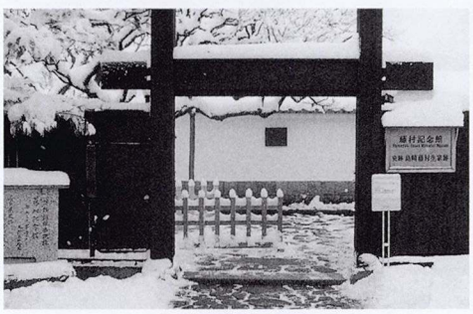


「是より北木曽路」碑





馬籠宿の街並み



藤村記念館入り口



馬籠高札所



馬籠付近の中山道の石畳

林：中津川には旧中山道に面した場所に、白井晟一さん設計の栗菓子の老舗「すや本店」がありますから、一寸寄って行きましょうか。

今津：道路との縁切りの玉石敷、出窓風のガラス窓、一文字瓦の勾配屋根など、和風の味わいの中に風格が感じられますね。

小宮：この店先の石敷きの床、入り口前の黒御影石の水鉢や店先脇に置かれた石台など、如何にも白井さんらしくて重厚だ。建ってからもう大分経つのでしょうが、古さを感じませんね。

加藤：十曲峠を越えた所、新茶屋に「是より北木曽路」の碑があり、約90km程の木曽路の入り口で、この先が馬籠ですね。

林：馬籠は岐阜県中津川市への越県合併で話題となった所ですが、当時の田中長野知事が、古くから信州の馬籠として周知されているものが、住民の意向とはいえ簡単に変わってしまうことは問題だとして、合併を中々認めなかったというエピソードがありました。

小宮：そういう歴史認識を大切にするのも分かります。

今津：馬籠は特別風致地区の指定で保存整備されてきた訳で、伝統的建造物群保存地区の指定を受けていないせいか 、土産物店も随分とオープンで自由度が高いという感じがあります。

林：今日は正月で、しかも大雪で観光客はほとんど居ませんが、普段はかなりの賑わいで、街道が坂ですから上がり下がりの人の流れが感じられる程です。

加藤：家も大分建て替えられていますが、昔風に造られているから違和感はあまりないですよね。

小宮：他の古い街並みと違い、ここはかなりの傾斜地で坂道に沿って段々状に各敷地が確保されているから、縦の変化がすごく大きいのでは。

今津：普通は軒や屋根の線が同じ位の高さで並ぶ訳ですが、ここは家並みの階段状の変化が大きく、構成の多様性があって、それも面白い。

林：それに、一般的な街並み保存地区では道の両側に沿って軒を連ねるという景観が多いが、ここでは家の前にも空地があったり、そこに植栽で緑あり段差の石垣ありで、街並みの潤いがありますよ。

今津：昔の木曽路の冬の宿場街というのは、きっとこんな雪のイメージなんでしょう。

加藤：ここは藤村の生家のあった所で、今は藤村記念館となっている。昭和27年の完成のようですね。

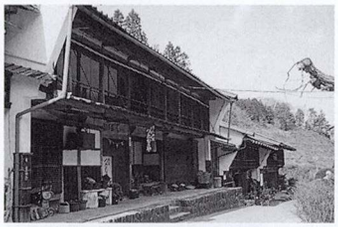
林：昭和30年代はインターナショナルスタイルに対し、一方でナショナリズムが提唱されていて、この谷口さんの記念館もいろいろと話題に上がったことを思い出します。冠木門の奥の白壁に掛かる象徴的な看板の写真や展示棟の和洋の構成に随分感動したものです。

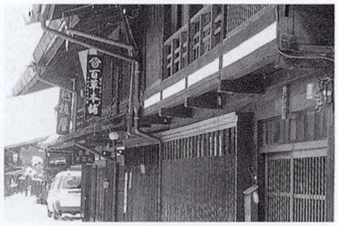
小宮：なるほど、わたしは京都やったから、前川国雄の京都会館とか、国際会議場とかが出てくる時代でしたから、そちらに感激してました。

今津：高札場へ着きました。雪の中でモヤって墨絵のようだ。

加藤：馬籠から途中大妻籠を通って妻籠への旧中山道は、山をぬって続く石畳もある遊歩道となっていて散策路として楽しい所ですね。

小宮：坂道できつそうですが、春の新緑がすばらしく、夏は涼を求めて来る人が多く、秋の紅葉で賑わい…、冬は飛び切り寒い。


大妻籠の旅籠の外観


出梁造りの状況

今津：ここが馬籠と妻籠の間にあり、“あいの宿”と呼ばれる大妻籠の集落ですね。昔の造りの建物が３軒残っている。この地方独特の軒の出の深い出梁造りで、卯建の上がる昔の立派な旅籠の様子が伺え、郷愁を誘う風情です。

今津：これから妻籠です。ここは昭和51年全国で初めての重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けた街並みですね。

林：馬籠と同様にここは、中央西線の鉄道からも又国道19号線からも離れていたことで、新しい時代の流れの影響を比較的受けずにいたので、古い街並みの保存が可能になったということでしょうか。

今津：重伝建指定を受けての保存となると、外観の形とか材質とかいろいろと制約を厳しく受けることになる。生活上の自由さという事でもやりづらい点はいろいろあるでしょうね。

小宮：車の問題とか、寒さ対策とか。昔の造りは開口部が多く、道に対してはすごく開放的ですし、まさかアルミサッシを建て込める訳にもいかないから……。

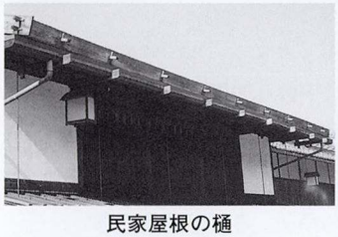
加藤：すごい景色ですね。

小宮：軒が深い、ここはすごい出梁がずっとある。これは樋と樋受けなんだ、木のねえ、ものすごく大きいねえ。木曽谷の民家のつくりはしっかりしていて、だから街並みも立派だ。江戸の街のほうがむしろぼろいです。良い大工も沢山いたんでしょう。

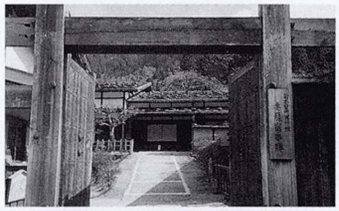
今津：普請がしっかりしているんですね。



妻籠宿の街並み


民家屋根の樋


妻籠宿桝形の状況


妻籠宿本陣の復元外観


妻籠宿脇本陣の外観

小宮：いい感じですね、このスケール感、ヒューマンスケールの感じで、なんか娘さんが声をかけて来るような、そんな感じ。こうした道の幅はどうしてきめたんだろうな。

行き交う旅人と迎えあう家の人達との会話が、何となくざわざわと聞こえるような街全体のスケール感というようなものに、皆さん訪れた人もほっとするのではないかと思うんです。

林：確かに日本人の体格が良くなり大きくなってきているが、しかし、そういう何となく我々が忘れてはいけない寸法、尺とは云わないが、そういったものを感じる世界があっても良いのではないか。それがこの街の持つ良さなんでしょうね。

加藤：非常に落ち着く、気持ちの安らぎが得られる。何か温もりに包まれているような優しさがありますね。

今津：今の若い人にこの空間に浸って実感して頂く、実体験するのに本当に良い空間ではないですかね。

それと、木材という同じ材料を使っていてもこんなに豊かな多様な形になるという、その地方の気候や生活と整合性のとれた形が出てくるということをほんとに素直に味わってもらいたいと思う。

今津：こんな旅籠だったら泊りたい。山国のスタイルは豊かな感じだ。別宅として数ヵ月アトリエ的に使いたいな。

小宮：京都の町家なんかでも、結局入り込んで生活される方は、物を作ってみえる方が多そうですね、単に住むというだけではなかなか住みにくいというのか、アトリエにしたりね、いろいろな使い方をしている方が多いじゃないんですか。

加藤：こういうのは外国人にも受けると思います。雪が降って風情があっていいな、もっと観光ナイズされているかと思った。

林：それでも10年ほど前まではそれほどでもなかったんですけど、だんだん馬籠に近づいている感じですね。人が来ればどうしても観光化してしまい、何処か他所で作ったものも売るということになる。

今津：妻籠から国道19号線に出た付近に、当初は大正11年に掛けられた木製の吊り橋の桃介橋がありますが、現在のものは平成５年に復元されたもので、全長250m位あり、全国で有数の長さだそうです。木材の産地ならではの吊り橋ですね。

林：三留野宿、野尻宿、須原宿、上松宿については、中央西線の駅


桃介橋


歌川広重　福し満の版画

近くであったり、木材の集積地や地場産業の振興或いは火災や洪水により喪失で、近代化の流れによる建て替えが進み、古い街並みは須原宿・上松宿に一部面影がある位で、他はほとんど残っていない。

加藤：上松は幾度も大火に見舞われたし、営林署があり木材の産出地として栄えていたから、経済力もあり、昔の雰囲気は無くなってしまっていますね。

今津：福島宿は尾張藩の木曽代官所があって、木曽の政治経済の中心であった。ここも大火で喪失してしまったが、ここ上の段地区に昔の面影が少し残っている。こんなに曲がった狭い道だったんですかね。建物も昔の造りで、建て直したものが少し見られるが……。

林：ここが福島関所跡。日本４大関所の一つだが、木曽川の崖の高い所に位置する、地形的に随分ときつい所だが、昔もこんなだったのでしょうか。

小宮：当時は平民がそう簡単に旅することもできなかたのでは。ほとんどが男性で女性は少なかったんでしょうね。でも皇女和宮もここを通って行った位ですから女性も多かったのかな。

今津：善光寺参り、お伊勢参りなど大旅行ですし、何々講というような集団が行ったんでしょうね。

加藤：福島関所の副関が贄川宿や馬籠峠の手前にもあって、それぞれの役割もあったようですね。福島関は女性と鉄砲の取り締まりを重視とか。馬籠の方は木曽５木の持ち出しを監視するとか！

小宮：宮ノ越は木曽義仲の旗揚げの地ですが、宿場の名残はあまりない。

加藤：ここが薮原宿になりますが、ほとんど宿場は残ってないですね。あのお六櫛の里で、看板もあります。

今津：この辺り正に山また山、広重の絵に見るような山合いをぬう感じです。トンネルなどないし，狭く険しい危険な所も多かったのでしょうね。まさに木曽路の難所という感じ。


福島関所跡現状


福島関所周りの復元模型写真


御在所のある上問屋の外観


奈良井宿街並みの幅広街道


奈良井宿街並みの狭い街道


木曽大橋

林：この辺りが鳥居峠で信濃川と木曽川の分水嶺ですよ。また野麦峠を通って高山へ抜ける飛騨街道奈川道との分岐点であり、伊那を通り高遠へ行く権兵衛街道の入り口でもある。昔の塩の道ですね。

林：ここも早くに、重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けている奈良井宿です。木曽路で一番の宿の数と言われ、奈良井千軒と言われる程の繁栄だったようです。千軒はオーバーでしょうが、現在でも街並みに面する家だけで300軒以上あるのでは！

加藤：凄い宿の数で、本当に一見の価値有りですね。ここからずっと延々続いて、１km位はあるんでしょうか。

小宮：各戸の敷地割りは京都の町家の様に間口が狭く奥に深い形で、中は通り土間形式が多いのでしょう。

今津：庇が大きいから、軒下の庇の下を結構歩ける位ですね。

小宮：造りものがここは珍しい。色々凄い。庇の屋根板押さえのような猿頭の彫り物が楽しいですね、形も色々ある。単純なものから凝ったものまで。

林：庇の吊り金物も、賊が上に登ると外れるよう、仕掛けに工夫がさているのだそうです。

小宮：泥棒除けですね。昔の人の頭の良さ、工夫の良さを感じさせるような造りがあり楽しい。

加藤：ちょっとお店の前に白熱灯がついているのがいいですね。実に味わいがある。新しい家もありますが、造りは古い形式で造っているから良く見ないとわからない。

小宮：ここも建物はほとんどが二階建てで、通りに面しては、あれでもつかなと思う程に開放空間がとられている。窓は格子戸が多いですね。格子というのは昔の町家では良く使われ、中からは見通しが良いが、外からは見え難いというすばらしい特徴がある。中で人が生活する様を通りから隠すという話でしょうか。


歌川広重 鳥居峠の版画


奈良井宿街並み


猿頭と吊り金具


奈良井宿街道鍵の手付近

今津：道路が微妙にカーブしていて何とも味わいがありますね。途中に鍵の手もあり、先まで見通しが利くのではなく、奥行きの深さを感じる。

小宮：これは立派なものですね。明治天皇が御休息された所でしょうか。行在所の部屋も残されている。

加藤：この辺は道路も広くなっているが、狭い所もあれば広い所もあり、味わいがありますね。

また緩やかな坂もあったりで変化に富んでいる。

林：戦略的な意図や、裏の崖や信濃川の曲がり具合によっても、街並みに変化が生まれている訳ですね。

加藤：奈良井宿は中央線を利用する度に見ていて、ずっと気になり関心は持っていたのですが、宿場通りを歩くと、全く江戸時代にタイムスリップしてしまうような、この街並みにはびっくりしました。

今津：最初は来てくれる。これ程整備されていて魅力的だと、その良さか判るからまた来てくれる。再来が期待できる訳ですね。

小宮：あまり観光化されていないのが良い。通りにはお店も多く、地場産の漆器の店が中心でまとまっているが、それが崩れずにいけば良い雰囲気ですよね。

林：地元で作る漆器は値段的に高くなってしまうので、中国産も入っているようです。

小宮：ここは川辺を公園にして、信濃川をまたいで錦帯橋のような太鼓橋を掛けた。地物の天然木の桧材をふんだんに使って見せ場とした訳ですね。

林：途中に橋脚のない太鼓橋としては日本一とか、例のふるさと創生の１億円による事業のようですね。木曽ならではの演出でしょう。

今津：これは地元の筑摩工房設計による、木造一部RC造の楢川小学校で、外部にも内部にも構造材・仕上げ材として地元木曽の木材を豊富に使用している。前田中知事の県産材利用促進や、地域の子供に地元産の木に親しんでもらうことを意図したのでしょう。

小宮：なかなか味わいがあり、昔の学校を見る感じですが、デザインも良く新鮮ささえ感じますね。

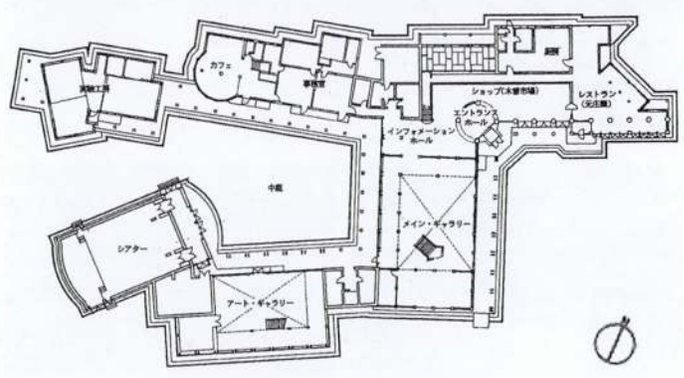
林：ここは平沢の集落。宿場街ではなく、古くから知れ渡った漆器作りの街で、国の「伝統的工芸品産地」に指定され、漆器関係の作家も多い。それぞれに看板をあげ店を開いて製造販売しているが、漆器は紫外線で劣化するので、内部を明るくしていない店が多いのだそうです。奈良井には大勢の観光客が来るが、隣のこの平沢まで足を延ばす人は少ないようですね。

加藤：昨年４月に重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けています。街並みは蛇行し、古い造りの風格ある家も多いけれど、そうでない家も混在していて、これから長い期間を掛けて街並みの保存修

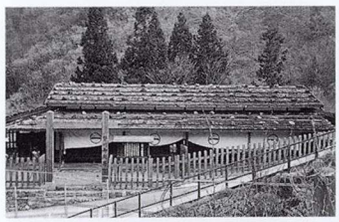

楢川小学校外観


平沢街並み


木曽くらしの工芸館外観



木曽くらしの工芸館平面



贄川副関所復元外観



「是より南 木曽路」碑

景をし、成果を上げていく訳で、どう変わっていくのか楽しみです。

今津：ここは、千葉大の福田裕一先生とまちづくりカンパニーの設計による「木曽くらしの工芸館」です。

加藤：漆工芸の良さを伝え、地域の伝統産業を広め発展さるための施設ですね。

小宮：これ、ほとんど木造なんだ。メインギャラリーはかなり広い空間だが、うまく処理していて内部も楽しめる。

林：建物の配置は、展示棟をメインに中庭を囲んで、分棟化されたものを回廊で繋ぎめぐる、変化のある空間構成です。

今津：木曽十一宿の最北端は贄川宿ですが、ここには国の重文の深沢家住宅が残る位です。また、福島関所の副関の贄川関所が復元されていて、当時の様子が伺えます。

加藤：木曽路の両端に副関があり、特産の木材や漆器、あるいは女人改めなど、随分と取調べが厳重だったのですね。

小宮：贄川宿と次の本山宿の中間位に、「是より南 木曽路」の碑があり、ここが中山道木曽路約90kmの北端ということで、昔なら2泊3日の行程でしょうが、今日は無事1日で巡りました。

最後に、十一宿を一通り回っての感想をお聞かせ下さい。

加藤：大変に有意義でした。ほんとに久し振りに来た妻籠も、自分が覚えていたよりずっときれいに整備されていた。まあ観光ナイズされてはいるのですが、そんなに嫌らしい観光化ではないような、今日の雪景色にも助けられていると思いますが……。街並み保存としての雰囲気作りということと、観光客の迎え方での調和をとっていくことは、地域の人の生活や地域振興との関連があり、非常に難しいことだと思いますね。

小宮：馬籠・妻籠そして奈良井という大きな宿場を見て回り、本当にタイムスリップしたような、この山の中の日本の昔からの民家というものが、確かにこういうスタイル、確かにこういう形であったろうなという何か納得ゆく感じです。

今津：十一宿の中で、馬籠・妻籠・奈良井宿はよく保存され宿場の昔の様子が伺える。一方、他の宿はまあほとんど面影も残さないという状況です。近代化の波の中で家も街並みも新しくなってきたのですが、大方、伝統産業を継承していた所や、鉄道駅から離れていて新しい波の影響を受けなかった所が、結果として古いものが残り、街並保存へと繋がってきている。そんな時代の流れの中で差が出てきている現実をみて興味を感じました。

林：木曽谷は国道19号の通行によって自動車の通過交通量は多いが、地場産の木材の衰退ということや、中央道が伊那谷を通ってしまったりで、ちょっと影が薄れてきているという所はありますが、そんな状況の中で伝統的な保存された街並みが新たな価値を生み、大きな観光資源となり、木曽谷がまた生き返ってくる、あるいは見直されてくるということで、この地域の新たな存在価値が生じてきている。

小宮：地形と街並みの関係で、保存されている宿場では、傾斜地や狭い谷間などそれぞれの地形を生かした、また戦略上の理由から巧みな味わいのある街並みづくりがなされていて、昔の人の知恵が本当に生きているという風に感じます。

林：保存の活力という点で、重伝建の指定というのは、良い面も大変なこともあると思うが、一つその指定ということがきっかけでその地区の住民が団結し、一つの方向に固まっていく。そして結果としてこれだけの保存がなされ、地区の人々がそれを誇りに思い維持していることは、非常に意義深いし、指定の効果の大きさを感じます。

小宮：妻籠は特にですが、他でも全体を通して、ヒューマンスケールの建築空間みたいなものを非常に感じる場でした。街道が崩れる一番大きな問題は道路の幅が広がっていって、そこへ通過交通の自動車が割り込んできて、街はだんだんと大きくなると共に、コミュニティ空間を崩していくという流れがある訳で、今後のためにもああいう空間を残してほしいなーという思いです。

今津：そうなんです、こういう情景を見ると感じますが、現代社会を振り返って、色々と修正する必要があるのではと思うヒントの元を得る場所ではないか、という気がする。ここに日本人の昔あった生活スタイル、生きていくこと、働くこと、日常スタイルの原点が詰まっているような気がして、本当に色々な発見が出来るのではないかと思います。

有難うございました。

参加者：

今津　芳清（いまず　よしきよ　篠田川口建築事務所、支部幹事）

加藤亜紀子（かとう　あきこ　インテリアコーディネーター、支部編集委員）

小宮　三辰（こみや　みつとき　三辰設計、支部顧問）

林　　金之（はやし　かねゆき　愛知工業大学、支部監査）

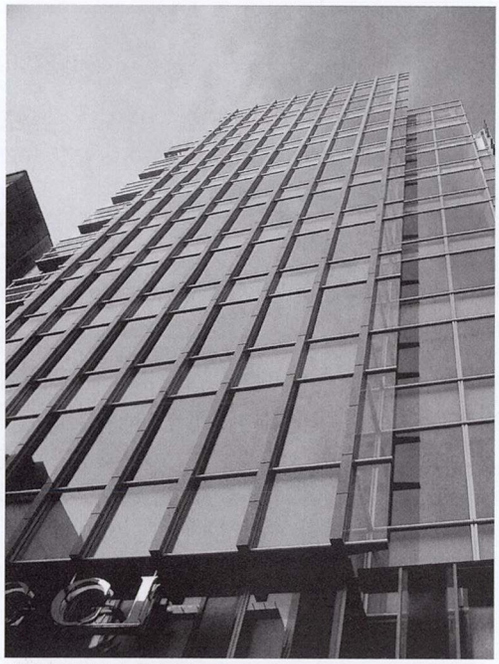
ガラスを主題に構成したファサード

RICCO 栄

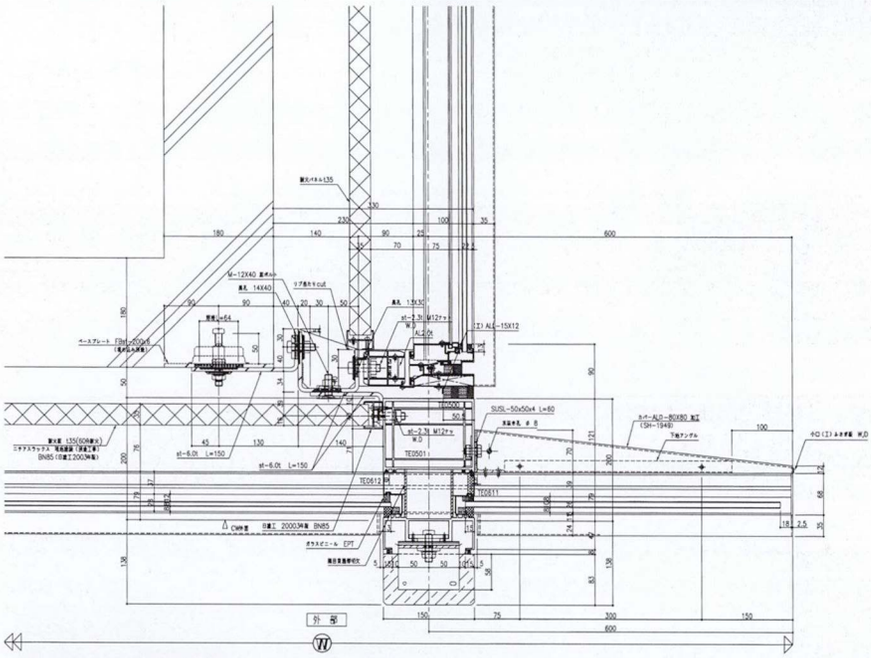


名古屋・栄に建つ高級ブランド店と賃貸オフィスからなるテナントビルである。2面を道路に面する角地のため、隣地側に片側コアを設け道路側に店舗と事務室が開かれたプランとしている。ファサードにはショーウィンドウや採光面としての機能と街並みに呼応する意匠、さらにブランドアイデンティティを表現する店舗と全体の調和を図るデザインが求められた。低層階のブランド店はオリジナルデザインの着色型ガラスを水平方向にリズミカルに配した重厚感と透過性を併せ持つ意匠となっている。この店舗ファサードを基壇と位置づけて、基準階もガラスを主題にシャフト部からトップへ突き出す一対のガラスレイヤーがコーナーを象徴的に演出するファサードデザインを構築することとした。基準階は透明感と省エネ効果を考慮してLowE＋フロートの複層ガラスを採用している。ガラスレイヤーはガラス小口を見せる意匠で透明感を演出し、化粧マリオンにより垂直性を強調することで基壇に対するコントラストを与えている。

（大林組設計部　池村忠久）



ガラスレイヤー見上げ



ガラスレイヤー端部詳細図



店舗エントランス



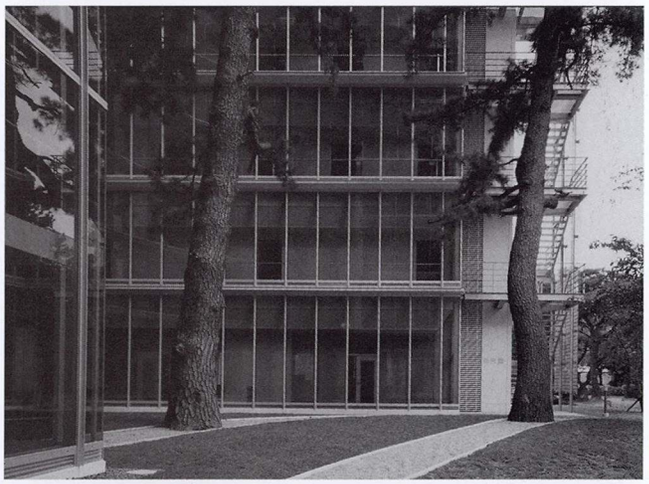
基壇部ガラスファサード詳細

「ガラス」への試み

安井建築設計事務所
益田正博



MPG工法により支持されたシルク印刷合わせガラスによる軽快な屋外階段のスクリーン



ランドスケープを取り込むフロアtoフロアのカーテンウォール



西面の日射を柔らかく透過させるガラスブロック

研究室の集合体であるこの建物はプライバシーを重視する研究室以外のゾーンを極力クリアーで開かれたイメージの建物として計画した。コの字で囲む中庭に対しては全面をミニマルなカーテンウォールで構成し、既存の松を借景として取り込み、西面はガラスブロックによる柔らかな光が溢れ、機能性に合せた様々なシーンを作り出した。

愛知大学研究館

所　在　地　愛知県豊橋市町畑町
用　　途　大学（研究室他）
構造・規模　鉄骨造、地上８階
設　　計　安井建築設計事務所
施　　工　竹中工務店



逆円すい形を形成する起型カーテンウォールは見込みの深いフィンにより多角形を感じさせない。無目にはエアフロー機能も備える



サインとしての機能を持たせたアプローチ部分のMPGカーテンウォール



礼拝対象は照明の点灯により文字が浮かび上がる

地域のランドマークとなり、地域や社会との接点の場となることを目指したこの建物では、その外観を特徴的な逆円すい形として誰にでも覚えやすく親しみの持てるよう計画した。内部環境に対しても複層ガラスやエアフロー、エアバリアファンなどの機能を持たせ、より快適な環境となるよう配慮した。

同朋学園　Doプラザ閲蔵

所　在　地　名古屋市中村区稲葉地町
用　　途　大学図書館他
構造・規模　鉄骨造、地上５階
設　　計　安井建築設計事務所
施　　工　大林組

社会福祉法人　暖家

健康館 フェニックス

岐阜県各務原市

竹中工務店設計部
町田伊左雄

■慣習的な場所・用途・人の組み合わせのシャッフルによる新しい社会的日常風景の創出

岐阜県各務原市の外に建つ平屋、一部２階建ての、シニアフィットネス、メディカルフィットネスを中心とする老人福祉施設です。価値観が多様化した団塊の世代が高齢者となるこれからを意識し、従来の高齢者施設のイメージを払拭すると同時に、様々な世代の人々が行き交う開かれた地域交流拠点となることを目指しました。

施設がサポートする「継続的に行なう適度な運動による規則正しい生活」を「反復・秩序・軽快感」として繊細なホワイトフレーム（竪樋）の連続と薄い屋根による建築的表現に置換しています。この繊細なフレームに縁取られたガラスボックスを連続するコ型に配置し、アプローチを最奥まで引込み、逆に主要なスペースを前面に出すことで、緩やかに分けられながらも連続する内部が外部空間を取り込み視覚的一体感を生むと同時に内部のアクティビティーを直接外部に表出し、地域の風景と連続しながら開かれた施設としての存在感を獲得しています。

畑が拡がるのんびりとした郊外風景・運動する様々な世代の人々（主婦層、農家のおじさん、ぽっちゃり気味の子供）・フィットネス機器類が明るい自然光のもとガラスの透明な空間に重層化しながら地上面展開される風景は、都市的施設としての従来のフィットネスの風景とは異なり、健康づくりと街づくりが一体となった、ありそうでなかったこれからの新しい社会的日常風景が生み出されたと感じています。



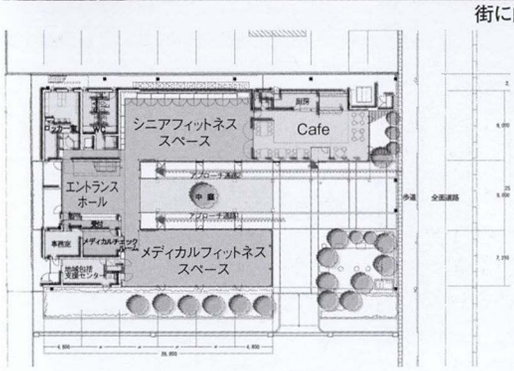
最奥に配置されたエントランスへのアプローチ



街に向いて開かれた構え、アプローチ空間



中庭越しに一体となるアプローチ、エントランス、フィットネス



アプローチの連続する繊細なホワイトフレームは、竪樋として機能と表現の融合を図り、サッシュマリオンを兼ねた100×50□パイプの構造柱と共にガラスボックスによる空間の「透明感」をより一層高めています。中庭を取り囲むアプローチ通路・エントランス・フィットネススペースがガラス越しに利用者間、周囲を行き来する人間のコミュニケーションを誘発し、内外の一体感をより一層高めています。



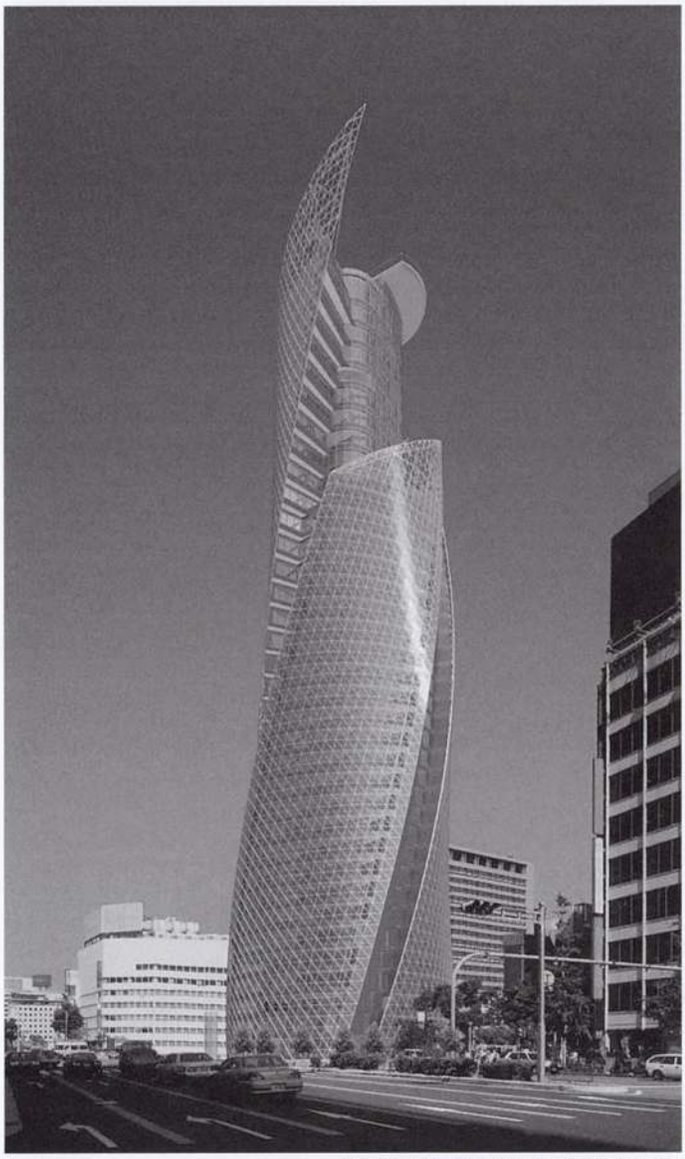
自然光が溢れる明るいメディカルフィットネススペース

モード学園 スパイラルタワーズ

愛知県名古屋市

日建設計
若林　亮
設計部門副代表兼設計室長

名古屋駅周辺のスカイラインが大きく変わろうとしている。
ミッドランドスクエア、名古屋ルーセントタワーに続き、2008年3月の竣工を目指す「モード学園スパイラルタワーズ」は、ここで学ぶ「若者の夢と創造」のエネルギーが絡み合いながら上昇する様を表すよう、3つの扇型平面のウィングがインナーチューブと呼ぶセンターコアを中心に、上階に行くほど回転しながら徐々にその平面が縮小していくスパイラル状の特異な外観を有している。
地上36階のスパイラル状の建物は布を纏うような柔らかな曲線のシルエットを持ち、これを実現することを設計・施工上の大きな課題として工事が進行している。



笹島交差点側からの全景（完成イメージ）

三次元のフォルムをつくる多面体三角形によるガラスカーテンウォール

約17,300㎡に及ぶスパイラル状の3次元の外壁は、三角形フレームのガラスカーテンウォールの多面体で構成されている。三角形を二つ繋げた、それぞれ角度の異なる2,310の平行四辺形のアルミユニットが、現在、下階から順次取り付けられている。
建物の構造には、柱にオイルダンパーを組み込んだ「制振カラム」を採用していることから、このカーテンウォールの挙動も複雑であり、実大のモックアップによる検証による追従性能の確認を行っている。



2007年2月初旬の施工状況



カーテンウォールの近景



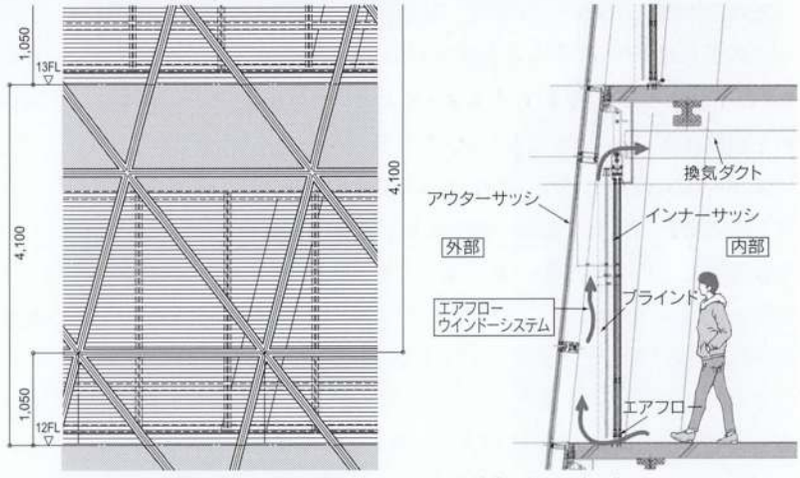
吊り下げながらユニットを規定の位置に移動



ユニットの取り付け直前の様子

環境負荷を低減するダブルスキン

内部から外への開放的な視界を実現する床から天井までの大きな窓を持つ教室は、スパイラル状であることから東西南北の全方位に面する。
電波障害を軽減する目的からLow-eガラスが採用できないことから、外部のアルミカーテンウォールの室内側にインナーサッシュを設けるダブルスキンとし、ポリカーボネート製のブラインドをそのダブルスキンの間に設け、日射熱の反射・遮蔽を行っている。
また、ブラインドの羽は上面を白、下面を黒色のものとすることで、上から来る日射を反射させ、一方で、都市景観上、ガラス越しに見えるブラインドの存在感を感じさせないようにしている。



外部サッシュとインナーサッシュによるダブルグレージングのエアフローシステム

支部機関誌「東海の建築」の発行と支部活動の役割を考える

■「東海の建築」の創刊のころ

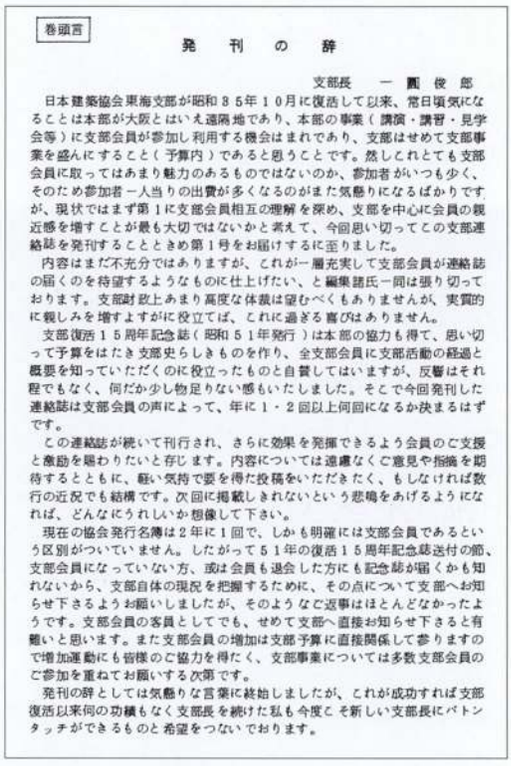
「東海の建築」の創刊は、支部が復活して17年を経過した昭和53年８月10日でした。当時の支部長一圓俊郎先生（故人）による巻頭言「発刊の辞」には、「支部会員相互の理解を深め、支部会員の親近感を増すことが最も大切ではないかと考え、今回、思い切ってこの支部連絡誌を発刊することとときめ第１号をお届けするに至りました」とあります。

連絡誌というものの「東海の建築―１」の内容は「動き」「論叢」「支部の動き」のほか、「ひとこと」「Designあれこれ」「建築紹介」「随想」「読者のひろば」と多彩で、読み物風のものであったといえます。

しばらくは読み物風のものが続くものの徐々に支部機関誌としての色彩が強くなり、編集内容も役員会で検討され、役員が分担するケースも多かったようです。発行回数は支部催事の報告を中心に年２回でした。

年２回といっても一度は総会報告であり、連絡誌か、情報誌か、読み物誌か、が常に話題、問題となっていました。連絡や情報発信は、年２回といことから速報性に無理があり、結局、読み物風にしようということになりました。

そこで26号（平成４年12月15日）から体裁を一新、B5横からB5縦の厚手用紙と変わり、活字もタイプ印刷から、オフセット印刷の丸ゴチとし、建築やデザイン関係の団体に相応しいものを目指すことになりました。内容的には、一気に読み物風とはなりませんでしたが、徐々に内容が変わってきたと思います。（松本支部長・元編集委員長）



巻頭言

発　刊　の　辞

支部長　一圓俊郎

日本建築協会東海支部が昭和３５年１０月に復活して以来、常日頃気になることは本部が大阪とはいえ遠隔地であり、本部の事業（講演・講習・見学会等）に支部会員が参加し利用する機会はまれであり、支部はせめて支部事業を盛んにすること（予算内）であると思うことです。然しこれとても支部会員に取ってはあまり魅力のあるものではないのか、参加者がいつも少く、そのため参加者一人当りの出費が多くなるのがまた気懸りになるばかりですが、現状ではまず第１に支部会員相互の理解を深め、支部を中心に会員の親近感を増すことが最も大切ではないかと考えて、今回思い切ってこの支部連絡誌を発刊することとときめ第１号をお届けするに至りました。

内容はまだ不充分ではありますが、これが一層充実して支部会員が連絡誌の届くのを待望するようなものに仕上げたい、と編集諸氏一同は張り切っております。支部討議上あまり高度な体裁は望むべくもありませんが、実質的に親しみを増すよすがに役立てば、これに過ぎる喜びはありません。

支部復活１５周年記念誌（昭和５１年発行）は本部の協力も得て、思い切って予算をはたき支部史らしきものを作り、全支部会員に支部活動の経過と概要を知っていただくのに役立ったものと自賛してはいますが、反響はそれ程でもなく、何だか少し物足りない感もいたしました。そこで今回発刊した連絡誌は支部会員の声によって、年に１・２回以上何回になるか決まるはずです。

この連絡誌が続いて刊行され、さらに効果を発揮できるよう会員のご支援と激励を賜わりたいと存じます。内容については遠慮なくご意見や指摘を期待するとともに、軽い気持で要を得た投稿をいただきたく、もしなければ数行の近況でも結構です。次回に掲載しきれないという悲鳴をあげるようになれば、どんなにうれしいか想像して下さい。

現在の協会発行名簿は２年に１回で、しかも明確には支部会員であるという区別がついていません。したがって５１年の復活１５周年記念誌送付の節、支部会員になっていない方、或は会員も退会した方にも記念誌が届くかも知れないから、支部自体の現況を把握するために、その点について支部へお知らせ下さるようお願いしましたが、そのようなご返事はほとんどなかったようです。支部会員の客員としてでも、せめて支部へ直接お知らせ下さると有難いと思います。また支部会員の増加は支部予算に直接関係して参りますので増加運動にも皆様のご協力を得たく、支部事業については多数支部会員のご参加を重ねてお願いする次第です。

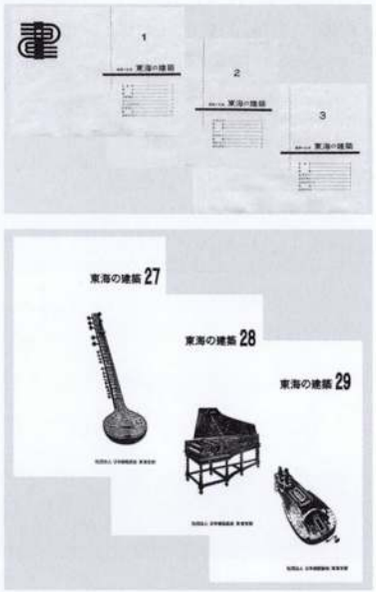
発刊の辞としては気懸りな言葉に終始しましたが、これが成功すれば支部復活以来何の功績もなく支部長を続けた私も今度こそ新しい支部長にバトンタッチができるものと希望をつないでおります。

■新生「東海の建築」の誕生と当時の内容を考える

私は平成９年度と10年度の２年間編集委員会委員長を拝命し「東海の建築」の編集を取りまとめました。編集委員会には平成５年から参加しています。当時は年に３号を発行していました。１号を編集するのに４ケ月を掛けていました。月に１回編集委員会を開催し、編集内容を討議して、執筆者を選定していました。また、発行前の委員会では出席者全員でゲラの校正もしていました。校正というのもなかなか厄介なもので、委員会でこのほうがいいだろうとか、これは間違っていると思って修正すると、執筆者からクレームをいただいたこともあります。私は、協会での編集委員長を終えた後、別の団体でも機関誌の編集に携わりましたが、そこでも校正をすることとなり、今では、文章を読むときにいつも校正的な読み方をしてしまい、間違いは発見するが、内容があまり頭に入らないようなときもあります。

当時、「東海の建築」の体裁は、現在のようにA4版ではなく、B5版で紙質も若干厚めで薄く黄色がかっていました。ちょうど社会全体がB系列からA系列に移行するときでしたので、委員会でもA4版化を議論しましたが、すんなりと移行が決まらなかったと記憶しています。A4になるとページ数が減って自立できず、へなっと倒れてしまうとか（B5版では厚い紙質の助けもあって何とか立っていられるのです）、手作り感がなくなるとか、いろいろな意見がでました。しばらくはこのままで行こうということで進めたと思います。現在はA4版になっていますが、時代の流れというか、社会状況というか、結果的にはこれでよかったと思います。今では昔のB5版の本や書類が引き出しの中で収まりが悪くなってしまっています。

編集方針あるいは掲載記事については、当時、私は「東海の建築」はあくまでも会の機関誌であるのだから、会の活動を会員に知らせるのが本来の意義であると考えていました。支部役員会の様子や見学会、研修会等のレポートを掲載して支部の活動を出来るだけ克明に一般会員に知らせるのが機関誌の使命と考えていました。一般会員が会の活動に手軽に接することが出来るのが機関誌だからです。しかし、それだけではつまらない。中には議論が高まらない役員会の報告などは面白くないという意見をいただいたこともあります。もちろん会の活動報告だけでは、ページも埋まりません。ほかの機関誌同様、特集なども組んでいました。しかし、その特集テーマを探すのもなかなか大変なものでした。建築あるいは社会との関連を考えながら委員会で検討しました。私が委員長のときは「環境」「変えたいもの変えたくないもの」「日本と世界」などを取り上げました。



「環境」は当時、環境という視点が一般化し、また、地球温暖化なども社会的に取り上げられていたからということだったと記憶しています。委員会では「環境」だけではテーマとして大きすぎて話がまとまるだろうかとの懸念もありました。まとまらなくても、いろいろな意見がでるだけでもいいのではないかとの意見もあり決まったようです。案の定、いろいろな内容のものが集まりましたが、

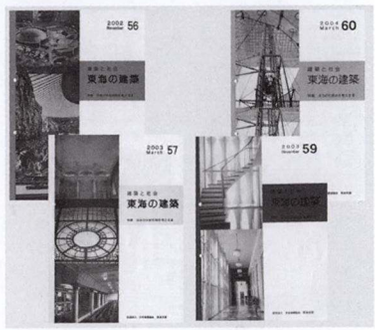
環境のいろいろな捕らえ方を知ることができました。

「変えたいもの変えたくないもの」は以前に取り上げた「変わるもの変わらないもの」により積極的な意味合いあるいは意識を持たせることで取り上げたテーマです。委員会としては私たちを取り巻く社会環境や自然あるいは伝統的なものをイメージしていましたが、中には会員個人の趣味的なこだわりの執筆もありましたが、それはそれでその人の人となりを垣間見ることができました。

「日本と世界」では海外生活経験のある会員から言葉遣いにおける外国人と日本人の違いを知ることができたり、外国人からみた日本を感じることが出来ました。また、この時期に団体会員に目を向けた「団体会員だより」も始まりました。会費は納めるもののあまり活動の場がなかった団体会員に、商品カタログのようにはならずに各企業の取組などをPRするページを確保しました。さらには、建築系大学の研究室紹介も行いました。

会の活動の現状を認識し今後の展開を探るべく編集委員会とその他の常置委員会の対談も行いました。それぞれの委員会とも活動が硬直化し、また、活動がある特定の委員の肩にかかってしまい、交代もままならない状況が浮き彫りになりました。

いま、「東海の建築」は財政上の事情から年2回の発行となっています。こうなってはもうタイムリーというか速報的な位置づけは期待できないと思います。3回発行の時でさえ、かなり古い活動の報告がやっと一般会員の目に触れる状態でした。そんな状況では役員会の報告などを掲載しても、それはただ紙に記録として残っているというだけではないでしょうか。ペーパーとして残っていることも大事だろうとは思いますが、何となく心が揺れるところです。JIAでは今、会長がウイークリーレポートを私信として発信し事務局を通じてメールで配信されています。これで本部での活動の様子が凡そ理解できます。私などは古い人間ですので簡単なメール以外はやはりプリントアウトして読んでしまいますが、これはどの段階でプリントするかということです。建築協会も本部、支部含めてホームページやメールと機関誌の棲み分けを検討する時期かも知れません。そんなことを踏まえると「東海の建築」は時間に左右されることのないテーマを選定していく必要があると思います。建築あるいは社会において様々な立場で関わる会員を有する建築協会としては、「東海の建築」は学術的あるいは実務的、設計や施工さらに生産などいろいろな切り口で扱えるテーマの設定により読み物としておもしろく、ためになるものにしていく必要があるのではないかと思います。（鈴木・元編集委員長）



■最近の「東海の建築」の紹介と今後の企画について

平成10年11月の「東海の建築」44号で、「支部活動の現状から今後の方向性を考える」というタイトルで委員会の対談記事が掲載されています。それから8年余りが過ぎているわけですが、根本にある問題は今も変わっていないようですし、支部活動の現状も社会の情勢を反映している様に思います。建築協会への若い人達の参加と、色々な場面での世代交代もうたわれますが、その若い人達が一番忙しそうです。会員数が減少しつつある中で機関誌「東海の建築」はいかにあるべきか難しいところですが、私個人としては広く浅くより、ひとつにこだわって作っていけたらと思っています。

最近の特集のテーマとしては「まちのしくみを考える」、「東海再見」、「災害列島」、「都市のアメニティとまちづくり」等ですが、「災害列島」の時は、2004年の中越地震と台風21号の後であったので、被災した方の体験や、ボランティアとしての体験、また、東邦ガス診療所の林先生には無理をお願いして、「医学的に見た災害時のコミュニケーションの大切さ」について寄稿していただきました。シリーズ「災害列島」は3回続けたわけですが、その最終号では「避難所となってしまう学校の対応」や、「大規模災害時のトイレ対策」、更に「エレベーター内に閉じ込められたら？」などの記事を、行政やメーカーの方にお願いしました。もっと掘り下げた内容にしたいのですが、時間と人選とが難しいのが現実です。「東海再見」は、東海地区にある企業を中心に、建築協会団体会員企業の特色や技術について寄稿してもらっています。団体会員の方でも、皆さん技術を持っておられるはずですし、製品名を出しPRを兼ねても良いと思いますが、文章となると尻込みされます。このテーマについては、建設業に限定せずに不連続ででも続けていけたらと思います。

「まちのしくみを考える」と「都市のアメニティとまちづくり」は、建築屋ならずとも大事なテーマです。北海道夕張市のように財政破綻する都市がある一方で、「住みよさ日本一」「暮らしやすさ日本一」「美しい都市ランキング」などのキャッチフレーズで、町に順位がつけられます。順位の枠外にある町や村の方がはるかに多いでしょうし、誰しも「おのが町が一番」と思っているのでしょうが、日本一の街とはどのようなつくりと営みをしているのでしょうか。住み良さ日本一でなくても、それぞれが暮らしている所に愛着や誇り、安らぎがあります。日々の暮らしも連綿と続いており、そこが嫌いだからといって簡単に逃げ出すことも難しいことです。出来るものならば、「住みよいまちに暮らしたい」と願うのは人として当然でしょう。さて2006年「住みよさランキング」1位は、福井市でしたが、余所とどこが違うのか、「東海の建築」の中で取り上げてみたいと思っています。

東海支部の21世紀委員会では、新たな活動として「建築の研究と設計とをつなぐ～役に立つ研究を学んで、建築を楽しく理解しよう！」を行う予定です。大学の先生を交えて、特に人が集まる建物の見学（観察・調査？）を行いながら、議論・講評をしていくものです。その内容なり成果なりを掲載できたら面白いと考えています。若い人達も参加してくださる様なので楽しみですし、支部活動の活性化にもなると思います。（松元編集委員長）

「建築と社会」誌

特集一覧●1985～2006

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備Ⅰ	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり―Ⅰ― ●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり―Ⅱ― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―＊	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台―仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江―その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念／建築と私と社会―80人の眼―＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 ●岐阜・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン＆インフィル	●改正建築基準法―パートⅡ―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●ＩＴ社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境―近未来に向けて今できること― ●大建設計―作品特集1996～2001―	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法―会員作品―	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心―パート2―	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●漆町リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて～サステナブルエンジニアリングの現在～	●私の空間作法―会員作品―	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋―この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える―	●サスティナビリティ―次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン～	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン―インテリアから発信するまちなみ―	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー―建築の主観的価値について～	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法―会員作品―	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯～心地よさを求めて～	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法―会員作品―	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法―会員作品―	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質～光と影のはざまで～	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー―エネルギーをたくわえ、有効利用する～	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…～構造が未来へつなぐ夢～	●私の空間作法―会員作品―

＊は欠号

バリアフリー新法—施策、取り組みを中心に—

竹田　茂
兵庫県県土整備部まちづくり局まちづくり課課長補佐兼福祉のまちづくり指導係長

従来の交通バリアフリー法とハートビル法を統合・拡充したバリアフリー新法が昨年12月20日に施行された。この新法では、バリアフリー化を義務付ける施設に道路、駐車場及び公園等が加えられ、また、市町村が一体的なバリアフリー化を図るため位置づける重点整備地区を多様な地区に設定できるようになったほか、協議会や提案制度等利用当事者が参画するための仕組みが盛り込まれた。

バリアフリー新法の概要

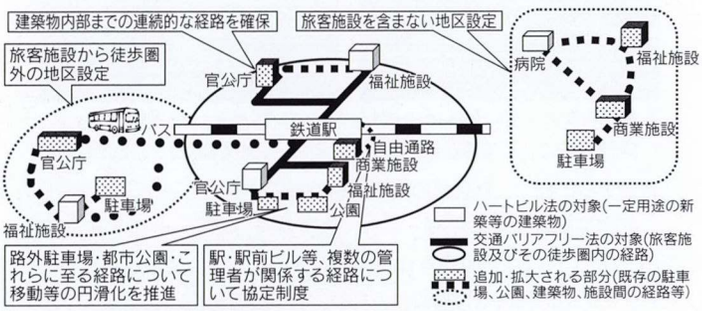
国は、移動等の円滑化の促進に関する基本方針を策定した。

(1) 移動等の円滑化のために施設管理者が講ずべき措置

- 旅客施設及び車両等、道路、路外駐車場、都市公園並びに建築物について、新設または改良時の移動等円滑化基準への適合義務
- 既存のこれらの施設について、基準適合の努力義務
- 多数の人々が利用する建築物の計画の認定制度

(2) 重点整備地区における移動等の円滑化に係る事業の重点かつ一体的な実施

- 市町村は、基本構想を作成
- 公共交通事業者、道路・公園・路外駐車場管理者、建築物の所有者、公安委員会は、移動等の円滑化のための特定事業を実施
- 駅及び駅前ビル等、複数の管理者が関係する経路の協定制度



重点整備地区における移動等の円滑化のイメージ

(3) 住民等の計画段階からの参加の促進を図るための措置

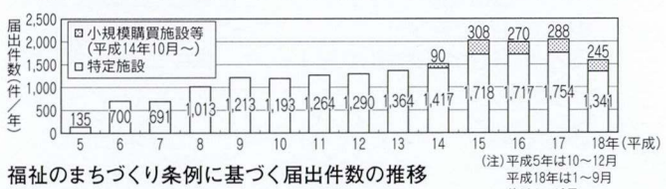
- 基本構想策定時の協議会制度
- 住民等の基本構想作成の提案制度

兵庫県の施策

兵庫県では全国の都道府県に先駆け、平成４年に「福祉のまちづくり条例」を制定した。本条例は、高齢者や障害者を含むすべての県民がいきいきと生活できる福祉のまちづくりの推進を目指したもので、建築物、公共交通機関の施設のほか、新法で追加された道路、公園、駐車場もバリアフリー化の対象としている。また、基本方針では、新法の重点整備地区と同じ趣旨の重点地区の整備を位置づけており、この条例の運用を核に施策を推進している。

(1) 条例に基づく届出状況

条例では、多くの県民が日常的に利用する施設を新築・改築等する場合に、整備基準の遵守及び市町への届出を義務付けている。



福祉のまちづくり条例に基づく届出件数の推移

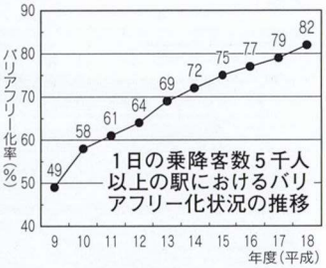
(注)平成5年は10～12月
平成18年は1～9月
他は1～12月

(2) 福祉のまちづくり重点地区

高齢者等を含む多くの人々が利用する施設が集積する地区を、市町が重点地区に指定し、民間を含む建築物、公共交通機関、道路、公園等について面的な整備を進めている。平成５年度から市町の計画策定を支援し、37市町、155地区で計画が策定された。

(3) 鉄道駅舎エレベーター等設置補助事業

公共交通機関のバリアフリー化を促進するため、平成５年度から、鉄道事業者に対し駅舎の改造費を補助している。平成18年度末には、１日の乗降客数が５千人以上の172駅のうち121駅にエレベーターが設置される予定で、スロープ設置等を含め82.0％に相当する141駅がバリアフリー化される見込みである。



(4) ノンステップバス等購入補助事業

平成５年度から、民営バス事業者に対しノンステップバス等の購入費を補助している。平成18年度末には、民営バスにおけるノンステップバスの割合は16.1％、公営を含めると27.5％に達する見込みである。

(5) 人生80年いきいき住宅助成事業

すべての県民が住み慣れた住宅で自立した生活を送ることができるよう、平成７年度から段差解消、手すり設置、トイレ改造等の既存住宅を改造する者に対し、県と市町が連携し助成している。助成件数は、平成18年度末に26,000件を超える見込みである。

新たな取り組み

本県の条例では、既に規模の小さな建築物までバリアフリー化の対象としており、また、当事者参画やスパイラルアップにも取り組み始めている。今後は、新法に設けられた制度をツールとして活用し、ユニバーサル社会づくりの実現を目指していく。

(1) 障害者等の参画するまち検証

安全で快適な福祉のまちづくりの実現に向け、平成17年度から障害者が参画し、まちの施設を点検する「まち検証」を実施しており、結果を条例の整備基準の見直し等に反映することとしている。


点検風景（姫路大手前通）


点検風景（阪急宝塚南口駅）

(2) ユニバーサル社会づくり実践モデル地区

誰にも優しいまちづくりを目指すユニバーサル社会の早期実現を図るため、平成18年度から住民、企業、NPO等と協働して施設のバリアフリー化等のハード整備とともに、高齢者等の社会参画等のソフト事業に取り組む区域を県が指定し、協議会活動や各種事業の実施等に重点的な支援を行うこととしている。　（たけだ　しげる）

天満天神繁昌亭の構造設計

廣田右喬
㈱北條建築構造研究所

上方落語は三百年の歴史を誇る伝統笑芸である。

天満天神繁昌亭は、地元商店街と上方落語協会が中心となって建設資金を募り、戦後初めて大阪に建設された上方落語の定席である。上方落語に灯をともし、大阪の街の復権に寄与し、浪速の街の観光の拠点となるべく建設された。

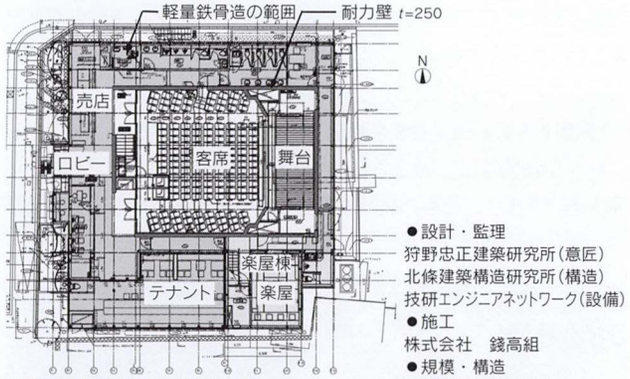
平成18年９月にオープンし、次世代の上方落語を担う落語家の修業の場として、また、地元商店街の中心として連日賑わっている（**写真１**）。



写真１　天満天神繁昌亭外観

建物概要

本建物は、舞台・客席を中心とした劇場棟と、南東部に位置する楽屋棟に分けられる。劇場棟は地上２階建てのRC・S混構造、楽屋棟は地上３階建てのS造であり、それぞれをエキスパンションジョイントにより独立した建物として計画した。劇場棟の１階には舞台・客席のほか、エントランス・売店・便所等があり、正面入口を入ってすぐの階段から２階客席へと上がることができる。楽屋棟は出演者の控室のほか、上方落語協会の事務室としての機能も有している。



●設計・監理
狩野忠正建築研究所（意匠）
北條建築構造研究所（構造）
技研エンジニアネットワーク（設備）
●施工
株式会社　錢高組
●規模・構造
建築面積　457.76㎡
延床面積　589.93㎡
RC造一部S造、地上3階

建築地／大阪市北区天神橋２丁目
建築主／天満天神繁昌亭開設準備委員会
工期／2005年12月1日～2006年8月15日

図１　配置図兼１階平面図

建物外周の軒回りおよび客席天井には、建設資金の寄付に協力された方々の芳名が記された提灯が、ところ狭しと並んでいる（**写真２**）。

構造設計概要

本建物の主たる耐力要素はRC造である。客席および舞台の外周をRC耐力壁とすることにより、鉛直荷重を地盤に伝達し、地震または風圧により生ずる水平力を負担している。耐力壁の壁厚を250㎜とすることにより、水平力に対して十分な強度と剛性を確保している。

客室上部の屋根部分は10mを超えるスパンになるが、屋根の寄棟形状を生かして鉄骨トラス架構とし、□-100×50とL-90×90で構成される軽快な屋根となった（**写真３**）。

客席・舞台の周囲は平屋建てのS造で、屋根面に水平ブレースを配置して水平力をRC耐力壁に伝達させている。これにより、柱が□-100×100、梁がC-200×75またはC-150×75の軽量鉄骨とすることができた。屋根および下屋を軽量鉄骨で構成し、２階床をS造として軽量化を図ることで、RCルート１の設計において必要な壁量に対して東西方向で6.93倍、南北方向で3.22倍の壁量を確保している。

楽屋棟は、床を合成床版とし、柱は角型鋼管□-100×100、梁は□-200×75および□-150×75である。引張ブレースを多く配置することで、建物の剛性と耐力を高めながらも、構造躯体を薄くすることができた。

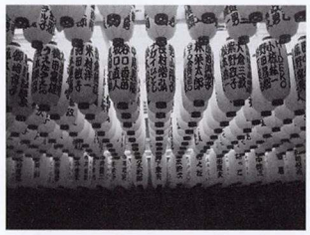


写真２　客席上部に吊るされた提灯

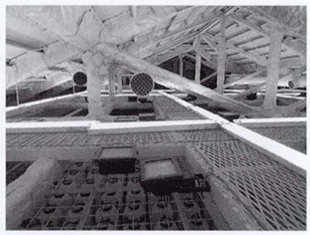


写真３　屋根鉄骨

鉄骨の接合部は劇場棟・楽屋棟ともに、隅肉溶接またはボルト接合とすることで、接合部の簡略化を図っている。

基礎は劇場棟・楽屋棟ともに、直接基礎である。軸力の大きなRC壁直下には柱状改良を行い、建物重量を支持層に伝達させている。その他の箇所は表層改良を行い、布基礎またはべた基礎とすることで軸力を分散させて建物重量を地盤に伝達している。

工事監理者としての責任と役割の明確化

本建物の工事着工時期は、ちょうど耐震偽装問題が明るみになった直後であった。同時に、構造設計者の役割が世間に認知された時期でもある。そこで、本工事においては、意匠・構造・設備の設計三者が連名で工事監理者として工事看板に名を記すことにより、それぞれの役割と責任を明確にした（**写真４**）。

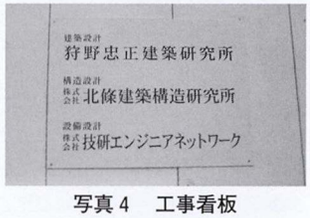


写真４　工事看板

鉄骨の工作段階において、ガセットプレートの取り付けなどの際、溶接による熱が入ることにより、柱に大きく歪みが出た。本建物においては、水平力を耐力壁または壁面ブレースに負担させており、柱の鉛直支持能力に問題ないと判断し、歪みの出た柱部材を矯正して工作を行っている。

板厚の薄い鉄骨を主架構に使用する際に、溶接による歪みをどのようにして抑えるか、どこまでの歪みを許容してもよいのか、また矯正方法は適切であるかなどが今後の課題として残った。

（ひろた　うきょう）

追悼

京都大学名誉教授・元日本建築協会副会長

横尾義貫先生を偲んで

京都大学名誉教授　中村恒善

横尾先生は平成19年１月28日に逝去されました。享年93歳でした。誠に痛惜の念に堪えず、ここに謹んで追悼の言葉を申し述べます。

横尾先生の学術上のご業績については、すでに昭和61年度日本建築学会大賞受賞の際にも、また昭和62年勲二等瑞宝章叙勲の際にも紹介されたので、ここでは、横尾先生の構造実務に対する問題認識やご卓見など筆者の存じ上げている側面を述べて、先生を偲ぶことといたします。

横尾先生は昭和24年に京都大学教授に就任され、土木工学教室、工学研究所、防災研究所勤務を経て、昭和34年建築構造学講座担任教授に就任された。昭和39年から３年間は名古屋大学教授として同大学建築学科創設に尽力された。先生は次々に新しい組織に移って交友関係を広げ、新しい組織づくりや、新しい研究分野への進出に積極的であった。交流を通して触発されるところが多く、また一段と広い視野で関係分野全体を俯瞰して、その中の難問題の存在原因やそれにかかわる新しい問題の所在を的確に捉えることが出来るということであったと思われる。その間、先生は原子炉用構造物の設計法の研究を通じて、構造物設計者の立場も経験された。

先生の研究対象は、部局の移動を重ねるにつれて多岐にわたり、シェル構造・膜構造から鉄骨構造へ、さらに地盤・基礎構造から防災工学へと広がり、各分野で新鮮な着想で独創的業績を上げられた。学界でのご活躍も日本建築学会だけにとどまらず、日本鋼構造協会、土質工学会、国際シェル構造学会に及び、さらに関連する日本建築協会や実務的な協会等においても副会長あるいは理事・委員長として関係分野の進展に大きく寄与された。

先生は建設省、文部省、京都市、名古屋市の審査会、審議会などの委員、専門委員として建築行政にも貢献され、平成３年からは日本建築総合試験所理事長として公的試験機関・指定認定機関等の業務の充実・発展に多大の貢献をされた。これらの幅広い活動は先生の視野を拡大し、それにつれて見えてくる社会システムの要改善箇所について俯瞰的考察を刺激し、論説活動や提言に結実することになったと思われる。

時の流れの中で発生した重要課題について、先生は活発な執筆活動をされただけでなく、いろいろの議論・検討の場を演出することにも尽力された。教職ご在職中から建築構造技術者のあるべき姿、目指すべき方向に関して数々の卓見を提示されていたが、特に阪神大震災を契機として、論説「構造技術者の社会性」（日本建築協会誌「建築と社会」1995年10月号）では、耐震性能の社会性を論じ、構造技術者の社会的認知へ向けての法改正を提唱された。また阪神大震災の惨状の根本原因の一つとして不良施工問題を指摘し、工事監理の必要性を強調されるとともに、自ら「建築法制度懇談会」を招集して、建築物の工事監理業務の明確化と監理者権限の強化及び第三者検査機関の設置を柱とする建築物品質改善方策と法制化へ向けての提言をその検討報告書（平成９年）に取りまとめられた。さらにその後も建築法制度の仕組みについて論じ、あるべき筋道を明示された。晩年には、その思考の線上で、日本国の構造改革の行動原理としても、個人生活の望ましい行動様式としても、「縦社会の中には横糸的横断的『横ばたらき』が必要である」と提唱された。

横尾先生の学術上達成されたご功績のみならず、社会的貢献もまた誠に多大であり、共に永く称えられるものと信じます。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



横尾義貫（よこお　よしつら）氏略歴

1914　７月13日佐賀県に生まれる
1939　京都帝国大学工学部建築学科卒業
　　佐世保海軍建築部に勤務
1942　京都帝国大学助教授
1948　工学博士（京都大学）
1949　京都大学教授
1964　名古屋大学教授（京都大学教授を併任）
1967　京都大学教授（名古屋大学教授を併任）
1968　文部省学術審議会専門委員
1969　日本建築センター鉄鋼系委員会委員長
1970　日本建築協会副会長
1971　建設省技術審査会委員
1975　建設省住宅局建築審議会委員
1976　文部省大学設置審議会専門委員
　　日本学術会議構造研究連絡委員会委員
1977　京都大学退官
　　豊橋技術科学大学副学長
　　京都大学名誉教授
1978　日本学術会議第11期会員
1980　豊橋技術科学大学教授
1985　豊橋技術科学大学退官
　　豊橋技術科学大学名誉教授
1987　勲二等瑞宝章受賞
1991　日本建築総合試験所理事長
1994　京都国際木造建築カレッジ校長
1996　日本建築総合試験所顧問

環境省主催のセミナーふたつ

環境省は、揮発性有機化合物（VOC）の効果的な排出抑制と改正大気汚染防止法、またアスベスト飛散防止対策を徹底するためのアスベスト測定最新の話題を取り上げ、㈳全国環境保全推進連合会（全環連）に委託してセミナーを実施する。受講は無料。

いずれのセミナーも、問い合わせ・申し込みは全環連へ。〒113-0033 東京都文京区本郷3-14-10 泰生ビル、TEL 03-5684-5730、URL：http://www.napec.or.jp

■塗装作業におけるVOC自主的取組推進セミナー

日　時　2007年3月16日(金) 13：00～16：00
　　大阪：大阪府社会福祉会館5階・ホール
　　2007年3月17日(土) 13：00～16：00
　　福岡：福岡県中小企業振興センター401号室

定　員　各会場100名

- 改正大気汚染防止法におけるVOC排出抑制制度
- 塗装における自主的取組
- VOC対策における塗装作業の見直しポイント
- VOC代替塗料・塗装法と排出抑制装置の導入効果

■環境大気中におけるアスベスト測定法セミナー

日　時　2007年3月20日(火) 14：00～16：30
会　場　国立オリンピック記念青少年総合センター
　　カルチャー棟1階・小ホール
定　員　250名

- 環境省におけるアスベスト大気濃度調査の実施状況及びモニタニリング手法の検討状況
- 位相差顕微鏡によるアスベスト測定法の概要
- 電子顕微鏡によるアスベスト測定法の概要

N値とその利用技術講習会

各種構造物の設計や耐震設計において、N値の活用と留意点を示すことで新たな方向性をさぐる講習会。

日　時　2007年3月15日(木)、16日(金)
会　場　コクヨホール（東京都港区港南1-8-35）
講　師　日本工業大学・東海大学・東京電機大学の教授、間組などの技術者ら8名による8テーマ
受講料　23,000円（テキスト代含む）
申込み　3月14日までに、主催の総合土木研究所へ。講習会のテーマ、申し込み方法などは総合土木研究所のホームページhttp://www.kisoko.co.jpを参照。

UIA2011の早期割引登録制度

国際建築家連合（UIA）は2011年9月25日（日）～10月1日（土）に開催されるが、1万人の大会参加者を目標にUIA2011東京大会日本組織委員会（議長：槇文彦）では、早期割引登録制度を導入した。

正規登録料5万円の40%割引制度は上記事務局にFAX 03-3408-7129で申し込むのを原則とし、先着400名を受け付ける。なお、本年3月10日以降の申し込みは、2007年度の早期登録となる。

詳しくは、http://www.jia.or.jpを参照。

小規模多機能サービス拠点の計画に関するシンポジウムII

「施設から地域へ・住宅へ」とのトレンドに対応する新たなサービスとして、小規模多機能型居宅介護には期待が寄せられている。㈳日本医療福祉建築協会では建築的な視点からこの調査研究を行っており、成果をもとに一般公開のシンポジウムを企画した。広く参加者を募っている。参加費無料。

日　時　2007年3月26日(月) 10：00～17：00
会　場　建築会館ホール（東京都港区芝5-26-20）
定　員　300名（先着順）
申込み　①参加者名②勤務先③連絡先TEL/FAX/E-mailを書いて、E-mail、FAXで㈳日本医療福祉建築協会小規模シンポ係へ。
　　E-mail：jiha@mars.dti.ne.jp
　　FAX 03-3453-7573

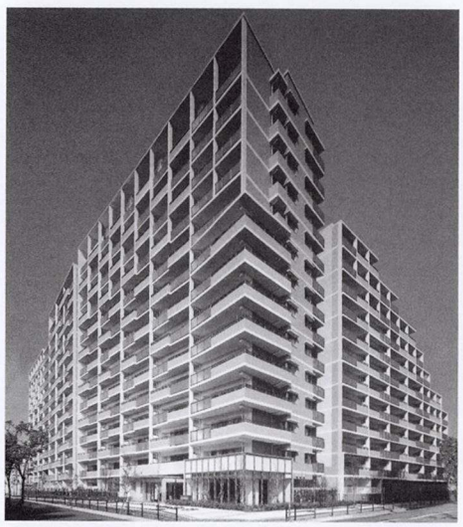
- 小規模多機能型居宅介護のいまとこれから／川尻良夫（厚生労働省老健局計画課課長）
- 高齢者の生活を支える小規模多機能の姿／柴田範子（NPO法人「楽」代表）
- 小規模多機能サービスの考え方／三浦研（大阪市立大学大学院助教授）
- 小規模多機能サービス拠点の事例紹介と計画上の留意点／山口健太郎（国立保健医療科学院協力研究員）
- 改修にあたっての留意点／井出良三（良建築設計事務所代表取締役）
- シンポジウム「小規模多機能サービスの実践からみる可能性と課題」―パネリスト：竹内健二（レインボー西宮）石川裕子（鞆の浦・さくらホーム）長谷川和子（松ぼっくり）、コメンテータ：牧嶋誠吾（大牟田市保健福祉部）三浦研、司会：石井敏（東北工業大学教授）

第20回大阪市ハウジングデザイン賞受賞作品

20回目を迎えた大阪市ハウジングデザイン賞の対象となる民間マンションは、大阪市内に平成13年4月1日～平成18年5月31日に完成したもの。①居住者や地域のニーズに合っているもの②デザイン・配置・間取りが良く、魅力があるもの③新しい技術やアイデアを取り入れて、生活スペースとして快適なもの④人にやさしいすまいづくりの観点から、適切な配慮がなされているもの⑤既存住宅を有効に活用し、すぐれた改造・増築が行われているもの⑥行き届いた管理……等々で広く推せんを募ったところ、101点の応募が寄せられた。審査委員会（委員長／徳矢典子弁護士ほか6委員）で書類審査・現地調査を経て、下記2作品が受賞した。

▶ウィズパークス大阪ガーデンコート（分譲）

先駆的な公営住宅団地として評価された市営古市団地の一部売却用地に建設された分譲住宅。屋上や駐車場壁面の緑化、地域に開放された集会所、道路に面して玄関を持つ1階住戸など周辺との調和やコミュニティを意識して計画された生活感あふれる集合団地。



所在地／大阪市城東区古市2丁目
設計／㈱遠藤剛生建築設計事務所
施工／東海興業㈱・大豊建設㈱共同企業体
構造規模／RC造、14F、B1F、231戸

▶鎗屋アパートメント（賃貸）〈特別賞〉

昭和43年に建った事務所ビルをコンバージョンし、再生した賃貸共同住宅。構造補強や設備改修を行うとともに、新たな魅力を加える工夫がなされ、比較的若い年齢層に多様な居住の場を提供している。建築ストックの住宅への再生分野で特別賞を受賞。



所在地／大阪市中央区鎗屋町1丁目
設計／㈱アートアンドクラフト
施工／㈱建創
構造規模／RC造、6F、B1F、住戸9戸＋店舗1戸

ATC関西学生卒業作品展

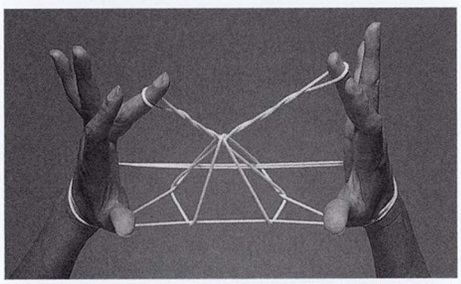
建築、インテリア、環境デザイン、プロダクトデザインなど関西のデザイン系学生による卒業作品展「創っ展〈ツクッテン〉」は、制作者と来場者が語り合い、感性を高め合う場で、参加校約20校の学生が企画から運営に至るまでをつくり上げていく。入場無料。

会　期　2007年3月17日(土)～21日(水・祝)
10：00～18：00

会　場　ATCビル　ITM棟10階・11階特設会場
大阪デザイン振興プラザ TEL 06-6615-5510
大阪市住之江区南港北2-1-10

世界あやとり紀行展

アフリカ、オセアニア、極北圏、北南米大陸でも親しまれてきた「あやとり」。国際あやとり協会(ISFA)は、これまで3000種以上のあやとりを採集してきた。それらには天文、自然現象、生き物、暮らしのかたち、神話や呪術まで、コミュニケーションツールとして国ごとに多様な造形が存在している。



アルゼンチンのパタゴニア地方のあやとり「火山」
実演／国際あやとり協会会員　撮影／田淵　暁

会　期　2007年3月2日(金)～5月25日(金)
10：00～18：00　水曜日と3/26～4/13は休館

会　場　INAXギャラリー大阪　TEL 06-6733-1790
大阪市中央区久太郎町4-1-3　伊藤忠ビル

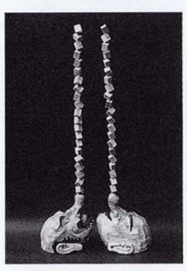
具像彫刻 UNIT STRUCTURES

“等質”“同質”“異質”を追い続けてきた千葉在住の彫刻家こんのげん氏が、建築材（3×4×6cmにカットした垂木、コンパネ、足場管）を使った具像彫刻展を開催。

同質な小木片を積み上げ、削り、人の形を作り出す、同質から異質への過程。塗りは漆と顔料、白土が主。

会　期　2007年2月10日(土)～4月10日(火)

会　場　destination TOKYO　TEL03-3350-5027
東京都新宿区新宿3-38-1
ルミネ エストB2階
最寄駅　新宿駅東口



●こんのげん
プロフィール
1986年　東京芸術大学美術学部彫刻科卒業
1988年　同上　大学院修了
1990年　同大学院保存修復技術修了
1988年より作家活動に入る

「近世 都の工芸～京の美意識と匠の世界～」展

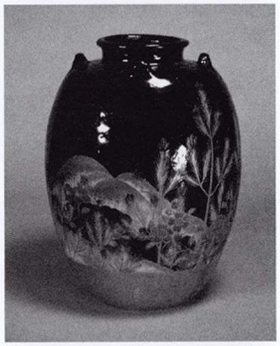
工芸が大きく華開いた近世京都の、洗練された美意識や匠の高度な技を、約220点出品する。

会　期　2007年2月24日(土)～3月31日(土)
10：00～18：00、月曜日休館(祝日の時は翌日)

会　場　京都文化博物館・4階特別展示室
京都市中京区三条高倉　TEL 075-222-0888

入場料　一般1,000円、大高生700円、中小生400円

展示構成
- プロローグ／京・職人と商人の町―描かれた職人―（職人尽絵や洛中洛外図に見る）
- 桃山の革新（高台寺蒔絵や南蛮漆器など）
- 古典の復興や雅の意匠（江戸前期の風雅な工芸品）
- コラム／諸芸と工芸（能、花、茶道、香道、などとのかかわりの中で育まれた工芸品）
- 琳派の成立とその展開（尾形光琳・乾山など江戸中期の工芸品）
- 復古と創造（復古文人趣味や、江戸後期の工芸品）
- エピローグ／都の工芸と評判（職人関連文書や評判記）



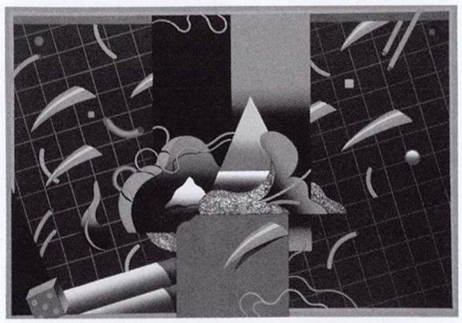
野々村仁清「色絵若松図茶壺」
文化庁蔵　重要文化財

招待券希望者は日本建築協会(TEL 06-6946-6981)へ。

西宮市大谷記念美術館「新収蔵品展」

2005年度に寄贈を受けて新たに収蔵品に加わった作品を公開することで、西宮市大谷記念美術館の収集活動を紹介する。

作家や所蔵家より寄贈を受けた作品と資料は、合計30点。



黒崎彰「虹のアラベスク」1980年

油彩画――現代美術家・金月炤子(きんげつしょうこ)5点1組、洋画家・小西保文4点。立体――サウンド・アーティスト藤本由起夫2点。版画――木版画家・黒崎彰4点、現代美術家・松谷武判(たけさだ)13点。素描――ランドアーティスト・大久保英治1点。写真――彫刻家・植松奎二の写真3点、資料――抽象画家・津高和一(つたかわいち)2点。

会　期　2007年2月17日(土)～3月25日(日)
10：00～17：00　水曜日休館
ただし3/21(水・祝)は開館、翌22日は休館

会　場　西宮市大谷記念美術館　TEL 0798-33-0164
兵庫県西宮市中浜町4-38
阪神「香櫨園」駅下車、南西へ徒歩6分

入館料　一般500円、高大生300円、小中生200円

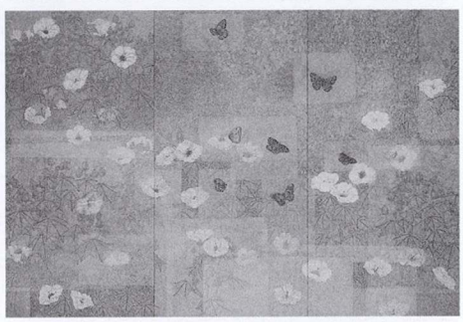
招待券希望者は、日本建築協会(TEL 06-6946-6981)へ。

公募展・第13回松伯美術館花鳥画展

㈶松伯美術館は、公募展のため花鳥画を募集した。

今年1月15日の締め切りで、全国から107点の花鳥画が寄せられた。50歳以下に限定した今回の公募には10代から50歳まで104人が応募し、1月21日の審査(委員：岩倉寿、上村淳之、竹内浩一、手塚雄二、星野哲弘、宮廻正明）の結果、大賞1点・優秀賞4点を含め35点の入選が決まった。

大賞を受賞したのは、東京都台東区在住の長田佳子(おさだよしこ)さん（23歳）。



大賞「花奪(はなば)い」　受賞者：長田佳子（東京都台東区）

会　期　2007年2月13日(火)～3月23日(金)
10：00～17：00　月曜日休館

会　場　①松伯美術館
奈良市登美ヶ丘2-1-4　TEL 0742-41-6666
②大和文華館・文華ホール
奈良市学園南1-11-6　TEL 0742-45-0544

入館料　大人800円（高大生含む）、小中生400円
（大和文華館・文華ホールは上記入館料で入場可）

展　示　入選作品35点（①②会場にて）
特別出品―上村松園「新螢」「化粧」、上村松篁「双鳩」「若い鷹」、上村淳之「月汀」（①会場にて）

早春の松伯美術館へ、さらに大和文華館へ足を延ばしてみようという方は、日本建築協会へ問い合わせられたい。

「狭山池のかたち」展

田中家に伝わる「池守田中家文書」（総数13,000点以上）の中から、大阪府立狭山池博物館では狭山池や狭山池の流域が描かれた近世の絵図を取り上げる。作成目的ごとに違う絵図の描き方や、改修工事によって変化する狭山池のかたちをたどろうとするもの。

■特別公開「狭山池のかたち」（入場無料）

会　期　2007年3月17日(土)～5月6日(日)
10：00～17：00　月曜日休館(祝日の場合は翌日)

会　場　大阪府立狭山池博物館・1階特別展示室
大阪狭山市池尻中2丁目　TEL 072-367-8891

■歴史学セミナー（参加無料）

テーマ　「河内国絵図と狭山池」

講　師　副島雅藏（花園大学名誉教授）

日　時　2007年3月24日(土) 14：00～16：00

会　場　大阪府立狭山池博物館ホール（先着順126名）

■歴史ハイキング「狭山池と天野街道」（定員30名）

日　時　2007年4月22日(日) 13：00～16：00

集　合　大阪府立狭山池博物館

コース　狭山池博物館～三都神社～堺市岩室・観音院

解　散　「岩室」バス停付近解散

参加費　無料。交通費などは自己負担

申込み　往復ハガキに氏名・年齢・住所・電話番号を記入し、4月7日までに大阪府立狭山池博物館へ。

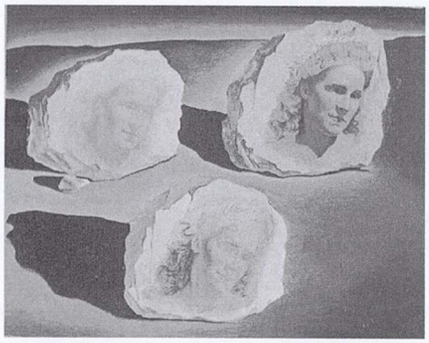


狭山池西除（にしよ）ケ略絵図　文化2年（1805）
―狭山池の西除が洪水により崩れている様子を描いている

ダリ展―創造する多面体

故郷スペインのカタルーニャを思わせる荒涼とした大地を背景に、見方によって違った姿に変化する「ダブル・イメージ」などの技法を駆使して描かれた作品は、心の底に横たわる非日常の世界を呼び覚ます。

スペインのダリ財団およびアメリカのダリ美術館の協力の下、サントリーミュージアム〔天保山〕では、サルバドール・ダリ（1904～1989）の油彩画約40点を含め手稿やドローイングなど約180点を展示し、夢と現実が白昼夢のように融合したダリの芸術を紹介する。



サルバドール・ダリ《3つのガラの顔の出現》
油彩、ボード、1945年

会　期　2007年3月8日(木)～5月6日(日)
10：30～19：30　会期中無休

会　場　サントリーミュージアム〔天保山〕
大阪市港区海岸通1-5-10
地下鉄中央線「大阪港」駅下車、徒歩5分

入場料　大人1,300円、高大生・60歳以上1,000円
小中生600円(5/5はギャラリー、シアター無料)

招待券希望者は、日本建築協会(TEL 06-6946-6981)へ。

■記念講演会・千足伸行（成城大学教授）

日時／3月17日(土) 14：00～15：30、会場／海遊館ホール、定員／250名（聴講無料・先着順）

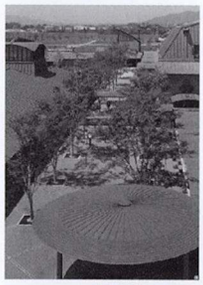
徳岡昌克の建築世界 作品展

57年間「建築とは何か」を追い続けてきた徳岡昌克さん（76歳）は、2008年には徳岡昌克建築設計事務所を創設して25年となるのを機に、「徳岡昌克の建築世界 作品展」を開催する。

会場は、兵庫事務所があるビルの、同じ3階。「建築家は身近な所から発信するのが大事」と言う徳岡さんが、来場者にいつでも挨拶に行けるように選んだ場所だ。

「本質的に光と影が建築を創る」を信条とする徳岡さんが建築設計する際は、その土地の状態、気候、地味、人情、固有の文化から示唆を得ていると言う。

今回の作品展では、福岡県に建つ受賞作を中心として、22作品が展示されている。入館無料。



三輪町複合施設
めくばーる三輪



徳岡昌克氏

会　期　2007年3月1日(木)～3月31日(土)
9：30～19：00　日曜、祝日は休廊

会　場　ギャラリーゆずり葉
兵庫県尼崎市次屋3-6-60
JR尼崎駅南口より市バス㉓㉔阪急園田行または阪急神戸線園田駅南口より市バス㉓㉔阪神杭瀬行で「次屋」で降車、徒歩4分

展　示　田川文化エリア（福岡県）、碓井町碓井琴平文化館（福岡県）、小石原焼伝統産業会館（福岡県）、三輪町複合施設めくばーる三輪（福岡県）、宝珠山村保健福祉センターいずみ館（福岡県）

詳しくは、徳岡昌克建築設計事務所のホーム頁（http://www.tokuoka-ao.co.jp/）に掲載予定。

大エルミタージュ美術館展―京都市美術館で―

ロシア国立エルミタージュ美術館の300万点ともいわれる膨大なコレクションの中から、「都市と自然と人びと」をテーマに15世紀ヴェネツィア派から20世紀の近代絵画まで、油彩画80点が一堂に会する。

会　期　2007年3月14日(水)～5月13日(日)
9：00～17：00　月曜休館（4/30は開館）

会　場　京都市美術館　TEL 075-771-4107
京都市左京区岡崎公園内
地下鉄東西線「東山駅」下車、徒歩10分

観覧料　一般1,300円、高大生900円、小中生500円

出　品　ピーテル・ヤンセンス・エリンハ《オランダの室内》、グスターフ・ド・ヨンゲ《散歩の後》、フランソワ・フラマン《18世紀の女官たちの水浴》、ジョヴァンニ・パオロ・パンニーニ《聖パウロの説教の場面がある廃墟》、ポール・ゴーギャン《果実を持つ女》、ベルナルド・ベロット《エルベ川から見たビルナの風景》ほか

招待券希望者は、日本建築協会(TEL 06-6946-6981)へ。



ルートヴィヒ・クナウス《野原の少女》　1857年

千代紙いろいろ 小間紙の世界

東京駅丸ノ内駅舎の保存・復原工事のため2012年まで休館している東京ステーションギャラリーは、場所を替えて美術館活動は継続している。

4月から始まるのは、創業200年の東京・日本橋の和紙の“はいばら”の明治・大正・昭和初期の木版摺りの千代紙コレクション。竹久夢二デザインの千代紙や絵封筒も含まれる。入場無料。

会　期　2007年4月10日(火)～7月8日(日)
11：00～18：00　月曜日休館(祝日の場合翌日)

会　場　旧新橋停車場・鉄道歴史展示室
東京都港区東新橋1-5-3　TEL 03-3572-1872
JR新橋駅より徒歩5分

日本建築協会

月間の動き 【平成18年12月/19年1月分】

平成18年12月

常設委員長合同会議

委員長合同会議
12月19日（火）16：00～17：30
出席者　設楽編集委員長　瀬戸川事業委員長　上原出版委員長
議　事（1）本年度の事業計画及び事業の経過について
（2）来年度各委員会事業の目標と課題について
（3）その他

編集委員会

第9回編集委員会
12月13日（水）18：15～21：00
出席者　設楽委員長ほか7名
議　事（1）1月号「光り輝く京都の景観まちづくり―再生から創生へ―」特集経過報告
（2）2月号「学校新時代」特集経過報告
（3）3月号「東海支部3部作」特集の企画
（4）4月号「90周年記念号」特集の企画
（5）5月号計画系特集の企画
（6）6月号インテリア・住宅系特集の企画
（7）7月号設備特集の企画
（8）作品作風、広告企画、各分科会からの報告
（9）読者と選ぶ「建築と社会」賞の実施ほか
（10）収支状況報告
（11）誌面刷新について検討

第2回計画系分科会
12月11日（月）17：00～21：20
出席者　三宅幹事ほか5名
議　事　2007年5月号計画系特集の企画

第2回インテリア・住宅系分科会
12月5日（火）18：30～20：30
出席者　高野委員ほか2名
議　事　6月号「わがままな家」特集の企画

第10回構造分科会
12月1日（金）18：00～19：30
出席者　中塚幹事ほか4名
議　事（1）「構造の頁」の企画
（2）構造特集の件
（3）広告の企画
（4）情報交換
（5）4月号「90周年記念号」企画経過報告

第5回設備分科会
12月6日（水）18：00～19：30
出席者　赤澤幹事ほか4名
議　事（1）編集委員会報告
（2）4月号「90周年記念号」の経過報告
（3）「設備の頁」の企画
（4）"測定機器シリーズ"頁の検討
（5）2007年7月号設備特集の企画

第9回法令分科会
12月1日（金）16：00～17：45
出席者　赤井幹事ほか6名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）「90周年記念号」の企画の状況
（3）情報交換

第9回作品作風小委員会
12月25日（月）19：00～20：00
出席者　井上副委員長ほか5名
議　事（1）作品の選定・資料請求報告
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）前回の編集委員会の報告
（5）90周年記念企画号委員会からの報告

第9回広告企画小委員会
12月13日（水）17：00～18：10
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）1月号「光り輝く京都の景観まちづくり―再生から創生へ―」特集経過報告
（2）2月号「学校新時代」特集経過報告
（3）3月号「東海支部3部作」特集の企画
（4）4月号「90周年記念号」特集の企画
（5）単発広告企画頁のテーマとその具体化
（6）広告掲載状況
（7）収支状況報告

第4回90周年記念号企画委員会
12月4日（月）18：00～21：00
出席者　設楽編集委員長ほか5名
議　事　4月号「90周年記念号」の企画

第5回90周年記念号企画委員会
12月19日（火）18：00～21：15
出席者　設楽編集委員長ほか7名
場　所　安井建築設計事務所
議　事　4月号90周年記念号「この10年、これからの10年」特集の具体化

出版委員会

第8回出版委員会
12月21日（木）18：00～19：00
場　所　『豆助』（マルビル3階）
出席者　上原委員長ほか10名
議　事（1）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（2）進行中のテーマ報告　3件
（3）来年度の出版委員会について

教育委員会

第1回講習会小委員会　講師打合せ
12月4日（月）17：00～18：00
出席者　有光副委員長ほか講師2名
議　事（1）テキスト変更点・改訂について
（2）講習会日程について

第2回工高生教育小委員会
12月1日（金）18：00～19：00
場　所　OMMビル2階6号会議室
出席者　和田副委員長ほか7名
議　事（1）第52回工高生デザインコンクール実施報告
（2）第53回工高生デザインコンクール募集規定について

第7回日本建築協会賞

第4回日本建築協会賞選考委員会
12月7日（火）15：00～16：30
出席者　金多委員長ほか8名
議　事（1）第7回応募作品の問題点について
（2）今回の審査結果について
（3）今後の予定

平成19年1月

理事会

第7回常任理事会
1月25日（木）16：00～17：30
出席者　佐野会長ほか7名
議　事（1）平成18年度収支見込について
（2）平成19年度常設委員会事業計画について
（3）後援・協賛名義などの使用について
（4）第7回日本建築協会賞の選考について
（5）その他

編集委員会

第10回編集委員会
1月10日（水）18：30～19：30
出席者　設楽委員長ほか2名
議　事（1）2月号「学校新時代」特集経過報告
（2）3月号「東海支部3部作」特集経過報告
（3）4月号「90周年記念号」経過報告と広告企画
（4）5月号以降の特集企画
（5）作品作風、広告企画、各分科会からの報告
（6）誌面刷新についての検討
（7）読者と選ぶ「建築と社会」賞の実施
（8）収支状況報告

第3回計画系分科会
1月16日（火）17：00～21：00
出席者　三宅幹事ほか3名
議　事　2007年5月号計画系特集の企画

第7回建築計画系分科会
1月26日（金）18：30～20：00
出席者　荒木委員ほか4名
議　事　2007年8月号特集について

第3回インテリア・住宅系分科会
1月9日（火）18：30～20：30
出席者　高野委員ほか3名
議　事　6月号インテリア・住宅系特集の企画

第11回構造分科会
1月12日（金）18：00～20：00
出席者　中塚幹事ほか3名
議　事（1）4月号「90周年記念号」経過報告
（2）「構造の頁」の企画

（3）委員の増員の件
（4）12月号構造特集の件
（5）広告の企画
（6）勉強会について

第6回設備分科会
1月17日（水）18：00～20：20
出席者　梶井委員ほか3名
議　事（1）委員の動向
（2）4月号90周年記念号「この10年、これからの10年」特集の報告
（3）「設備の頁」の企画
（4）“測定機器シリーズ”頁の企画
（5）2007年7月号設備特集の企画

第10回法令分科会
1月9日（火）14：00～15：40
出席者　赤井幹事ほか4名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）4月号「90周年記念号」の企画
（3）分科会幹事の担当について
（4）情報交換

第10回作品作風小委員会
1月25日（木）19：00～20：00
出席者　井上副委員長ほか8名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）前回の編集委員会の報告
（5）90周年記念企画号委員会からの報告

第10回広告企画小委員会
1月10日（水）17：00～18：15
出席者　設楽委員長ほか4名
議　事（1）2月号「学校新時代」特集報告と広告
（2）3月号「東海支部3部作」特集経過報告
（3）4月号「90周年記念号」経過報告と広告企画
（4）5月号以降の特集企画
（5）単発広告企画頁のテーマとその具体化
（6）広告掲載状況
（7）収支状況報告

第6回90周年記念号企画委員会
1月11日（木）18：00～20：15
出席者　設楽編集委員長ほか3名
場　所　安井建築設計事務所
議　事　4月号創立90周年記念号「この10年、これからの10年」特集の具体化

第7回90周年記念号企画委員会
1月24日（水）18：00～21：45
出席者　設楽編集委員長ほか3名
議　事　4月号創立90周年記念号「この10年、これからの10年」特集

事業委員会

第6回情報見学小委員会
1月11日（木）18：00～19：00
出席者　瀬戸川委員長ほか11名
議　事（1）茶室見学会について
（2）来年度事業案件について

見学会

第23回茶室見学会
1月27日（土）14：00～16：00
場　所　朝雲庵
講　師　中村 昌生/京都工芸繊維大学名誉教授
参加者　34名

出版委員会

第9回出版委員会
1月18日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか6名
議　事（1）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（2）進行中のテーマについて　2件
（3）その他

教育委員会

第2回講習会小委員会　講師打合せ
1月9日（火）17：00～18：00
出席者　有光副委員長ほか講師2名
議　事（1）テキスト変更点・改訂について
（2）講習会日程について

第3回工高生教育小委員会
1月19日（金）18：00～19：30
出席者　和田副委員長ほか8名
議　事（1）第53回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討
（2）今後の作業予定
（3）その他

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕
斉藤　二郎
（斉藤建築積算事務所）

●訃報
〔名誉正会員〕横尾　義貫氏（京都大学名誉教授）
和田　精一氏
藤井　重信氏
〔個人正会員〕渡邊　正夫氏

●会員の横顔―山田修氏―

伊丹市に生まれ育ち、大阪市立工芸高校を最後に教職を退いた山田修さん（78）は、日本建築協会の出版委員として、今も本づくりに奮闘している。

日本建築協会が創立60周年記念事業としてスタートさせた「建築技術選書」「〈プロのノウハウ〉シリーズ」、70周年記念事業の「建築特装版」は、学芸出版社とタイアップした出版委員会の労作である。

出版委員会が1977年に再スタートを切ったとき以来の委員メンバーで、山田さんの委員歴は30年になる。その間手がけた技術選書は39冊、〈プロのノウハウ〉シリーズが47冊、特装版14冊の計100冊に及ぶ。

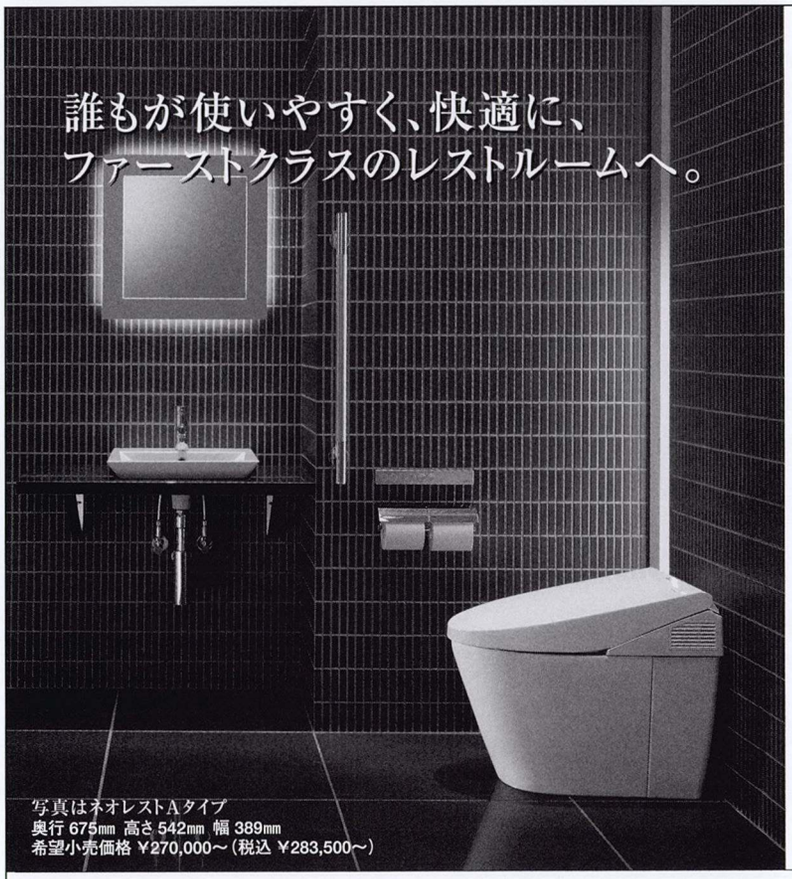
一方、韓国古文化研究会を主宰する韓国通で、たびたびの韓国訪問は『韓国古寺探訪』『韓国古寺探訪の魅力』（学芸出版社）、『韓国古刹ハイキング』（相模書房）に結実している。

2月の土曜日の午後は、伊丹市立中央公民館で韓国古寺探訪4回シリーズ講演会を終えたところだ。

一昨年、昨年と続けて出版した『建築のウンチク』、そして出版50冊目となる『続・建築のウンチク』では、自転車に乗って街をめぐり、絵と写真をふんだんに使い、デザインを検証し、建築基準法違反の建物をあぶり出している。「80歳になるまで書き続ける」と山田さんは意気軒昂だ。

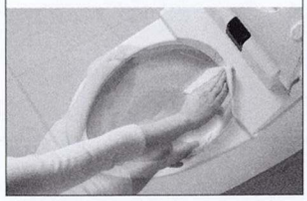




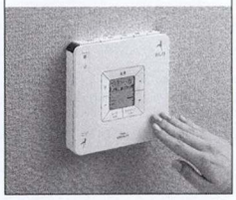


やります「生活環境企業」。
TOTO

便器のフチと一緒に
サッと拭くだけ
「フチなしウォシュレット
&フチなし形状（便器）」



四隅にスイッチ、
広い操作範囲
「フラットリモコン」
※スティックリモコンもご用意しています。



「オート開閉・オート便器洗浄」
自動で便ふたの開閉、便器の洗浄。腰を曲げる、身体をひねるなどの無理な動作をなくし、楽にトイレが使えるようになります。

「節水・6リットル」
便器洗浄水量を8Lから6Lへ。さらに男子小用時（立ち姿勢）のオート便器洗浄水量を4.5L※1に。※1 男子小用時（立ち姿勢）のオート便器洗浄のみ。

WASHLET®
NEOREST

名古屋支社／〒460-0008 名古屋市中区栄2-3-1 名古屋広小路ビルヂング16F ☎(052)201-0201
ホームページ専門家コーナー www.com-et.com

水まわりからCO2を減らそう。
チーム・マイナス6%

まいにちにユニバーサルデザインを TOTO

《プロのノウハウ》 企画・日本建築協会

現場で学ぶ 住まいの雨仕舞い



玉水新吾 著
TAMAMIZU Shingo

定価2100円（本体2000円）
四六判・224頁 ISBN4-7615-2390-5

〈本書の内容〉

序 雨が漏る前に
第1章 住宅の雨漏りとは
第2章 雨漏りの要因
第3章 雨漏りの事例（屋根～軒先編）
第4章 雨漏りの事例（外壁編）
第5章 雨漏りの事例（バルコニー編）
第6章 雨漏りさせないために

雨漏り事例をもとに説く
トラブルのない家づくり

学芸出版社 〒600-8216 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
tel 075-343-0811 fax 075-343-0810
http://www.gakugei-pub.jp/ E-mail info@gakugei-pub.jp

LINAX
For Precious Life

超節水トイレ ECO6 誕生。

超節水エコシックス シリーズ

エコロジーにつながるテクノロジー。

13ℓから6ℓへ。節水というエコロジー。
わずか6ℓでも強力洗浄。汚れを洗い流し、しっかり排出します。

エコロジーはエコノミー。
たった2日で、バスタブ1杯分以上の節水効果※1。
年間約12,000円セーブできます。※2



株式会社INAX　中部統括支社　☎052-310-1700　愛知県名古屋市東区東桜1-4-16　ホームページ　http://www.inax.co.jp/

※1.浴槽サイズは180ℓで算出。　※2.試算条件：4人家族（男性2人・女性2人）で、大1回／人・日、小3回／人・日 使用した場合。上下水道料金265円／㎥（税込）［省エネ・防犯情報提供事業研究会によるガイドライン引用］で計算。

三和シャッター

安心・安全・快適



人にやさしく・街にやさしく。

三和シャッターは、お客様に
「安全・安心・快適」を提供することを、
グループの使命に掲げ、
商品・サービスの提供に努めています。
生活に触れ、暮らしに関わる製品をお届けし、
安らぎのお手伝いができたら……
お客様の"笑顔"に出会うため、
三和シャッターは、これからも創造の芽を
育んでまいります。

三和シャッター工業株式会社　本社　〒163-0478 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル52階　Tel.03-3346-3011（お客様相談センター）http://www.sanwa-ss.co.jp/

『信頼性』と『設計の自由度』の提供

ハイパー　メガ

国土交通大臣認定 TACP-0210:0212-0214

Hyper-MEGA工法

Hyper-MEGA工法は、節杭を使ったプレボーリング系高支持力工法です。確実な施工を行うために、あらゆる地盤に応じた施工パターンを開発しています。拡大部を自由に変えられるため、建物に応じた支持力が選べる工法です。

ジャパンパイル株式会社
ホームページ：http://www.japanpile.co.jp/

《お問い合わせ先》ジャパンパイル株式会社　中部支社・名古屋支店
〒460-0004 愛知県名古屋市中区新栄町2-4　坂種栄ビル16F
TEL: 052-746-9141　FAX: 052-955-0682

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

OKUJU
Space Creator
クオリティ＆コストパフォーマンス
ALTsシステム
スナップ工法
SP-600
メタルシステム天井
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社オクジュー
本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・南九州・名古屋・上海

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工
ダイダン株式会社
本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士
本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

www.naniwa.com
We have hope
■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作、
株式会社NPGコーポレーション
本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代)　fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代)　fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区新橋6-17-2
tel:(03)3433-5211(代)　fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL　大阪（06）6877－1581

knowledge
防水・人と地球にやさしい建物を目指して

②新しい防水仕上げ材
緑化防水工法・浮き床防水工法

日新工業株式会社

コンクリートに覆われた都市空間は、異常な気温の変化や閉鎖的な景観による圧迫感など、さまざまなストレスの要因になっている。オアシスが砂漠の人々を癒したように緑あふれる都市空間が必要である。

植物によって空気の浄化・蒸発散機能・廃熱吸収機能を働かせ、建物の保護効果や断熱効果のみならず、生態的効果・生理・心理的効果など人為的な装置では得られない幅広い効果が期待できる。

・防水基盤

職種も異なり、今まで難しいとされていた、防水基盤と植栽基盤を合体させて日本の気象条件に合わせ国産化された屋上緑化防水工法がカナート工法で、都市に、建物にやさしい快適住環境を創りだす。

屋上緑化において、防水層は常に水が滞留することが考えられるため、防水層の果たす役割は極めて重要である。また植栽が施された後は、防水層の点検や補修が非常に困難となる。

防水を施したら手を加えず長期間、防水機能を保ち続ける持続性のある防水層が求められ、それに最も適した工法として
都市型環境工法のアスファルト防水工法が設計された。

都市型環境工法のアスファルト防水は従来のアスファルト防水に較べ炭酸ガス発生量を40％、燃料消費量を40％削減し環境を配慮した工法で、財団法人日本建築センターより建築施工技術・技術審査証明を取得した。

・緑化基盤

従来から行われていた屋上緑化は、防水層の上に保護コンクリートを打設して、その上に土を盛り植物を植えていた。土壌の重量が重く、それ以外に樹木の重量も構造的な負担になり、デパートの屋上等一部の建物しか屋上緑化が施工されていなかったが、軽量土壌・排水層・防根層等の開発により緑化基盤と防水基盤が一体化され、通常の建物においても容易に緑化ができるようになった。

・浮き床

屋上緑化で常に問題になるのが歩行部の材料の選定である。

現場打ちコンクリートでの施工は容易であるが、排水方法や潅水設備等の問題 また 仕上げ材も湿式から乾式への変換が求められ、適切な材料がない現状であった。

ここで、独特な発想とオリジナルデザインで設計・開発されたのが浮き床工法のPFシステムである。

PFシステムは今までの防水保護材とは異なり数多くの特徴を有し、屋上緑化の現場で有効に使用されている。　（了）

※防水の豆知識

① 改質アスファルト防水とは？

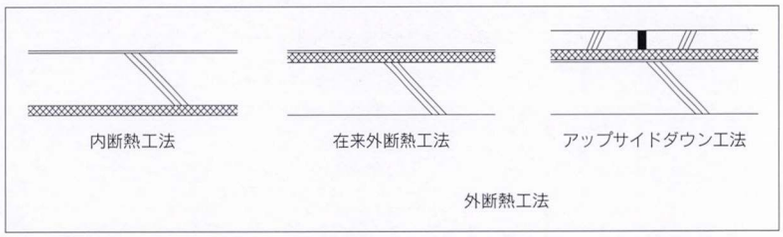
アスファルトに合成ゴムまたは合成樹脂を加え、アスファルトの低温性能や高温性能および耐久性などを改良したものである。使用されている合成ゴムの代表的なものは熱可塑性ゴムのSBS（スチレン・ブタジエン・スチレン）合成樹脂の代表的なものはAPP（アタクチックポリプロピレン）がある。改質アスファルトと基材で構成されたものが改質アスファルトルーフィングで、一般的なアスファルトルーフィングより厚手につくられている。代表的な施工方法としてトーチ工法、粘着工法、熱工法、機械固定工法がある。

② アスファルト断熱防水工法は？

断熱工法にはスラブの下に断熱材を設ける「内断熱工法」とスラブの上に設ける「外断熱工法」がある。

外断熱工法には、断熱材をスラブと防水層の間に施工する露出断熱防水工法と、防水層の上に断熱材を施工し、コンクリートや砂利等で保護する保護断熱防水工法（USD工法）がある。

スラブの上に施工する断熱材は硬質ウレタンフォームを用い、防水層の上に施工する断熱材はスキン層付押し出しポリスチレンフォームが使用される。



緑化基盤　＜カナートのメリット＞

①建物の負荷を低減する軽量システムです。

②社団法人公共建築協会の管理型及び省管理型緑化工法の評価認定を受けたシステムです。

③都市環境を改善するシステムです。

④防水層が保護（防根・衝撃・耐圧）されているシステムです。

浮き床　＜PFシステムのメリット＞

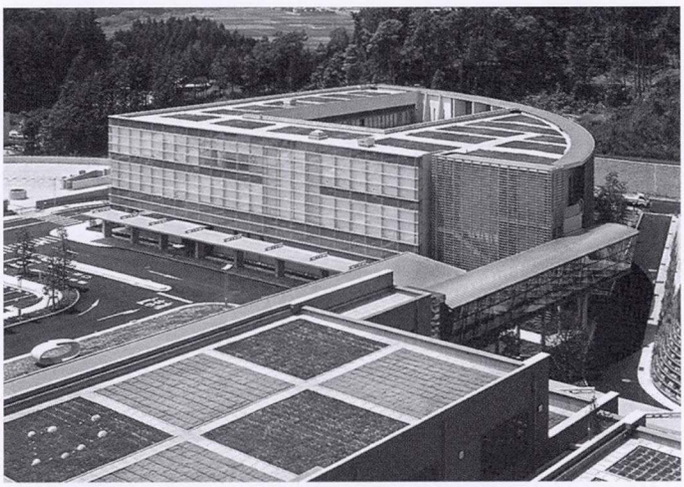
①段差のないフラットな仕上げが出来ます。（バリアフリー）

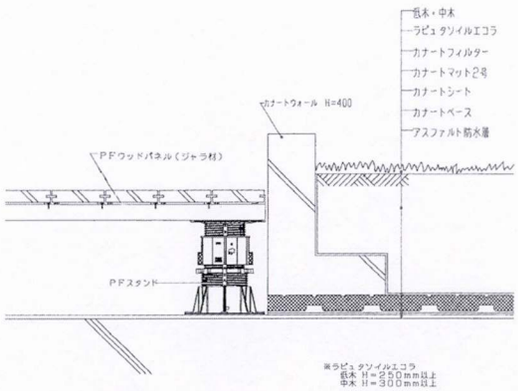
②屋上緑化、ガーデニングなどのレイアウトの設計が自由に出来ます。

③現場打ちコンクリートに比べ固定荷重が低減出来ます。

④防水層のメンテナンスが容易で、PFシステムは再利用可能で持続性のある材料です。

～ 屋上からはじめよう　癒しの空間 ～



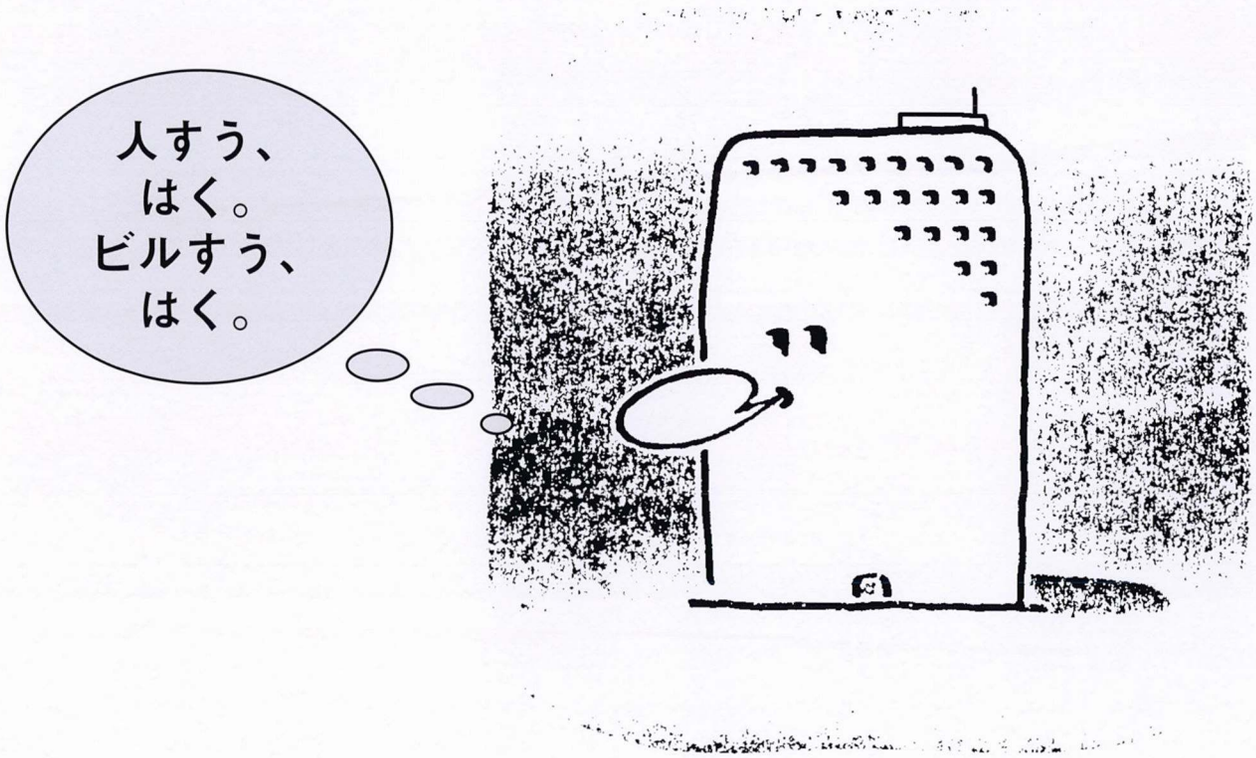


防水総合材料メーカー
ISO9001：2000認証取得（RQ0004）　http://www.nisshinkogyo.co.jp
日新工業株式会社
営業統括■〒120-0025 東京都足立区千住東2-23-4
TEL.03-3882-2571（大代表）FAX.03-3881-8545

http://www.nihon-as.or.jp/
日本アスファルト防水工業協同組合
本　部■〒103-0005 東京都中央区日本橋久松町9-2（日新中央ビル7F）
TEL.03-5644-7651　FAX.03-5644-0594

東熱

おいしい空気贈ります



東洋熱工業株式会社

本　　社　〒104-8324　東京都中央区京橋2-5-12　　TEL 03-5250-4112
大阪支店　〒550-0004　大阪市西区靭本町3-1-27　　TEL 06-6443-8071

建築と社会　2007.03　Vol.88 No.1020　社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 電話：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 http://www.aaj.or.jp
毎月1回1日発行 昭和24年3月19日第3種郵便物認可 ISSN 0912-8182
定価 1,200円（税込）　正会員の購読料は会費に含めて徴収

雑誌　03379-3